

岩波文庫

3848—3849

ドン・ファン・テノーリオ

ホセ・ソリーリャ作
高橋正武譯

7-3
16

岩波書店

BIBLIOTECA CASA

821
20R
don

BIB. MUNPAL. CASA JOSE ZORRILLA



1357112

821 ZOR don

2222





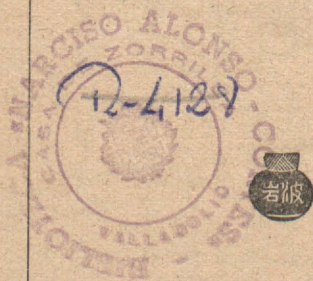
岩波文庫

3848—3849

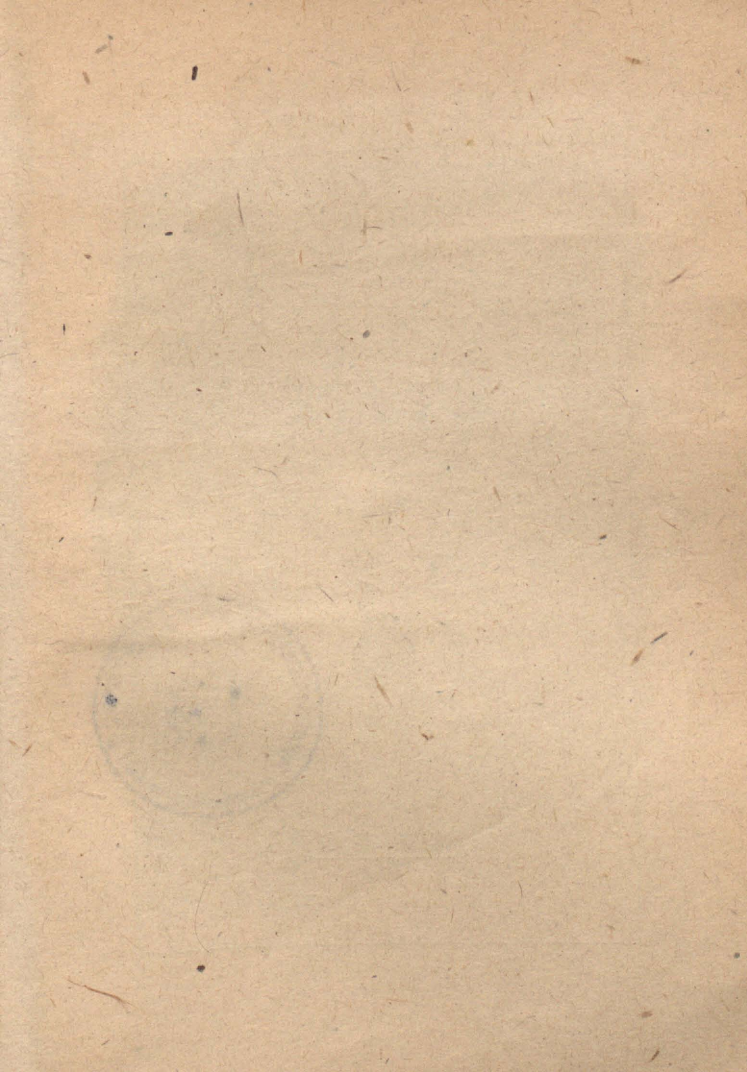
ドン・ファン・テノーリオ

ホセ・ソリーリ^リ作

高橋正武譯



岩波書店



はしがき

ホセ・ソリーリャ作、宗教幻想劇『ドン・ファン・テノーリオ』——
第十九世紀のイスパニヤ・ロマン主義作家のうちで、その仕事の大きさ、多さ、また期間の長い點で、詩壇劇壇の大御所として、誰でもがまず指を折るのは、ホセ・ソリーリャであり、彼の數多い作品のうちで、どれを擇ぶかとなれば、躊躇なくこの『ドン・ファン・テノーリオ』を取ることであらう。

ドン・ファンは、ドン・キホーテとともに、第十七世紀のはじめ、イスパニヤに生れて、どちらも偉大なる世界人となったが、このイスパニヤ民族の濃い血のなかから出生した、誇り高い騎士、ふてくし蕩兒、眞摯なる愛の求道者は、ソリーリャによつて、直系の子孫をえ、その人間性のゆえに世界的な永遠の生命をふたゝび新しくすることが出来たし、ソリーリャは豊かな幻想と高雅な詩韻とをもつて、この眞個のイスパニヤ人を描くことにより、おのれの名を不朽なものにした。

はじめ、わたしは譯筆をとるのに、ある意味で、いさゝかのためらいを持った。そのとき、師永田寛定先生から「Don Juan Tenorio だったら、……一番いゝでしょう。……これは實にイスパニヤ文學そのもののためにする譯業といった態度でかゝる必要があります。小生の el Quijote

(ドン・キホーテ)が、及ばずながら、そんなつもりなのです。」とのお言葉に接し、いまさらに師のお覺悟のほどに頭を下げる思いと同時に、大いなるはげみを感じ、また、同じくホセ・ムニョス先生からは、いつもの優しさで「疑問があつたら、いつでも遠慮しないで言つて來なさい。君が『ドン・ファン』を譯すと聞いて、たいへん嬉しく思います。この作品はイスパニヤでは毎年十一月のころ(萬靈祭ごろ)、上演されるし、その popularidad (人氣、聲價)によつても、イスパニヤ文學のうちで、當然日本語に翻譯されてしかるべき作品の一つですから。」と、兩師の御溫情に、先刻の不安と逡巡をうち拂つた。

兩師の御期待に副いえたかを疑ふとさえ、あえて言わないけれど、數少いイスパニヤ文學の紹介に、ひとつを加ええたことを悦ぶ。

この翻譯に用いたテキストは、マドリード、Sucesores de Rivadeneyra 社發行(1892)

——DON JUAN TENORIO (1844), Drama Religioso-Fantástico Por José Zorrilla
MORAL (1817—1893) の繪入本である。

なお、第二部第三幕の題名は、原作にはないが、他とのつりあいで、譯者が假りにつけたものである。

昭和二十三年八月十六日

師恩の深きを謝しつゝ、

高橋正武

ドン・ファン・テノーリオ

(二部七幕)

友情のしるしとして

ドン・フランシスコ・デ・バリェーホ氏に捧ぐ

よりよき友　ホセ・ソリーリヤ

一八四四年三月、マドリッドにて

目次

はしがき

原作者獻辭

第一部

第一幕 放蕩・亂行

第二幕 早やわざ

第三幕 神聖冒瀆

第四幕 惡魔は天國の入口に

第二部

第一幕 トニヤ・イネスの亡靈

第二幕 ドン・ゴンサーロの石像

第三幕 神の愛と人の愛

『ドン・ファン・テノリーオ』について

三

六

一一

一三

一五

一八

二〇

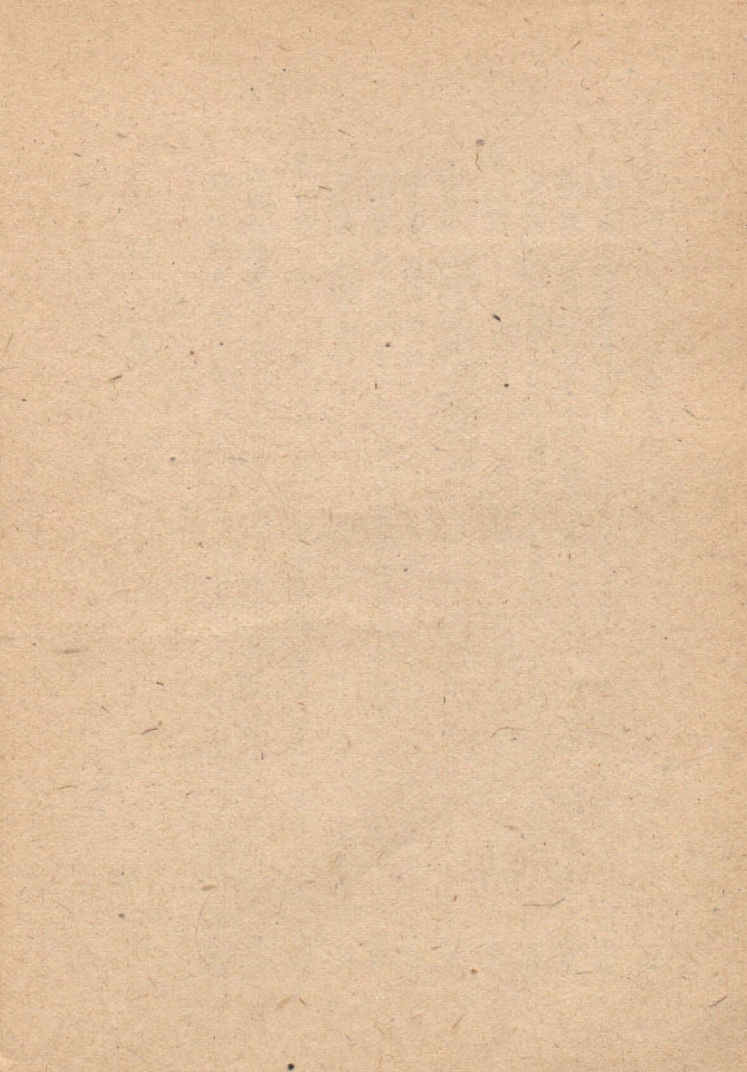
二四

二四

一六

一七

一九



全幕の登場人物 (括弧内は譯者の註記)

ドン・ファン・テノーリオ (主人公、騎士で稀代の遊蕩兒)

ドン・ルイス・メヒーア (同じく騎士で、ドン・ファンの競争者)

ドン・ゴンサーロ・デ・ウリョア、カラトラバ會の地頭 (ドニャ・イネスの父。カラトラバ會は第

十二世紀にフィテロ修道院長サン・ライムンドが回教徒討伐のために興した一派の僧兵團で、ドン・ゴンサ

ーロはセビーリヤ地區におけるこの一派の首頭である)

ドン・デイエゴ・テノーリオ (セビーリヤ二十四貴族の一、ドン・ファンの父)

ドニャ・イネス・デ・ウリョア (ドン・ゴンサーロの娘で、ドン・ファンのいゝなすけ)

ドニャ・アーナ・デ・パントーハ (ドン・ルイスのいゝなすけ)

★リストファノ・ブタレツリ (イタリヤ人、セビーリヤの酒場の親爺)

マルコス・チウツテイ (ブタレツリの友人でドン・ファンの従僕)

ブリヒダ (修道院におけるドニャ・イネス傳育係の尼僧)

バスクワール (ドニャ・アーナの家の下僕、アラゴン生れの男)

センターリヤス大尉 (ドン・ファンの味方をする軍人、トゥネス戦争から歸つた男)

ドン・ラファエール・デ・アベリャネーダ センターリヤスの僚友、ドン・ファンの味方をする男、劇

中ではアベリヤネーダと姓だけで書かれている

ルシリア (ドニヤ・アーナの家の女中)

セビーリヤ、カラトラバ會修道院の尼長

同修道院受付係の尼僧 (名まえはマリーアか?)

ガストン (ドン・ルイスの従僕)

ミゲール (フタレツリの酒場の給仕、イタリヤ人)

彫師

警吏 甲及び乙

給仕 (臺詞なし)

ドン・ゴンサーロの石像 (ドン・ゴンサーロと同一俳優)

ドニヤ・イネスの亡霊 (ドニヤ・イネスと同一俳優)

そのほか、騎士、セビーリヤの市民、假装の人々、野次馬、骸骨、石像、天使、幽霊、巡羅、民衆たち。

場所はセビーリヤ (イスパニヤ南部、グラダルキ)。(イスパニヤ南部、グラダルキ)。時はカルロス五世(一五一六年即位、一五一九年カトール一世の名でドイツ皇帝となり、一五五五年退位した英雄王(一五〇〇—一五五八)。すな)の末期一五四五年のところ。第一部の四幕は同わち、イスパニヤ大帝国が全盛を誇った時代にあたるじ一夜の事件、のちの三幕は、それより五年後の夜。

第一
部

第一幕 放蕩・亂行

登場人物

ドン・ファン

ドン・ルイス

ドン・デイエゴ

ドン・ゴンサロ

ブタレツリ

チウツテイ

セントーリヤス

アベリヤネーダ

ガストン

ミゲール

ほかに、騎士、野次馬、假装の人や巡邏たち

クリストファノ・ブタレツリの酒場。——正面奥の戸口は街路に向く。テーブル、水壺、その他、こうした場所にふさわしい什器類。

第一景

ドン・ファンは假面をつけ、卓に凭つて手紙を書いている。傍でチウツティとブタレツリが待っている。幕があがると、正面戸口から、假装の人、學生、市民たちが、松明、樂器などを持って通るのが見える。

ドン・ファン　うるさい奴らだ。なにを騒いでいるんだ。だが、手紙が済んだら、騒ぎ甲斐のあるところを見せてやる！（と、なお書きつゞける）

ブタレツリ　（チウツティに）いゝ謝肉祭だ。

チウツティ　（ブタレツリに）いゝ潮さ、財布をふくらますにや……

ブタレツリ　なあに！ きょうびのセビーリヤと來たら、くそ面白くもねえし、流れてるのは安酒ばかり。それに、こゝいらじゃ、いゝ鴨もかゝらねえ。金廻りのいゝ連中からは、變な目つきで見られるし、ときどきは踏みたおされるし。

チウツテイ　だが、今日は……

ブタレツリ　今日だつて、勘定にやなるめえ。それにしても、チウツテイ、おめえはうめえこと、
やつたぜ。

チウツテイ　しつー。譯が高けえ。旦那は癪癪が強いでね。

ブタレツリ　この旦那をつかまえたんだね？

チウツテイ　一年ほどまえからね。

ブタレツリ　で、どんな風だい？

チウツテイ　おれに敵う僧正さまもあるめえよ。欲しいものなら望みのまゝだし、いや望み以上
さ。ひまは多いし、財布はいっぱい。別嬪さんに、酒は上じょうものと来らあ。

ブタレツリ　そんなお面相しやがつて、果報が過ぎるよ。

チウツテイ　それがみんな、（と、ドン・ファンを指し）人さまの懐と来らあ。

ブタレツリ　持ってたんだね？

チウツテイ　金のなる木を棒ではたくほどよ。

ブタレツリ　金つ拂いは？

チウツテイ　學生さん見てえよ。

ブタレツリ で、高いお身分かい？

チウツテイ さしずめ、王子さまか。

ブタレツリ 臆ったまは？

チウツテイ 海賊みてえよ。

ブタレツリ イスバニヤのお方かただね？

チウツテイ ……だろうと思ひな。

ブタレツリ お名まえは？

チウツテイ てんで知らねえ。

ブタレツリ あぎれた野郎！ で、どこへお出かけなんだい？

チウツテイ こゝへ來たのさ。

ブタレツリ ながにお手紙だ！

チウツテイ 文章もなか／＼ご立派よ。

ブタレツリ それにしても、あんなに長々と、誰にお便りなんだい？

チウツテイ 親御さんさ。

ブタレツリ 感心な息子さんだね。

チウツテイ　いまだき珍らしいお方だよ。だが、ちょっと待ちな。

ドン・ファン　（手紙の封をしながら）署名を入れて、こゝろ疊んで……　おい、チウツテイ！

チウツテイ　へい。

ドン・ファン　この手紙をな、ドニャ・イネスが御祈禱所でお祈りしてるから、たしかに渡して来てくれ。

チウツテイ　ご返辭をお待ちいたしますか。

ドン・ファン　尼服（ころも）を着た悪魔の手から、おれの胸をすっかり呑みこんだ、姫のお守りの婆さんの手から、鍵を受取って、時刻と合圖を訊いて来るんだ。それから直ぐ、風より早く、またこゝへ歸つて来い。

チウツテイ　かしこまりました。（退場）

第二景

ドン・ファンとクリストファノ・ブタレッリ

ドン・ファン　クリストファノ、用事だ。

ブタレッリ　へい、旦那！

ドン・ファン あかね。

ブタレツリ へい／＼。イスパニヤの言葉も覚えまして…… 旦那にも、お國言葉のほうが、
お手軽るでございましょう……

ドン・ファン ろん、そのほうがいゝ。じゃ、イタリヤ言葉はやめるとしよろか。(第二景の始めか
ら、こゝまで原

文ではイタリヤ語
を用う譯者註)とこゝろでね、ドン・ルイス・メヒアは、きょう来たかい？

ブタレツリ それが、旦那、セビーリヤへ歸つておられません。

ドン・ファン ほんとに、まだ歸つて來ていないのか。

ブタレツリ さようと存じます。

ドン・ファン おまえ、先方のことを、なにか噂でも耳にしないかい？

ブタレツリ さよう／＼。それで思い出しましたが…… 人の話ですがね……

ドン・ファン なにか、手がゝりにでもなることか？

ブタレツリ と存じまするが。

ドン・ファン それじゃあ、聞こう。

ブタレツリ (傍白) てつきりそらだ。それに違えねえ。今夜でまる一年だ。すっくり忘れておつ
た。

ドン・ファン おい／＼、早く言え。

ブタレツリ ごめんなせえ、旦那。それを思い出してましたんで。

ドン・ファン 早く言え。おれは氣が短いんだ。

ブタレツリ それと申しますが、旦那、旦那の申されるメヒーアの旦那の身に、あるとき、思
いもよらない、途方もないことが起りましたんで。

ドン・ファン よけいな話はやめてくれ。分っているんだから。ルイス・メヒーアとファン・テ
ノリーオが賭けをして、一年の間に、どっちが運がよくって、どっちがよけいに悪戯がやれる
かと……

ブタレツリ 旦那、ご存じなんで？

ドン・ファン すっかり知っている。だから、メヒーアのことを訊くんだ。

ブタレツリ その賭けがうまくいってくれましたら、いゝんですがね、たんまり頂戴できませんで。

ドン・ファン 親爺は、そのドン・ルイスが今日の約束に来ると思うかい？

ブタレツリ ところが、そんな氣配もござえません。期限ももうぎり／＼一ぱい。それに、あんなこと、覺えている方が馬鹿臭うござえますよ。まったくの話。

ドン・ファン もういゝ。これを取つときな。

ブタレツリ 旦那は、お二人の、どちらさまかをご存じなんで？

ドン・ファン まあな。

ブタレツリ そいじゃ、お見えになりましたよかね？

ドン・ファン 少くとも一人は来るが、しかし、もう二人とも、こゝへ足を向けている頃だろうよ。待つ間もなしに、二人とも乗りこんで来るよ。まあ、店で一番上等なやつを、二本用意しとけ。

ブタレツリ ですが……

ドン・ファン 黙れ…… おれは行く。

第三景

ブタレツリ

おゝ、たまげたね！ メヒリアとテノリーオは歸つて來てるんだな、てつきり。あんな出まかせの約束ごとをやるうってんだな。うん、それに違えねえ。いまの旦那は、しつかいご承知の様子だった。(奥で騒ぎが聞える) だが、なんだらう？ (と、戸口を覗く) あれ！ 廣場で、いまの旦那が喧嘩を始めなすった。あれ／＼、騒動だ！ 大勢で、旦那に打ってかゝっているよ。

それを、たゞ一人で喰いとめなさって！…… ふん、だらしのねえ、一人にかゝって、みな逃げ出したわ！ そうだ、あのお二人がイスパニヤに歸つてゐるに違えねえ。いまにセビーリヤ中が、上を下への大騒ぎになるぞ！ おい、ミゲール！

第四景

ブタレツリとミゲール (第四景の臺詞、原文はすべてイタリヤ語、譯者註)

ミゲール ご用で？

ブタレツリ 急いでな、こゝへテーブルをひとつ用意してくれ。それから、一番舊いラクリマを二本、持って來とけ。

ミゲール へい、分りました。

ブタレツリ 一番上等なやつだぜ。できるだけ、大急ぎだぞ。

ミゲール 大急ぎ、大急ぎ。(と退場)

第五景

ブタレツリとドン・ゴンサロー

ドン・ゴンサロ この店だな。主人は？

ブタレツリ いらっしゃいませ。

ドン・ゴンサロ 主人に會いたいんだが。

ブタレツリ てまえてござえますが、なんでござえましょう？

ドン・ゴンサロ あ、君か。

ブタレツリ へい。おっしゃってくださいまし、急いでおりまするで。

ドン・ゴンサロ それなら、そら、一枚。これは確かに正金、通用するだらうね。どうだね？

ブタレツリ へい、それはもう、旦那！

ドン・ゴンサロ ところで、おまえさんは、ドン・ファン・テノーリオという男を存じている

かね？

ブタレツリ 存じております。

ドン・ゴンサロ 今日こゝで人と會う約束があるというが、ほんとかな？

ブタレツリ おや、旦那はその相手のお方で？

ドン・ゴンサロ 誰のことだね？

21
ブタレツリ ルイスというお方で……

ドン・ゴンサロー　そうではないが、會見の様子を見たいと思つてね。

ブタレツリ　これがお二人に用意したお席でござえますから、そちらにお掛けくだされば、お二人にお食事をさし上げますで、よくご覽になれましょり……　あゝ、旦那さまも臆をお潰しなさるようなところが、ご覽なされますよ。

ドン・ゴンザロー　そうだらうな。

ブタレツリ　なにしろ、お二人ともイスパニヤで一番威勢のいゝ方でござえますもの。

ドン・ゴンサロー　うん、しかしまた、一番のならず者でもある。

ブタレツリ　滅相もござえません。このごろ起る悪事は、みんなお二人の仕業と申しますが、口さがない連中は何とでも言いますから。と申しますのは、テノリーオさまやメヒーアさまほど、金ばなれのきれいな人もござえませんもの。

ドン・ゴンサロー　もういゝゝ

ブタレツリ　口悪るやの言うこととでござえます。なぜと申せ、旦那、お二人ぐらい、きれいにお拂いくださる人はござえせんもの。それはまったく、ほんとでござえます。

ドン・ゴンサロー　もういゝとやうに……

ブタレツリ　え、なんで……？

ドン・ゴンサロー　わしは隠れて、人目につかないように、二人の様子を見たいんだが。

ブタレツリ　それは旦那、たやすいことで。謝肉祭には、いかに高貴なお方でも覆面なざるのがしきたりで、そうなされれば、假面を脱がないかぎり、誰がどなたやら、誰にも分りっこござえませんし、家の汚れになることもござえません。

ドン・ゴンサロー　隣りの部屋がよかろうが。

ブタレツリ　続いた部屋というのが、生憎でござえまして。

ドン・ゴンサロー　それでは、覆面を貸してくれ。

ブタレツリ　へい、さつそく。

第六景

ドン・ゴンサロー

そんな男があろうとは、どうも考えられない。わしは没義道な眞似はしたくない。たゞ自身で事の眞相をつきとめたい……　だが、賭けというのが事實なら、そんな男に娘をやるより、娘に死んでもらいたい。イネスに傷がつくようなら、わしはこの世に望みも絶えた。まずく、わしは善良な父親になることだ。それから恥を知る紳士となるのだ。この結婚はこのうえない

良縁だ。しかし、テノリオにイネスの花嫁衣裳を經帷子にするようなことはしてもらいたくないのだ。

第七景

ドン・ゴンサローと、覆面をもって登場するブタレツリ

ブタレツリ へい、旦那。

ドン・ゴンサロー いや、ありがとう。まだ、しばらくは暇あひだがあるるか。

ブタレツリ お見えになるものなら、おっつけお見えになりますよ。かれこれ八時でござえます。

ドン・ゴンサロー 約束の時刻は、八時だったかな？

ブタレツリ それが刻限でござえまして、八時の鐘がぼんと打つ、それまでに來なかつた方が負けという取りきめでござえます。

ドン・ゴンサロー 噂のとおりだと大へんだ。どうぞ誤聞であるように。

ブタレツリ お二人が約束をかならず守るとは限りません。でござえますが、どちらにしまして、時刻はもう來ておりますで、それほど氣をお採みにならずとも、もうしばらくのご辛抱で

ごぜえますすよ。

ドン・ゴンサーロ それでは、覆面をつけて、その席へ行こうか。

(と、右手の卓に腰をおろして、覆面する)

ブタレッリ (傍目) 胡亂くせえご老體だ。曰くありげにやって来て…… 正體のわかるまでは、安心がならねえ。

(ドン・ゴンサーロを横目で見ながら、拭き掃除などして、忙しそうに働く)

ドン・ゴンサーロ わしのような人間がこんなところに来て待ったり、こんな仕事をするなんて。それも結局、わが家の安穩と清淨無垢な一人の娘の幸福を思えばこそだ。なにも酔狂や物好きじゃない。

第八景

ドン・ゴンサーロ、ブタレッリ。ドン・デイエゴが正面の戸口に

ドン・デイエゴ なるほど、聞いたとおりの店だな。こゝだ。さて／＼、やっと分った。
ブタレッリ また覆面のお客さんだ。

25
ドン・デイエゴ このお店かな？

ブタレツリ いらっしやいませ。

ドン・デイエゴ 《月桂亭》というのは？

ブタレツリ へい旦那、さようでござえます。

ドン・デイエゴ ご亭主はいるかね？

ブタレツリ てまえめが亭主で。

ドン・デイエゴ 君がブタレツリさんかな？

ブタレツリ へい、さようで。

ドン・デイエゴ 今日こゝでテノリーオが人を待ちあわせるというが、ほんとかね？

ブタレツリ さようでござえます。

ドン・デイエゴ もう來ているかね？

ブタレツリ いえ／＼、まだでござえます。

ドン・デイエゴ だが、來ることは來るのだからね？

ブタレツリ しかとは存じませんが。

ドン・デイエゴ 亭主はそのつもりではないのかね？

ブタレツリ もしもお出でになりましたらとは思ひまして。

ドン・ディエゴ それなら、わしも待つことにしよう。

(と、ドン・ゴンサロと反対の側に腰かける)

ブタレツリ その間に、なにか召上りものでも？

ドン・ディエゴ 要らん。が、これを取っておけ。

ブタレツリ で、旦那さまは？

ドン・ディエゴ よけいなことは喋らんがい。

ブタレツリ ごめんなせえまし。

ドン・ディエゴ まあい。あつちへ行つといてくれ。

ブタレツリ (傍目) あれく、こんな、無愛想な人は、生れてはじめてだ。

ドン・ディエゴ わしのような家柄のものが、こんな下賤な店に足踏みしなきゃならんとは。だ

が、息子のために、父親がわが身をおとしたとて、恥ではない。たゞ、この眼で、事の真相と、

このわしから生れも生れた放蕩息子、ていたらくを見たいのだ。

(ブタレツリは器物の整頓などしながら、正面奥から、ドン・ゴンサロとドン・ディエゴを眺めている。二人は

顔をかくしたまゝ、黙りこくっている)

ブタレツリ あれく、まるで二つのお地藏さんだ。こんなお客さんなら、料理は残るばかり、

だが、なんのことだ！ 食べもしないで、お代だけはたんまりくださる。まあ、これで、財布はふとるばかりよ。

第九景

ドン・ゴンサロ、ドン・ディエゴ、ブタレツリ、センチリヤス大尉、アペリヤネーダ、それに二人の紳士

アペリヤネーダ 来た〜。いよ〜勝負が決まるんだ。

センチリヤス ジャ、はいろろ。ブタレツリ、いるかい？

ブタレツリ あれまあ、センチリヤス大尉さん。これはお珍しいじゃありませんか。

センチリヤス そりさ、クリストファノ。おれが界限から姿を消したら、音に聞える大盡ぶりも見られねえだろう？

ブタレツリ ずいぶん暫くお見えなされねえもんですから……

センチリヤス 國王軍に従軍して、トゥネスの方へ行つたんだが、また無事、セビーリヤへ舞いもどつた。ところで、話にきくと、ちようどいゝときに歸つて来て、舊交を温めることにならうしいね。ま、さつそく二三本持つて来てくれ。喉をうるおしながら、問題の一件の、ほんとのところを聞こうじゃないか。

ブタレツリ そんなことなら、たやすいご用で。ですが、まず酒倉へ降りて来るまで、ちょっと。人々 いゝとも、いゝとも。

第十景

ブタレツリを除いて、前景の人々

センチーリヤス みんな腰をおろそろ。アベリヤネーダ君に、ドン・ルイスの方の話をつゞけてもらおうじゃないか。

アベリヤネーダ テノリーリオの亂行が、うわてだとは、とりてい僕には信じられない。これだけ言えばいゝ。僕はドン・ルイスに賭けるな。

センチーリヤス 君の負けだよ、たぶん。ドン・ファン・テノリーリオってやつは、世間周知のとおり、無鐵砲このうえないやつなんだ。あの遣り口だって、見る、あれ以上の人間は世間にはないよ。そいじゃ、賭けといこりか。

アベリヤネーダ しかし、僕はメヒーアがどんなことをして来た男だか、よく知っている。それはひどいんだ。目を瞑つてでも、あいつに賭けるね。

センチーリヤス ところが、このセンチーリヤス大尉どのは、全身代をドン・ファン・テノリー

オに賭けるな。

アベリヤネーダ それならよろしい。僕は親友ドン・ルイスに賭ける。

セントーリヤス テノーリオの向うを張るのは危険千萬さ。あんな男は、またこの世にないんだから。やつ運のいいこと、やり口のはげしいのは、有名なんだからね。

第十一景

前景の人々、酒罎をさげたブタレツリ

ブタレツリ ファレルノ、ボルゴーニユ、ソレントの銘酒でござえます。

セントーリヤス 君のいゝのを注いでくれよ、クリストファノ。で、なにかね、一年まえ、ドン・ファン・テノーリオとドン・ルイス・メヒータとが賭けを始めたというが、たしかなところは、どうなんだね？

ブタレツリ それがですよ、大尉さん。仔細をよくは存じませんので、納得いくようにお話しできますか、どうですか。ですが、存じておることだけ申しますれば……

皆々 いったい、どんな風なんだ？

ブタレツリ それがでござえます。このてまえの店で、お二人が賭けをお始めなすったのじゃご

ぜえますが、なにぶんにも、一年もさきというより長い期限を切っておりますので、實際出来るものじゃないと、たかをくくってしまいましたようなわけで、いまのいままで思い出しもしなかつたのでござえますよ。ところが、日暮れごろでしたでしょうか、一人の騎士がお見えになりました、手紙が認めたいから、筆紙を貸せと申されるのでござえます。一心に手紙をお書きのあいだ、てまえは、連れておいでの従者と話しましたのですがね、こいつは、てまえと同國のゼノワの者でしてね、根っから抜け目のねえやつで、肝腎なこととなりますと、泥を吐きません。そのうち、お手紙が濟みますと、宛名のところへ持ってやらせたのでござえます。

さて、その旦那は、てまえの國の言葉でもって、ドン・ルイスのことを訊かれましたね、自分分は二人の賭けは悉皆承知している、二人のうち一人は約束どおり、かならず来るだろうと、そう申されます。この旦那のことを、もう少し探って見たかったのでござえますが、金貨を二枚握らせられましたね、「約束の時刻には両方とも来るかも知れんから、一番上等な酒を二本、二人に用意しておけ」と、お言いつけなのでござえます。それだけ申されたきりで、ふいと出懸けなりました。鳥目を頂戴いたしましたので、そこにごらんのように、それでござえます、椅子を二つと、盃ふたつに罐二本、賭けを始めなされた、その場所に、卓の用意をしたのでござえます。

アベリヤネーダ それは君、ドン・ルイスに違いないね。

センターリヤス ドン・ファンのはうだよ。

アベリヤネーダ おやじは、顔を見なかつたのか。

ブタレツリ 覆面で顔を隠しておいででしたもので。

センターリヤス だが、君、君は二人に見覚えはないのか。顔は見えんでも、なり姿で見分けが
つきそうなもんだが。

ブタレツリ いや、これはたまえが抜かつておりました。正體を見届けようとはやっただんですが、
やっぱり分りませんでしたね。でも、ちよつとお静かに！

アベリヤネーダ なんだ？

ブタレツリ あれは八時に十五分まえでござえますよ。

(鐘の音が聞える)

(十五分刻みに時刻を知らせる。即ち一點打十五分、二點打三十分、三點打四十五分—譯者註)

センターリヤス おい／＼、大勢やつて来た。

アベリヤネーダ セビーリヤ中が固唾をのんで、この勝負を見ているんだからね。

(八時を報じる鐘が聞える。数人のものがはいつて来て、無言のまま、それ／＼に舞臺に位置をとる。最後の鐘が鳴り終ると、假面をつけたドン・ファンがはいり、ブタレツリが舞臺中央に用意した卓のところに行き、前

に置いた二脚の椅子の一つに、腰をおろそうとする。そのすぐあとから、やはり覆面して、ドン・ルイス登場、もう一脚の椅子へ向う。一同、二人を見ている。

第十二景

ドン・ディエゴ、ドン・ゴンサロ、ドン・ファン、ドン・ルイス、ブタレッリ、センチリヤス、アベリヤネーダ、そのほか騎士、野次馬や覆面の人々

アベリヤネーダ (ドン・ファンを見やって、センチリヤスに) おい、連中なら、あれがそうだ。あいつ、結局、口あんぐりだよ。

センチリヤス (ドン・ルイスを見て、アベリヤネーダに) また一人来て、あの椅子に腰かけるよ。ふり、いよ／＼始まる!

ドン・ファン (ドン・ルイスに) その席は豫約してあるんですが。

ドン・ルイス (ドン・ファンに) 同じ苦情がこちらも言いたいのですがね、そちらの席は、わたしの友人に取つてあるのです。

ドン・ファン いまにお分りになります。これはわたしの席だ。

ドン・ルイス お断りしますが、これはわたしのだ。

ドン・ファン それなら、君はドン・ルイス・メヒータだな。

ドン・ルイス 君こそ、それでは、ドン・ファン・テノトリオだろ。

ドン・ファン かも知れん。

ドン・ルイス そういう言い方をするのか。

ドン・ファン 言つて悪いか。

ドン・ルイス 悪くはなからう。

ドン・ファン おれもそり思ふ。

ドン・ルイス このうえ、むだなやり取りは、やめよう。

ドン・ファン おれはドン・ファンだ。(と、覆面を脱ぐ)

ドン・ルイス (同じく覆面をとりながら) おれはドン・ルイスだ。

(二人は暗につく。センターリヤス大尉、アベリヤネーダ、ブタレツリ、みな思い／＼に二人の方へ寄り、挨拶をし、握手抱擁など、そのほか友情を示す仕草。ドン・ファンとドン・ルイスは慇懃にそれに應える)

センターリヤス ドン・ファン!

アベリヤネーダ ドン・ルイス!

ドン・ファン 諸君!

ドン・ルイス よう、諸君！ これは、愉快だ。

アベリヤネーダ ご兩所の勝負の噂を聞いたもので、見物に來たよ。

ドン・ルイス ドン・ファンも、おれも、諸君のご厚意に、大いに感謝する。

ドン・ファン 閑つぶしは止めて、ドン・ルイス。(ほかの人々へ向つて) 椅子を近く寄せたまえ。

(運くの連中へ) みなさん、みなさんも、わたしどもの賭けを見にお出でなされたのでしようが、少しも構いませんから、どうぞ。

ドン・ルイス わたしも差しかえありません。——この一年というもの、わたしは賭けに餘念もなかつた。だが、世間に恥かしいと思つたこともない。

ドン・ファン おれもそうだ。おれが偽善の徒じゃないことは、世間も承知だ。おれの行くところ、醜聞のついでまわらないことがなかつたからな。

ドン・ルイス もし／＼、そちらのお二人、そこでは話が聞えなありませんか。あなたがたです。(と、ドン・ディエゴとドン・ゴンサローのことをいう)

ドン・ディエゴ 結構です。

ドン・ルイス あなたは？

ドン・ゴンサロー こゝから、お話は十分伺えます。

ドン・ルイス　ご辭退なさるには、なにか仔細もおありでしょうから。

(一同はドン・ルイス・メヒアとドン・ファン・テノリーオの卓の周圍に腰をおろす)

ドン・ファン　用意はいゝかね?

ドン・ルイス　いゝね。

ドン・ファン　約を違えぬわれ／＼として。

ドン・ルイス　さあ、それでは、たがいの手柄話を。

ドン・ファン　それよりま先に、乾盃をしよう。

ドン・ルイス　おゝ、乾盃だ。(と、乾盃)

ドン・ファン　賭けというのは……

ドン・ルイス　ある日のこと、おれが、廣いイスパニヤ中を探しても、このルイス・メヒアのやるようなことの、やれる者はいまいと言ったものだから。

ドン・ファン　ところが、おれがそれに反對した。この「ドン・ファン・テノリーオの所業に敵うものはない」と、言いだした。

ドン・ルイス　そうだ。そこで、この一ヶ年に、どっちが運よく亂行がやれるかという賭けになつたんだな。そして、きょう、いよくその勝敗を決めに、やつて來た。

ドン・ファン おれもこのとおり、やつて来た。

ドン・ルイス うん、おれも。

センチーリヤス これはまた、世にも奇抜な勝負だな！

ドン・ファン では、聞かしてもらおう。

ドン・ルイス いや、まず君の方から話してくれ。

ドン・ファン どつちにしろ同じだ。では、御意に従うか。おれは決してぐずぐずしない男なんだ。さて、君、おれは廣い活躍の天地を求めて、イタリヤにとび出した。あそこは、戀と戦さに由緒ある舊い國だ。逸樂の宮殿がある。たま／＼皇帝陛下には、かの地に外征、イタリヤ、フランス兩國を相手に戦争中だ。おれは考えたんだ。「どこがよかろうか。兵隊がおり、賭博があつて、喧嘩出入りと色戀沙汰の多いところにかぎる」とね。そこで早速、喧嘩と戀の相手を求めて、イタリヤへ飛んだ。我武者羅だった。

ローマでは、今度の賭けの仕事のため、挑戦と戀のさそいの文句を書いて、門口に張り紙をした。『ドン・ファン・テノーリオの寓、余に何ものかを求めん人のために』とね。この時分のことを仔細に語るのはやめる。たゞ、あそこへ残して来た、おれの悪名を聞いてくれたらしい。この張り紙の文面で、おれの令名は判断できよう。土地は色好み、相手は多情なローマ娘

と來ている。こっちは美男で、神経は圖太い。おれの戀の冒險を値切つて見るものもあるまい。最後に、おれはローマ落ちだ。想像もできようが、汚い身なりに身をやつし、瘦せ馬の背に、逃げ出した。絞首刑に遭いそうになつたからだ。

イスパニヤ軍に投じたが、異郷にある同胞たる軍隊のなかでも、決闘を五六度やつて、すぐまたどろんだ。

ナポリは絢爛たる戀の花咲く都、こゝで、第二の張り紙を出した。「ドン・ファン・テノーリオの寓、余に敵せん男あらじ。上は高貴の姫君より破れ舟に漁る賤の女に至るまで、わが烙印を免るゝことなからん。黄金と腕の力の及ぶことならば、いかなる挑戦にも相手すべし。喧嘩を好むもの、また遊蕩の士、尋ね來らるべし。われと思わん人、余に勝れたらん人、賭博、決闘、また戀に、余に勝れたる人、ありやなし？」と、こう書き出したものだ。ナポリ滞在六ヶ月の間、喧嘩狼藉、亂行、かどわかし、おれの關係しなかつたものがない。おれが行くところ、道理は蹂躪、徳義は凌辱、正義は嘲弄、女は欺してこれを犯した。

おれは賤が女の茅屋へも行き、莊麗の宮殿へも上り、修道院のきざはしも踏み、あらゆるところに、不逞の足跡を残しておいた。おれの兇勇は、いかなる道理も聖なるものも、場所がらも、辨え憚ることを知らなかつた。僧俗の區別も認めず、挑みたい相手に挑み、相手にならう

というものには、構わず相手を買って出た。おれのぼらした相手から、萬が一にもおれの方が斃されるかも知れないなど、そんな餘計な心配をしたことがない。まあ、こういう風に、このドン・ファンはやってのけたのだ。その業績はすっかり、この紙に書いておいた。書いてあることの證據は、この生き身のおれだ。

ドン・ルイス では、読みあげてくれ。

ドン・ファン いや、それより、君の華々しい手柄話を聞こうじゃないか。君の證言がはっきりしてから、證書を読みくらべよう。

ドン・ルイス なるほど、ドン・ファン、それも道理だ。どうやら、二人の業績には、さほどの庭逕はなさそうだね。

ドン・ファン じゃ、始めてくれ。

ドン・ルイス では、話そう。おれも君と同様、力かぎりの大仕事をと、ひとりで考えた。「お、神よ！ 戀と喧嘩の相手を求めて、どこへ行つたらいいだろう。そうだ、フランドルよりほかにない。あそこでは戦争が始まっているし、喧嘩と女の機會は望みのまゝに違いない。」そこで、さっそくフランドルへ飛んだ。ところが、不幸、行って一ヶ月めには、持ち金をすっかりはたいてしまった。金貨は一枚々々、つき／＼と消えていった。鏝一文もなくなると、世

間もおれに寄りつかない。しかし、いゝ相棒を見つけた。盜賊の仲間入りをした。これは圖にあつたね、まったく！ おれたちは乗り出した。運もよかつた。ガンテ（東フランドル、即ちペルギーのガン、當時の王カルロス五世の生地―譯者註）の大本山、僧正の聖宅に忍びこんだ。あれは、すばらしい一夜だった。僧正は、降誕祭の儀式で、合唱の司祭に出た留守だ。そのとき盗んだ財寶は、いま思い出しても、胴顛いがつく。それが悉くこちとらの手中に歸したんだもの。ところが、賊の頭目が狡いやつで、おれの分けまえまで押えやがつた。口論のすえ、おれは容赦をしない、一刺しぐさりとやつてのけた。おれの手練にゃ敵わないよ。殘黨はおれの膽つ玉を見たもんだから、おれはたちまち頭目に祭りあげられた。こつちでも鷹揚に情けを見せてやつた。ところが、その翌晩、やつらには鏝一文残さずに、まんまと高飛び。『盗人の錢を盜めば百年の赦しあり』と諺に言うではないか。それなら大丈夫と、こつちう不敵な眞似も辭さなかつた。

行つた先きは、富める國ドイツさ。ところが、ひとりのヘロニモ派の住持、こいつはひどく才走つたやつだったがね、おれを發見すると、さつそく匿名の訴狀を出しやがつた。おれは金の力で放免された。訴狀も買いとつた。ところが、道で、そのくそ坊主と行き會つたものだから、訴狀と彈丸を一緒に、一發ぼんと狙いたがえず、うち返してやつたよ。

それから、フランスへ飛んだ。いゝ國だよ、フランスは！ 君がナポリでやつたと同様、お

れもパリで張り紙を出した。「ドン・ルイスなるもの有り。少くも勇猛二人に敵せん男。數ヶ月をこの地に留まりて、フランスの女とたわむれ、フランスの男と相争わんとするよりほか、願うことなき男なり。」と、こゝ書き出したんだ。パリ滞在の半ヶ年、パリで起つた喧嘩狼藉、亂行またかどわかし、おれの關與しなかつたものがないんだ。だが君、おれも君と同じく、自分の手柄話を仰々しく述べ立てることは止めよう。おれの手柄を知ってもらうには、あの張り札に、パリに遣した悪名を聞いてくれ、ば十分だ。そして、君と同じく、おれの行くところ、道理は蹂躪、徳義は凌辱、正義は嘲弄、女は欺してこれを犯した。

おれは三度も持ち金をすつた。しかし辛いその都度、償いがつくんだ。今度だつて、ドニャ・アーナ・デ・パントーハとの婚禮が待っている。これは金は唸っている女でね、約束もちゃんと出来て、いよ／＼明日が婚禮だ。と言うのは、君、君もそれに列席してはくれまいか知ら。まあ、このドン・ルイスの行状は以上のごとくだ。仔細には、この紙へ書いておいた。こゝに書き留めたことの證據は、おれ自身だ。

ドン・ファン 二人の行状は、はなはだよく似ていて、まあ兼ねあいというところだね。だが、肝腎なのは、こゝにある數字だ。こいつを見よう。じゃ、君から。

41
ドン・ルイス ろん、そうだ。これがおれのだが、見てくれたまえ。見易いように、一本線を曳

いて、名前を書きわけてある。

ドン・ファン おれも同じように、二列に、決闘でばらした相手と、征服した女の名前を勘定しやすく整理してある。數えて見てくれ。

ドン・ルイス 君も數えてくれ。

ドン・ファン 二十三人だね。

ドン・ルイス それは、殺した人數だよ。で、君の方は、驚いたな、君の分は三十二人だ。

ドン・ファン それは殺した人數だ。

ドン・ルイス やりもやったな。

ドン・ファン おれの方が九人多い。

ドン・ルイス 君の勝ちだ。征服した女は？

ドン・ファン これには五十六人。

ドン・ルイス 君の表には七十二人。

ドン・ファン それでは、君の負けだ。

ドン・ルイス 信じられないね、君！

ドン・ファン 疑ぐるなら、そこに證人の名も書いてあるから、聞いて見たまえ、はっきり君に

教えてくれるさ。

ドン・ルイス あゝ、君の表は真正相違なしだ！

ドン・ファン 上は宮廷の姫君から下は漁師の女まで、世にありとあらゆる階層に、おれの色行脚は行き渡ったんだが、なにかまだ抜かりがあるかね？

ドン・ルイス もう一種類だけ足りないね。

ドン・ファン というと、どんな女性だ？

ドン・ルイス なに、得度まえの新發意しんぱち！

ドン・ファン なんだ！ そんなことなら、二倍も御意ごいに適かなって見せよう。というのは、新發意のほかに、婚禮直前の娘を仕留めて見せるよ。おれの友人に結婚しようというのがあるんでね。

ドン・ルイス これはまた、向う見ずな！

ドン・ファン なんなら、賭けていゝよ。

ドン・ルイス よろしい、賭けよう。で、二十日もあればいゝかね、君が兜を脱ぐまでに。

ドン・ファン 六日。

ドン・ルイス これはまた、途方もない！ いったい、女一人を仕留めるのに、何日あればいゝ

んだ？

ドン・ファン　そこに書いた女の數で、一年三百六十五日を割って見てくれ。睦言を交すに一日、手に入れるに一日、捨てるに一日、相手を取換えるに一日、忘れるのにたゞ一時間。しかし、實際はそんな餘裕を要求しないよ。だって、君の結婚は明日というんだから、ぐずぐず出来な
い。あしたまでに、ドニャ・アーナ・デ・バントーハを君から頂戴するよ。

ドン・ルイス　なにを言う？　ドン・ファン！

ドン・ファン　お聞きのとおりだ、ドン・ルイス！

ドン・ルイス　解っているんだね、ドン・ファン、君のやろうということは！

ドン・ファン　おれの必ずやり遂げることはね、ドン・ルイス！

ドン・ルイス　ガストン！

ガストン　へい、旦那！

ドン・ルイス　ちよつと來い。

(ドン・ルイス、ガストンに耳打ちすれば、ガストン、急ぎ足に退場)

ドン・ファン　チウツテイ！

チウツテイ　へい、旦那！

ドン・ファン　こゝへ來い。

(ドン・ファンもまたチウツティに耳打ちをする。チウツティも急いで退場)

ドン・ルイス 間違いないか、言ったことに？

ドン・ファン ない！

ドン・ルイス いのちがないぞ！

ドン・ファン よいとも！

(ドン・ゴンサーロは、このときまで身じろぎもせず坐っていたが、立って来て、ドン・ファンとドン・ルイスに面と向う)

ドン・ゴンサーロ たわけもの！ おゝ、手がこり頓えなければ、犬ころ同然、二人とも殴り殺

してくれようものを！

ドン・ファンとドン・ルイス さあ！

ドン・ゴンサーロ いまさら言っても詮ないことながら、わしはこゝまで生き永らえて、とゞの

つまりがこのよりの、いたゞまれぬ場所に来て、顔もあげられない身になるうとはな！

ドン・ファン それなら、お歸んなさい。

ドン・ゴンサーロ ドン・ファン、歸るにしても、そのまえに、言って置きたいことがあるから、

聞いてもらいたい。君の優しいお父さんは内輪もまるく納まったので、君と婚禮を擧げさせる

と約束してくださいました。それも間近かに取り行われるはずだ。しかし、わしとしては、この目で君というものを見たくなって、きょうも日暮れごろから、こゝに來たのだ。ところが、君を見ただことさえが恥かしい。

ドン・ファン この老爺爺！ このおれが手を拱いて、いままでじつと聞いていたのが、それこそおかしい。だが、貴様はなにものだ？ 早く言え。その覆面を、性根があるなら性根と一緒

に、引きちぎりかねないおれなのだ。

ドン・ゴンサロ ドン・ファン！

ドン・ファン さつさと名乗れ！

ドン・ゴンサロ では見せてやる。

ドン・ファン おゝ、ドン・ゴンサロ！

ドン・ゴンサロ わしだ。それでは、これでお別れだ。ドン・ファン。きょう以後は、ふたゝびイネスのことは考えるな。あの子を君に與えるよりは、わしのこの手で、あの子の墓を掘ってやるのだ。

ドン・ファン ご冗談でしょう、ドン・ゴンサロ。わたしに挑むのは、棒切れでライオンを脅すのと變りませんよ。だが、まだ時間があります。わたしの方からも、お断りしときますが、

約束どおり下さるか、でなきや、あの子をあなたから、盗んで逃げるばかりです。

ドン・ゴンサロ 浅間しい！

ドン・ファン いや、申しあげたとおり。たゞドニャ・イネスのような女が、賭けの數のうちに
はいつていかなかったものですから、いま入れたところですよ。

(ドン・デイエゴは前の場面の間、顔をかくしてじっとしていたが、座を立てて舞臺の中央に出、ドン・ファン
に向らう)

ドン・デイエゴ このりえ黙って聞いておれない。浅間しいぞ、ドン・ファン！ おまえを射殺
そうと、雷光が身構えしていてもないものを。あゝ！…… それにしても、世間の噂は信
じかねたし、嘘だとばかり考えて、今夜は様子を確かめに來た。ところが、よく聞け、このし
れもの！ 知らずにおけばよいことを、知って歸らなきやならぬとは、おゝ、こゝへ來たこと
が口惜しい。それでは、おまえは愚かしい血氣にまかせて、盲目になって、暴れつゞけるがよ
かるう。だがな、ふたゝび、わしを頼りと思ふな。わしはおまえという人間を知らないことに
するからな、ドン・ファン。

ドン・ファン いつ、おまえさんを頼りにした？ おれにそんな口はゞつたいことをいうおまえ
さんは、いったい何者だ？ 知らないことに、しようとしまいと、おれに何のかゝわりがある

う！

ドン・ディエゴ　そいじゃ、お別れだ。だがの、裁く神のいますことをお忘れでないぞ。

ドン・ファン　待て！（と引きとめる）

ドン・ディエゴ　なにかい？

ドン・ファン　顔が見たい。

ドン・ディエゴ　それはだめだ。なんと言つても駄目だ。

ドン・ファン　だめだ？

ドン・ディエゴ　だめだ。

ドン・ファン　仁王立ちしても？

ドン・ディエゴ　なんだと？

ドン・ファン　こうしてくれる。（と、相手の覆面を引きもぎる）

皆々　ドン・ファン！

ドン・ディエゴ　けがらわしい！ わしの顔に手をかけたな。

ドン・ファン　これはしたり、親爺か！

ドン・ディエゴ　違ひ。わしには子がない。

ドン・ファン 氣をたしかにお持ちなさつて！

ドン・デイエゴ 要らぬこと！ おまえのような人間をこそ、悪魔の子というのだ。ねえ、地頭さん、お説教のし甲斐ありませんわい。

ドン・ゴンサーロ さよう／＼。わしもそう思います。さあ、行きましょう。

ドン・デイエゴ 参りましょう。こゝろ魔物の出ぬ場所へ、さつさと参りましょう。——いゝかい、ドン・ファン。おまえをば極悪汚濁の世界へ捨ておくぞ。おまえゆえに、わしは死ぬ思いだ……。だがな、おまえを赦すのは、神の聖なるお裁きのとこだ。

(ドン・デイエゴとドン・ゴンサーロは、だん／＼と退場)

ドン・ファン 長い期限をつけてくれましたね。ですが、いゝですか、お断りしておきますが、決してお赦しをお願いするはずがありませんよ。きょうから後は、お氣にかけてくださらないでよろしい。このドン・ファンは今まで生きて来たように、これからもまた生きて参ります。

第十三景

ドン・ファン、ドン・ルイス、センターリヤス、アベリヤネーダ、ブタレツリ、そのほか兎物や覆面の人々

49
ドン・ファン やれ／＼、厄介ものを追つ拂った。あのお説教は、何の變哲もないことだ。いつ

も聞きなれたお説教、おれはついぞ氣に留めたことがない。それでは、ドン・ルイス、さつき
 言つたように、ドニャ・アーナとドニャ・イネスを賭けるよ。

ドン・ルイス 賭けるのはいのちだ。

ドン・ファン そのとおり。さあ！

ドン・ルイス おゝ！

(二人が出懸けようとしたとき、一組の巡羅に呼びとめられる)

第十四景

前景の人々と一組の巡羅

巡羅 待て！ ドン・ファン・テノーリオは？

ドン・ファン おれだ。

巡羅 繩を承けよ。

ドン・ファン 夢かな、これは。なぜだ？

巡羅 いずれ分る。

ドン・ルイス (ドン・ファンの傍へ寄り、笑いながら) テノーリオ君、驚かないでいよ。おれの従者

が賭けを知って、密告したんだ。君に勝たれちゃたまらんからな。

ドン・ファン　ちえっ！　おれは貴様を、そんな小才の利く男とは、つい思いがけなかった。

ドン・ルイス　それでは、連れて行かれるがいゝ。今度こそ、ドン・ファン、勝利はこっちのものさ。

ドン・ファン　では、行こう。

(出ようとする、また別の巡羅が登場して呼びとめる)

第十五景

前景の人々と別の巡羅

巡羅 (登場しつゝ)　待て！　ドン・ルイス・メヒーアは？

ドン・ルイス　おれだ。

巡羅　繩を承けよ。

ドン・ルイス　夢かな、これは。おれに繩を？

ドン・ファン (哄笑して)　は、は、は、メヒーア君、驚かないでいゝよ。うちの従者が賭けのこ

51　とを知って、密告したんだ。おれの仕事の邪魔をされちゃたまらんからな。

ドン・ルイス 二人とも殺されたら、おれは満足だ。

ドン・ファン さあ、諸君、賭けはいよ／＼始まった。

(巡邏たちはそれ／＼に、ドン・ファンとドン・ルイスを連れ去る。多くの人々がこれにつぎ／＼。センチリーヤス大尉、アペリヤネーダおよびその仲間、なお舞臺に残って、たがいに顔を見合わせている)

第十六景

センチリーヤス大尉、アペリヤネーダ、そのほか見物のもの

アペリヤネーダ まるで夢みたいな大博奕だ。

センチリーヤス 目で見ただから、ほんとにするようなものね。

アペリヤネーダ 僕はメヒーアに賭けるね。

センチリーヤス 僕はテノリーオだね。

第二幕 早やわざ

登場人物

ドン・ファン・テノーリオ
 ドン・ルイス・メヒーア
 ドニャ・アーナ・デ・パントーハ
 チウツテイ
 バスクワール
 ルシーア
 プリヒダ

このほか、ドン・ファンに仕える三人の覆面のもの。

一隅から見たドニャ・アーナの家の外景。この角から、二つの壁が左右同じように見え、右側の壁には格子窓がひとつ、左側の壁には格子窓と入口とがある。

第一景

ドン・ルイス・メヒア、覆面している

ドン・ルイス やれ／＼、ドニャ・アーナの家まで来たぞ。今夜セビーリヤに、どんなことがあるか、用心させねばならない。しかし、おれは幸い、誰とも出くわさなかつた！…… あゝ、胸がおどる！ いまごろは、ドン・ファン君は…… いや、人にはめい／＼の運不運があるものさ。名譽と生命の賭けである以上、おれの名譽と生命とは、おれの機敏と賭つ玉にかゝっている…… だが、誰か来た。

第二景

ドン・ルイスとバスクワール

バスクワール あんな賭けつてあるものか。なんとという無法な！ 二人ともつかまつてさ！

ドン・ルイス 誰だろう？ バスクワールかな？

バスクワール 魂消てしまりよ。

ドン・ルイス バスクワールか。

バスクワール 藪から棒に、どなたさまです？

ドン・ルイス おれだ。ドン・ルイスだ。

バスクワール あれ、まあ！

ドン・ルイス なにをびっくりしてる？

バスクワール あなたさまですもの。

ドン・ルイス バスクワール、おれはこういふ運のいゝ男なんだ。こういふ男でなかったら、そ

のうえ、いまこゝで、おまえに會わなかつたら、おれの姫ドニャ・アーナは、すんでのことに
操を失うところだったよ。

バスクワール なにをおっしゃります？

ドン・ルイス おまえ、ドン・ファン・テノリーオを知ってるね？

バスクワール 知りすぎてまさ。知らねえ人がありますかい！ だげんど、人の噂では、お二人

さんは捕まっていなさると聞きました、なあんだ、あれはみな嘘っぱちですかね。

65
ドン・ルイス 世間の噂は嘘じゃない。實を言えば、バスクワール、王室の勘定奉行をつとめて

る従兄が用立ててくれなかつたら、おれは何もかもを、一切失くするとこだった。

バスクワール それはまた、どうしてですね？

ドン・ルイス おまえ、一肌脱いでくれる氣はないか。

バスクワール 一肌は二肌でも。

ドン・ルイス では言うがね。おれはドン・ファンとのつびきならぬ賭けを始めたんだ。一肌脱いでくれたら、命を救ってくれた以上に、恩に着るよ。

バスクワール どうしろと言うんですね？ 言ってくれせえ。

ドン・ルイス 話は前にさかのぼるが、途轍もない氣狂い沙汰をおつ始めた。どっちが運よく亂行狼藉がやれるかと、賭けを始めた。二人は負けずに華々しくやった。だが、あいつはまるで悪魔だ。結局、やつの方が一枚うえだった。そこで、おれはわけもわからず曰くをつけたんだが、そのことで二人のやりとりとなつて、とゞのつまり、やつは威張つて鼻さきで笑いながら、こういうんだ。「これで不服なら、君はドニャ・アーナと婚禮をあげるといふが、あした君の花嫁を盗んで見せる。これが賭けだ」とね。

バスクワール これはまた、滅相な！ そんな大それたこと吐かすんですかい？

ドン・ルイス 吐かすだけなら、いゝんだがね、バスクワール、言うとおりにやられちゃあね。

バスクワール してやられる！ わしめがいるからにゃ、ドン・ルイス、ご安心なされ。

ドン・ルイス おまえ、言つとくがね、この勝負をどじつたら、おれはどりなる？

バスクワール 心細いこと言いなさる。やつが怖いのですかね？

ドン・ルイス 怖かない、断じて怖かないさ。だがね、あの男は悪魔を親類にもっているんだ。

バスクワール 安心していなされと言うに。

ドン・ルイス あゝ、おれは氣が揉めて、氣が揉めて、自分で自分が安心ならない。なにしろ、

相手は、あゝいう向う見ずだ。

バスクワール お断りしときますがね、いゝですかい？ いくら向う見ずな相手だって、このアラ

ゴン男がいのちに賭けて、口あんぐりとさせずに置きますものかね。じゃ、いずれ、のちほど。

ドン・ルイス あゝ、バスクワール、おまえは知らないんだが、虎の口に飛び込むも同然だぜ。

バスクワール わしめはね、まだくひでえ破目に陥ちたこともありやしたがね、まんまと切り

抜けましたよ。

ドン・ルイス ことは切羽つまっているんだぜ。それに、相手が相手だからな。

バスクワール アラゴン生れの男一匹、テノリーオ風情に、なんのひけをとるものですかい。そ

ういう口數の多いやつは、えてして小手さきの劍術つかい、しんがありましねえよ。口は女を

欺すもの、手はよぼ／＼爺さんを脅したり、小商人こあきんどに喰らわしたりが關の山、鍛えに鍛えた腕ぶしで、眞劔でも揮われる段になったら、生命にかゝわる段になったら、空威張りも、たちまちしぼんでしまいます。どんな手管を使おうと、どんなに景氣のいゝ掛け聲を掛けようと、せいぜいうぶな娘っ子の悪口言うか、さもなきや、人を見て逃げ出すが落ちでさね。

ドン・ルイス バスクワール！

バスクワール あなたさんのことじゃありません。あなたさんは、なるほど遊び人じゃござえませんが、しんはお強いお方ですもの。いや、これはやり甲斐ある勝負ですわい、まったくのところ。

ドン・ルイス なるほど、おれの力は解っているにしてもさ、いゝかい、バスクワール、テノールオ同族の腕も世間周知のごとしだ。それに、おれはやつの腕まえを呑みこんでいるからこそ、あいつに計られて、おれの男を臺なしにされちゃと思つてね。

バスクワール ところが、ドン・ルイス、あなたさんはこうして外に出ておいでなさる。あなたさんがやきもちで、それほど苦勞なさるといふなら、向うが計れば、こつちも計つたらいゝですよ。それで、なにが怖いんですね？

ドン・ルイス なにか知らんが、きつと今夜は、あいつが意趣を遂げに来る、そんな氣がしてな

らない。

バスクワール 夢を見ておいでだ。

ドン・ルイス なぜ？

バスクワール 相手はつかまっているのでしょうか？

ドン・ルイス それはそりだ。だが、おれだって捕まっていたよ。もっとも、ある人に請け出されたから、いゝようなものの。

バスクワール ですが、あいつを請け出すものが、ごぜえまじょうか。

ドン・ルイス 結局、おれは安心のなるてがひとつ見つかった。

バスクワール どうなてですわ？

ドン・ルイス 今夜、この家に忍んでいたら、どうだろう、バスクワール？

バスクワール そんなことしなさつたら、考えてもごらんせえ、アーナさまの操をば、あなたが踏んづけることになりませあ。

ドン・ルイス ひどいことを言う！ あすはドニャ・アーナの花聲になる身だぜ、おれは。

バスクワール しかし、あなたさん、わしめが生命いのちにかけて、ご助力すると言つとるじゃごぜえ

ませんかい？

ドン・ルイス それは言った。だが、決闘の方は大丈夫としても、策で來られると、そうはいか
んよ。で、つまり、家にはいつて夜を明かすか、巡羅につかまる心配はあつても、外で見張り
をするかだ。

バスクワール まあ、ドン・ルイス！ それはご執心が度を過ぎます。おやめなせえと、たつて
わしめがお願い申します。なに、悪くはしませんよ。

ドン・ルイス いや、バスクワール、おれは諦めない。

バスクワール ドン・ルイス！

ドン・ルイス 言ったとおりだ。

バスクワール あきれたお人だ。それほどのご執着とは！

ドン・ルイス なんとでも言うがいゝ。だがね、おれはドン・ファンよりも、女の方に安心がな
らない。まして、二人の氣ちがいがおつ始めたこの賭けだ、只では濟まない。一方は無鐵砲極
まりない狂人に、一方はまた不法極まる狂人と來ているんだから。

バスクワール 考え考えものをおっしゃつてくだせえましよ。わしめはドニャ・アーナのお誕生
このかたお仕えています身、あなたさまは、あすはその花聲となられる方じゃござえません
か。

ドン・ルイス　バスクワール、いよ／＼そのときが来て、正式の良人になったら、おれだって優
しいお聲さんになってやり、幸福な花嫁さんにしてやるさ。しかし、それまでが……

バスクワール　いや、もうおっしゃいますな。わしめはお二人をおむつの頃から存じあげ、お二
人仲もよく／＼承知しております。それでは、わしめの部屋は、二人にも廣うごせえますで、
そこへお越しなせえ。ですけれど、そのまえに……　必ず、必ず聲を立てねえくださりませ。

ドン・ルイス　いゝとも、いゝとも。

バスクワール　そいじゃ明日まで二人で、二倍にも用心して、見張りをいたしましょう。

ドン・ルイス　ドニャ・アーナの方は大丈夫だろうな？

バスクワール　大丈夫でさ。

ドン・ルイス　それではいこう。

バスクワール　お待ちなされ。どうなさります？

ドン・ルイス　行くのさ。

バスクワール　もう？

ドン・ルイス　あいつが何をするか分つたものでない。

バスクワール　戀に逸るお心を、どうぞお静めなさりませ。大旦那のドン・ヒル・デ・バントー

ハがお寢みになつて、家中が静まらないうちには、どうともしようがごせえません。

ドン・ルイス　じれったい！

バスクワール　まゝ、もう一度、しばらくお氣持ちをお休めなされ。

ドン・ルイス　ご主人はいつも、何時ごろお寢みだ？

バスクワール　十時ごろでござえます。で、その横丁に格子窓がござえますね？　十時ごろ、

お聲をかけて下され。それまでは、わしめがいますで、ご安心なされ。

ドン・ルイス　分つた、分つた。

バスクワール　ドン・ルイス、そいじゃ、のちほど！

ドン・ルイス　ごめん、バスクワール、のちほどな。

第三景

ドン・ルイスひとり

おれは今まで、こんな不安にかられた覚えがない。今夜は、不安な宿命の夜に思えてならぬい……なにか心配な豫感、なにか知らないが禍いの起る氣がして、胸が痛む。あゝ、これほどまでにドニャ・アーナを思っているとは、考えても見なかつた。彼女のために、こんな思い

をしたこともない…… あゝ、しかし、ドン・ファンを腕を怖れるのではないが、だが、あいつは運のいゝやつだからな。あいつの企らむことなら、なんでも悪魔が後楯をしてる見たいだ。いや、あいつは地獄から来た男だ。おれがしつかりしていなきゃ。バスクワールはあゝ言うけれど、こゝを離れたら、してやられないものでもない。バスクワールに嗤われるかも知れないが、やつぱり中へはいろろ。相手がドン・ファンであつて見れば、いくら用心してもしすぎることはない。

第四景

ドン・ルイスとドニャ・アーナ

ドニャ・アーナ　どなた？

ドン・ルイス　バスクワールじゃないね。

ドニャ・アーナ　まあ、ルイスさま。

ドン・ルイス　アーナ！

ドニャ・アーナ　いまごろ、窓からお呼びになつたりして？

63
ドン・ルイス　あゝ、アーナ、ほんとにいゝとき出て来てくれたね。

ドニヤ・アーナ　でも、どうなさったの、ルイスさま？

ドン・ルイス　じつは、僕の怖れてるある男と、美しい君のことで賭けを始めたんだ。

ドニヤ・アーナ　あたしの胸も心もすっかりあなたのものになっているのに、いまさら、そんな人のこと、どうして怖いのか？

ドン・ルイス　アーナ、君はその男の名前も運のいゝやつなことも知らないから、そんな呑氣なことが言えるけれど。

ドニヤ・アーナ　どんなに運のいゝ人でも、あたしにかぎって、駄目よ。ほら、もう何時間もしないうちに、式じゃありませんの？ それなのに、よけいな心配ばかりしてらっしゃるのね。

ドン・ルイス　神さまもご存じだが、劔をとってなら、少しも怖れはしない。ところが、それは、まっすぐに君のところによつかつて來かねないんだ。それも獍猛なライオン見たいに大膽に、腹黒の蛇みたいに、用心ぶかく、慎重に……

ドニヤ・アーナ　おばかさんね、あなた！ 安心してお寝みなさいよ。大膽でも慎重でも、あたしから何を盗ろうと言いますの。あたしのいのちは、みんなあなたにお預けしてあるのじゃありません？

ドン・ルイス　それではね、アーナ、誓ってくれたその愛にかけて、ひとつお願いがあるんだ。

その男に安心していられるように。

ドニャ・アーナ なに？ もっと小さな聲でよ。ひとに聞えるわよ。
ドン・ルイス うん、それはね……

第五景

右手の窓口に、ドニャ・アーナとドン・ルイス。左の道ばたにドン・ファンとチウツティ

チウツティ いやまつたく、旦那。旦那はよく／＼運のいい方ですよ。

ドン・ファン チウツティ、誰だっておれにや敵うまい？ 見る、あの抜け目のない牢番め、やすやすと巻かれたでないか。そしてこのとおり、ちゃんと放免だ。——だが、よけいなこと喋ってる間はない。言ったとおりやってくれたな？

チウツティ うまくやりました。思ったよりうまくいきましたよ。

ドン・ファン あのおめでた婆さんは？

チウツティ これが庭の入口の鍵でござえます。修道院の土塀は、ご存じのように、どこにも出入口がござえませんが、つまりはよじ登るより仕方ありません。

ドン・ファン 返辭は？

チウツテイ　ごせえませんが、こゝまですぐ出懸けて来て、旦那とじかにお話し申しあげて、すぐまた修道院へ歸るからという、お言づけでごせえました。

ドン・ファン　その方がいゝ。

チウツテイ　てめえもそう考えましただ。

ドン・ファン　馬は？

チウツテイ　鞍もはみも掛けてあります。

ドン・ファン　で、連中は？

チウツテイ　そこまで来ております。

ドン・ファン　よし、チウツテイ。おれは牢屋に繋がれていると、セビーリヤ中が安心して高聲

きしてる間に、おれは過去帳にまた二人の名前を書き添えて見るわ。は、は、は、は！

チウツテイ　旦那！

ドン・ファン　なんだ？

チウツテイ　お静かに。

ドン・ファン　どしたい、チウツテイ？

チウツテイ　その角を曲つた向う側の窓口に人がいます。

ドン・ファン　ほんとだ。いまが潮時。もしあれが……

チウツテイ　誰ですわ？

ドン・ファン　ドン・ルイス。

チウツテイ　そんなこと！

ドン・ファン　ばか！ おれだって、こゝに出て來てるじゃないか。

チウツテイ　旦那はあいつと違います。

ドン・ファン　違ふにや違ふが、チウツテイ、窓に女が出てゐるぜ。

チウツテイ　女中さんかな。

ドン・ファン　見届けなきや。潮時をはずして、わが悪名を捨ててはならぬ。おい、チウツテイ。

おまえ、連中を二三人連れて、巡羅の風をして、こゝの道から家を一まわりして來い。

チウツテイ　そんなことしたら、窓を締めちまいますよ。

ドン・ファン　そり來たら、女には知られずに濟むし、男は捕まるし、こっちの行く手に邪魔も

のなしだ。

チウツテイ　なるほど。

67
ドン・ファン　走れ。あいつの先きまわりをするんだぜ。そりなれや、こっちの勝ちだ。

チウツテイ だが、奴さんが向つて來やしたら？

ドン・ファン 構うことはない。ばらすんだ。

第六景

ドン・ファン、ドニャ・アーナとドン・ルイス

ドン・ルイス じゃ、いゝね？

ドニャ・アーナ いゝわ。

ドン・ルイス そやつて、僕の願いをきいてくれるね？

ドニャ・アーナ なんだつても！

ドン・ルイス じゃ、夜の明けるまで、見張りしてるからね。

ドニャ・アーナ ご苦勞さんね、メヒーア。

ドン・ルイス 僕のアーナ。ありがとう。神のお報いがありますように。

ドニャ・アーナ あたしを信用してね。だからこそ、あなたにお委せするのよ、メヒーア。

ドン・ルイス じゃ、またあとで来るよ。

ドニャ・アーナ えゝ、十時よ。

ドン・ルイス 待つてゐね、アーナ。

ドニャ・アーナ ええ。

ドン・ルイス こゝのところですよ。

ドニャ・アーナ 十時かつきりよ、ね？

ドン・ルイス うん、きつと。

ドニャ・アーナ じゃ、鍵、あげますわ。

ドン・ルイス 僕が家にはいつたら、いくらドン・ファンが来たつてね。

ドニャ・アーナ あら、誰か来るわ。十時ね？

ドン・ルイス 来るからね。

第七景

ドン・ファンとドン・ルイス

ドン・ルイス だが、こつちへやつて来る。誰だ？ そこに来るのは？

ドン・ファン 通行人だ。

ドン・ルイス そういふ通行人を誰と見ようか。

ドン・ファン 道行く人と……

ドン・ルイス 舌の根、引っこ抜くぞ！

ドン・ファン 道は天下の公道！

ドン・ルイス 關がある。

ドン・ファン おれには二本の腕がある。

ドン・ルイス 折入って願ひ出たら、どうだ？

ドン・ファン どなたさまに？

ドン・ルイス ドン・ルイス・メヒーアに。

ドン・ファン 道行く者は、道は天下の公道と心得ている。

ドン・ルイス おれを知らんか。

ドン・ファン 知っている。

ドン・ルイス おれは、きさまを？

ドン・ファン 二人とも。

ドン・ルイス それなら、何で邪魔をするのだ？

ドン・ファン 道でだろ。

ドン・ルイス 二人が一度に、ひとつのものを念懸けているな？

ドン・ファン そのとおり。

ドン・ルイス きさまはドン・ファンだな。

ドン・ファン お氣の毒さま！ 二人とも、またぞろ娑婆へ浮かれ出したわ。

ドン・ルイス 君はつかまつたんだろ？

ドン・ファン 君と同様。

ドン・ルイス 呆れた。逃げ出したな？

ドン・ファン 君の眞似をしたただけだ。それが、どうした？

ドン・ルイス 君の敗北だ。

ドン・ファン どうだかな。

ドン・ルイス いや、いまに分る。

ドン・ファン 女を二人で包圍の形か。そして、君も網のなかの魚だ。

ドン・ルイス 間があるわ。

ドン・ファン 負けたと観念するまでに。

ドン・ルイス 覺悟しろ。

(ドン・ルイスは劍を抜く。しかし、この時、輩下とともに秘かに背後に追つたチウツェイのために押えられる)

ドン・ファン　ルイスどの、それごらんなさい。

ドン・ルイス　はかられた!

ドン・ファン　口を…… (一味のもの、ドン・ルイスの口を押える)

ドン・ルイス　うう……

ドン・ファン　腕をもつとく／＼しろに (人々、ドン・ルイスの腕を背中へ曲げつける) メヒーア君。どり

やら仕事はこつちのものらしい。(輩下のものへ) あしたまで、ぶちこんで置け。(ドン・ルイスへ)

勝利はこつちの手中にある。あばよ、ドン・ルイス! 君に勝つたのは、なるほど、はかった。だが、そこが、ドン・ファンのドン・ファンたるところさ。

第八景

ドン・ファンひとり

上首尾、上首尾! 萬々歳だ。わが名はこれで、いよく揚がる。あいつの女と首尾をつける間、あいつはうちの穴倉で、髪の毛をさんざ引きちぎっているがいゝさ。では、女は?……わが君とばかり思っていると…… は、は、は!…… いや、嘆きも腕うできも、もうだめさ。こ

の鮮かな手並みを見る。おれがあいつを牢屋へぶち込んだら、出て来やがった。あいつがおれをぶち込んだら、おれも出て来た。二人がこゝで鉢合せをした。これが運というもの……ご覽のとおり、この眞劔勝負にめい／＼は、虚々實々、拔かりはなかった。だが、やつぱりメヒーアには運がない。この勝負でも黒星だ。しかし待て、なおこの上に、ルシーアを確實に握っておかなかつたら、折角の功を一簣に缺かないとも限らない。だが、あすこに、黒い人影がこつちへ来る…… どうやら女らしい。またひとつ、鴨がかゝつた。

第九景

ドン・ファンとブリヒダ

ブリヒダ　もしや？

ドン・ファン　どなた？

ブリヒダ　ファンさまでございますの？

ドン・ファン　おやく／＼、すっかり忘れておつたが、あのおめでた婆さんだ！——これは／＼、よく来てくれました。ドン・ファンです。

ブリヒダ　おひとり？

ドン・ファン 悪魔と二人です。

ブリヒダ まあ！

ドン・ファン あなたのことです。

ブリヒダ わたくしが悪魔？……

ドン・ファン ……じゃありませんか。

ブリヒダ まあ、ひどいこと！ なにをおっしゃいますの！ あなたこそ悪魔さんでいらっしやいますわ。

ドン・ファン たゞし、この悪魔さんは、あなたの財布をはち切れるほど、ふくらませますよ。

お願いをきいてくれますか。

ブリヒダ なんでございましょう？

ドン・ファン 胸のうちを言ってください。どんな風にしてくれました？

ブリヒダ 従者の方に申しましたとおり、すっかり…… それにしましても、あのチウツティッ

て人、ずいぶん人でございますのね。

ドン・ファン なにかしましたか。

ブリヒダ たいへんお口がお上手！

ドン・ファン、財布と手紙をお渡ししませんでしたか。

ブリヒダ、もういまごろは、イネスさまはお便りに読みふけておいででしょう。

ドン・ファン、あちらの用意は出来ていますか？

ブリヒダ、おっしゃるまでもございません。言葉たくみに言いふくめて置きましたから、仔羊みたいにおとなしく、お心のまゝですわ。

ドン・ファン、そんなに易々といきましたか。

ブリヒダ、それはもう、お可哀そうに、籠のなかで生れて籠のなかで育った小鳥のような方ですもの。自在に翔けまわれる広い世界と大空のあることをさえ、ご存じありません。自分の翼を太陽の光に照らしてごらんになったこともございませんので、光に輝くわが色香をもお知りになりません。お可哀そうに、まだ十七の春も迎えたばかりで、戀心の、その萌しをさえご存じもないおねんねさまで、幼いときから、厳しいお躰けでお育ちなさって、あの殺風景なお部屋のそとに、樂しみの世界のあるさえ、考えてもごらんにならないのです。修道院の、ひっそりとした長い長い單調な年月の生活に、イネスさまのお心は、それこそつましいことに、まったく小さな世界に、ほんとにご自身の身のまわりのことにだけ限られてしまいましたね、修道院を自分の運命、ご祭壇を最後の目當てとなさっているのでございます。『こゝに神さまがおいで

です』と言われれば『こゝでお祈りいたします』と答え、『こゝが合廊下で、こゝが合唱臺』と聞けば、『そのほかに、何があるらう』とお考えになるばかり。あどけない夢よりほかに夢みることもなさらず、十七年の年の流れたことさえ知らずに過されているのでございます。

ドン・ファン 美しくなつただらうな。

ブリヒダ それはもう、天使さまさながらでございますわ。

ドン・ファン それで、もう言つて聞かせてあるの？……

ブリヒダ それはもう、考えてもくださいませ、ドン・ファン。どうしてわたくしが、あの方の頭に、くだらない餘計なことを、ごちゃ／＼詰めこむのですか。たゞ、人の愛のこと、世間というもののこと、都のこと、人間の樂しみのこと、それから、あなたが女の人に、どんなに優しくて親切であるかなどと話しましたの。そしてまた、ファンさまこそ、お父さまのお決めたさつた聲がねでございますよと、申しましてね、ファンさまには、あなたさまのことを死ぬほど思つていらつしゃる、あなたさまゆえ氣も狂うばかりにお苦しみ、あなたさまのためなら、命も名譽も投げ出すほどだと、申しあげましたわ。わたくしの、このうれしい言葉があの方の耳に優しく深く浸みこんでいきましてね、眠りかけた願いと望みの火を掻き立てましたの。あの胸の火を燃え立たせたものですから、いまはもう、あなたさまをお慕いし、戀い焦れて、

あなたさまのことよりほか、考えることもございません。

ドン・ファン 火に油を注ぐよりな話を聞いて、五感が痺れる。胸は燃えて、身も世もあらぬ思いに、はち切れそうだ。最初は賭けに始まって、かりそめの浮き心を動かし、最後は眞實の戀に變つた。胸が焼けたゞれる思いだ。あの女を奪うためなら、修道院はおろか、地獄のなかへ、でも飛び込んでいく。おゝ、麗わしい花、そのうてなは、まだ朝露にも綻び出してないのだ。このドン・ファンが、愛の花苑へ移し植えてやろう。ねえ、ブリヒダ。

ブリヒダ お話を伺っていますと、わたくし、わけが分らなくなります。情も容赦も知らない遊び人とはかり存じあげていましたのに。

ドン・ファン それが、どうして不思議？ そんなやんごとなき姫さまなら、そんじよそこいらの女どもより、二倍も心を惹かれるのは、當然じゃありませんか。

ブリヒダ それはそうでございますとも。

ドン・ファン 修道院の尼さんがたは、幾時いくじごろ、寝るのです？

ブリヒダ もうみんな寝んでいるころですわ。あなたさまの方、すっかりご用意はよろしいんでございますの？

ドン・ファン あゝ、すっかり。

ブリヒダ アニマの鐘(夜の九時に鳴らす鐘―譯者註)が鳴りましたら、扉を越えて、植込みにお忍びください。
さつきお届けした鍵で、わけなく建物のなかにはいれますわ。暗いせまい廊下を、ずっと真直ぐおいでくだされば、わたくしどもの僧房に突きますわ。

ドン・ファン その大事な大事な寶ものがまんまと盗み出せたら、あなたを金貨の重みでへたばらせてあげなきやなりませんね。

ブリヒダ わたくしのことなら、どうぞご心配なく……

ドン・ファン それでは、お歸りになって、待つててください。

ブリヒダ では、ごめんなさいませ。わたくし正門をはいって、玄關番のマリーアをまいとかなくちや。では、のちほど。

(ブリヒダ退場。これより少しまえ、チウッティ登場して、正面奥に立って待つている)

第十景

ドン・ファンとチウッティ

ドン・ファン りん、素晴らしい冒険だ！ いままでも大いにやらかした。しかし、今度の一件こそは、このドン・ファンをドン・ファンたらしめるものだ。だが、もうチウッティが待つて

いるらしい。おい！（と、呼びかける）

チウツティ　へい。

ドン・ファン　ドン・ルイスは？

チウツティ　今日のところ、あっちの方はご安心くださいませ。

ドン・ファン　さて、ルシーアに會つときたいが。

チウツティ　こちらへお出でになれば（と、右手の格子窓を指し）呼んで見ましょ。出て來ましたら、

旦那が顔をお出しになったらよろしゅうござえましょ。

ドン・ファン　呼んでみな。

チウツティ　わしめの合圖じゃ、出て來ないかも知れせんな。

ドン・ファン　出て來たら、あとはおれが引きうける。

（チウツティ、かねて示しあわせてあったらしい合圖の仕方、格子窓を叩く。ルシーア、覗きかけるが、
ドン・ファンの姿を見て、ためらう）

第十一景

ドン・ファン、ルシーア、チウツティ

ルシーア　なんでもございましょうか。

ドン・ファン　あのね。

ルシーア　はあ、なんでもございましょうか知ら。

ドン・ファン　見たいんだ。

ルシーア　ごらんなさりたいとおっしゃいまして……　こんなお時刻に、なにを……

ドン・ファン　お嬢さんだ。

ルシーア　いけませんわ。お歸りなさつて。こゝを、どなたのお住居とお考えでございませぬの？

ドン・ファン　ドニャ・アーナ・パントーハ。そのお嬢さんにお目にかゝりたいと言うのです。

ルシーア　お嬢さまのご祝言をご存じないんですございませぬの？

ドン・ファン　あすだろり。

ルシーア　いまさら、そのような不實をなさるはずございませぬ。

ドン・ファン　そうとばかりは限らない。

ルシーア　でも、ルイス・メヒアさまの奥方ときまつたお體ではございませぬか。

ドン・ファン　なあに、それは明日のことだ。今日は明日と違ふよ、ルシーア。わたしは、きよ

ろドニャ・アーナに會いたいんだ。あす祝言を擧げるにしても、あしたはあしたの風が吹くさ。

ルシーア はあ、お目にかゝることになっていませんか？

ドン・ファン そのはずだ。

ルシーア では、どうせよとおっしゃいますの？

ドン・ファン 開けるんだ。

ルシーア まあ、このお城が、なんで開きましょう。

ドン・ファン この財布で開けるさ。

ルシーア お寶？

ドン・ファン ほら、君の目が寶の光に眩んだらう。

ルシーア どれだけあるのでしょうか？

ドン・ファン 百枚以上。

ルシーア まあ！

ドン・ファン 數えてごらん。そして、言つてごらん、『この家の戸が、この財布で開くか知

ら？』ってね。

ルシーア あたしにちよつぱり金色を塗つてくださる、あなたさまは？……

ドン・ファン (進んで) 金の唸っている男。

ルシアア はあ？ いえ、優しいあなたさまのお名前は、失禮ですけれど。

ドン・ファン ドン・ファン。

ルシアア お苗字は？

ドン・ファン テノリーオ。

ルシアア あれま、あなたさまがドン・ファン……？

ドン・ファン なにをびつくりすることがあるの？ 金の唸っているドン・ファンが来たからと

言つて？

ルシアア 鍵の音がすると困りますわ。

ドン・ファン 大丈夫さ。

ルシアア じゃ、誰があたくしを大丈夫にしてくれますの？

ドン・ファン 君がだよ。

ルシアア あたくしの行く先きを、なにが切り開いてくれますの？

ドン・ファン 君の才覚さ。

ルシアア いやですわ。悪魔にさらわれて、歸ってください。

ドン・ファン 金貨を二倍に積むがね。

ルシーア　じゃ、仕方ございませんわ。

ドン・ファン　それ見なさい。君の才覚ひとつで、君の運は開けるんだ。

ルシーア　どうぞ暫くお待ちくださいませ。

ドン・ファン　十時までだ。

ルシーア　どこかへ参るのですか、それとも、あなたさまがおいで下さいますの？

ドン・ファン　僕の方から、こゝへ来る。

ルシーア　それでは、きつとその時刻にお出でくださいますわね。よろしゅうございますね？

ドン・ファン　あゝ、来る。

ルシーア　では、鍵、持ってまいりますわ。

ドン・ファン　そしたら、いまと同じだけ金貨を積もう。

ルシーア　きつと！

ドン・ファン　間違はなく、きつと。十時には来る。それじゃ、さようなら、安心していなさい。

ルシーア　あたくしの方も、ご安心くださいませ、ご親切なお方！

ドン・ファン　それじゃ、さようなら、氣さくなルシーア！

ルシーア　そいでは、ごめんください、お金持ちのファンさま！

(ルシアア、窓を締めれば、チウツテイ、ドン・フアンの手摺きに從つて、近づく)

第十二景

ドン・フアンとチウツテイ

ドン・フアン (ほくそ笑みながら) 地獄の沙汰も金次第さ。チウツテイ、分っているな? いゝか

い? 九時には修道院、十時にはこゝだ。

第三幕 神聖冒瀆

登場人物

ドン・フアン

ドニャ・イネス

ドン・ゴンサロー

ブリヒダ

修道院の尼長

同じく受付係の尼僧

ドニャ・イネスの僧房。——正面と左手とにそれ／＼入口。

第一景

尼長 それでは、お分りになりましたわね？

ドニヤ・イネス はい、尼長さま。

尼長 それは、たいへん結構でした。それがお父さまの思召しです。あなたは、まだお若くて、心も清らかに素直なひと、生れ落ちる直ぐとから、この修道院に育って、ありがたい生涯の誓約に身をいまして、これまで大きくおなりでした。そのため、ほかの人々のように、苦しい試煉も苦業もなさることがありませんでした。え、そう。あなたは百倍も千倍もご幸福な方ですわ、ドニヤ・イネス。世間をご存じないんですから、世間の怖いことをもお知りでなく、お任せですよ、あなたは。修道院の敷居をまたいだが最後、もう後に残して来たことを振り返ることもございませんし、清浄なご聖壇のおそばでは、俗界の不浄な快樂ひらめきなどに心を惑わされることもありません。こゝの聖なる塀の外の世界をご存じないので、塀の向うにあるものを欲しがることもありません。あなたは言わば、自分の生れた花園で、育ててくれた飼主の掌の餌をついばむことだけ教わった、おとなしい鳩ですわ。金網に護られて、それから外へ出たこともありませんから、大空に羽搏く願ひも起らないのです。あなたは優しい百合の花ですわ。莖が揺れるとしても、それはたゞ花吹雪風の香わしい微風にそよぐだけでした。この中で、

そよ風の口づけに、花のうてなを開き、葉を攜げ、そうして靜かに地に落ちる日を待つのでございますわ。こゝの大地の一隅がわたくしどもの狭い世界、この地をば、安らかな夢を抱いて憩うべき臥床と見、格子窓から覗く大空の一角を、天國の入口にかゝる空色のカーテンと見るばかりなのでございますよ。あゝ、ほんとに幸福なイネスさま。わたくしはあなたを羨ましいと思います。罪障のない生活、ものごとを知らないという功德を羨みますわ。——でも、なぜうつ向いてばかりいらっしゃいますの？ こんなお話をしますときは、いつでも愉しそうでいらっしゃるのに。どうして、ご返辭なさらないの？ まあ、溜息なんかなさって？…… あゝそう、あなたの先生がまだお歸りなさらないので、案じていらっしゃるのね。でも、心配ありませんわ。きょう日が暮れてから、お父さまにお目にかゝるため、お宅の方へ参りましたの。でも、もう玄關まで歸って來ているかも知れませんか。すぐこゝへ來るよりに言いますわ。今夜はわたくし、お通夜します。では、イネスさま、さあ、お寢みなさい。もうお時刻ですわ。新發意の人々によくない癖がつくといけませんから。みんなは、もう大分まえに寢みましたわ。ではね。

ドニヤ・イネス　お寢みなさいませ。尼長さま。

第二景

Fニヤ・イネスのみ

あゝ、あたし、どうしたと言うんでしょう。いろんな思いがいちどきに、ごっちゃになって攻め立てて来る。いつもの夜なら、尼長さまが、院内の法悦やもの静かな生活を、あんなにお上手に話してくださいと、愉しい心でお聞きしました。聞いていますと、院内の淡々とした幸福、幸おおい安らかさに、またひっそりと静かな空氣、こゝの嚴しい戒律に、あくがれを見るのでした。それなのに、今夜は、うわの空で聞いていました。お話がうるさかったとは言いませんけど、味も實もないものに思えました。あたくしの得度の日が早くなるかも知れないと言われたときは、なぜか知らないけれど、體がわなく、慄えました。急に胸はどき／＼するし、顔色は黄いろく變った氣がしました。あゝ、あたくし！……でも、先生は、どうなさったのでしょう？……先生は、でも、先生のお話を聞いているのは、閉つぶしになることもありませんわ。それに、今晩は、先生のいないのが淋しい……きつと、もうじき先生ともお別れしなきゃならないからでしょう。だって、得度したら、好きなものを、すっかり諦め棄てなきゃならないんですもの。おや、廊下に足音がしますわ。あたくし、先生は、足音で分ります

……
あら、歸っていらつしやっただわ。

第三景

ドニヤ・イネスとブリヒダ

ブリヒダ たゞいま、イネスさま。

ドニヤ・イネス ずいぶん遅くおなりなさいましたのね。

ブリヒダ こゝの戸を締めましょう。

ドニヤ・イネス 開けておくのが、掟てではございませんの？

ブリヒダ それは、ほかの新發意の方々には、終身神に捧げる體でございますから、たいへん大切な戒律ですの。でも、イネスさま、あなたさまには構いません。

ドニヤ・イネス 先生、それは修道院の掟てに背くことにはなりませんの？ 許されてないこと

では……

ブリヒダ こうした方が安心なのですよ。締めておけば、邪魔ものも來ませずね、うちあけたお話ができますわ。さっきお持ちしたご本、ごらんなさいまして？

89
ドニヤ・イネス あら、すっかり忘れていましたの。

ブリヒダ まあ、忘れてたなんて、おかしゆうございますわ。

ドニヤ・イネス 尼長さまが、あれから直ぐお出でになりましたものですから。

ブリヒダ まあ、遠慮知らずなお婆さん！

ドニヤ・イネス このご本、そんなにためになるのでございますの。

ブリヒダ もう、それは、とつても。——それじゃ、あの方、^{かた}すこし當てがはずれましたわ。

ドニヤ・イネス どなた？

ブリヒダ ドン・ファン。

ドニヤ・イネス まあ、そうなんでございますの？ それでは、このご本を差入れて下さいまし

たのは、ファンさまでございませうの？

ブリヒダ さようでございませうよ。

ドニヤ・イネス あら、では、戴いちゃなりませんわ。

ブリヒダ まあ、お可哀そうな方！ あなたさまがそんなにお嫌いなさると、あの方を死なせる

も同然でございませうよ。

ドニヤ・イネス え、何をおっしゃいますの？

ブリヒダ このご祈禱書をお受けなさらなかつたら、あの方、悲しんで、悲しんで、ご病氣にな

つちまいますわ、ほんとに！

ドニヤ・イネス いけません、いけません。それなら、戴きますわ。

ブリヒダ それがよろしゅうございますとも！

ドニヤ・イネス まあ、きれいなご本なこと！

ブリヒダ それごらんないませ。お悦ばせしたいと、あの方、それこそ夢中でございますもの。

ドニヤ・イネス 金の留^{かぎ}め金などついていて！ まあ、ずいぶんと固く結んでありますわ。さあ、

お祈りの詞がなんでも載っているのか知ら。(本を開くと、頁の間から一通の封書が落ちる)

おや、落ちたのは、なんでしょう？

ブリヒダ お手紙ですわ。

ドニヤ・イネス お手紙！

ブリヒダ お手紙ですわ。贈物をなさると言つて、書いてあるのでございませう。

ドニヤ・イネス え？ では、あの方からのお便り？

ブリヒダ まあ、なんて罪のないおひと！ だって、あなたに贈物をなさるのですもの、お手紙

もあの方からに決まっていますわ。

ブリヒダ どうなさいました？

ドニヤ・イネス なんでもございませぬ、先生、なんでもございませぬ。

ブリヒダ いえ／＼、お顔色がちがいます。(傍白) そら、もう綱にかゝったわ。——お直りになりました？

ドニヤ・イネス ええ。

ブリヒダ 軽い目まいかなんかでございましょう？

ドニヤ・イネス 手紙をもつ手が、あゝ、燃えるようです！

ブリヒダ おゝ、イネスさま、このようなあなたを、まだお見懸けしたことがございませぬ。慄えていらつしやる！

ドニヤ・イネス あゝ、あたしは！

ブリヒダ どうして、またそんなに？

ドニヤ・イネス 自分でも分りませぬの……心の野原を、正體もはっきりしない、いろんな黒い影が、さまよい歩いているような氣がして、その影に、たゞもう怯えていますの。そして、だいぶまえから、あたくしの魂は、その戦きに惱まされつゞけています。

ブリヒダ その影のなかには、もしかしたら、フアンさまの面影も交つてるのじゃありません？

ドニヤ・イネス さあ。ねえ、先生、先生のお口からあの方の名前を聞いてから、そしてまた、あの方のお姿をちよつと見てからと言いますもの、いつもお姿が目のまえにちらついてなりません。どんな場所にいても、あの方の楽しい思い出に、ぼんやりしてしまいます。すこしの間、忘れることがあっても、すぐまた同じ思い出に耽っているあたたくしでございます。なんと言つていゝか分りませんが、不思議な魔力があたくしの五感に働きかけて、心も魂も、絶え間なくあの方のほうへ引きずられていますの。こゝにいても、お祈禱所でも、どこへ行つても、あたたくしの思いは、テノーリオさまの面影をしのんで、愉しんでいますの。

ブリヒダ まあ、いゝ、イネスさま。お話を聞いていますと、それが、どうやら戀ごころというもののだと、考えたくありませんわ。

ドニヤ・イネス 戀ごころつて！

ブリヒダ えゝ、戀でございますよ。

ドニヤ・イネス いえ、決して、決して！

ブリヒダ いゝえ、どんなに物のわからない人だつて、それは戀だと申しますわ。でも、お便りをこらんなさいませ。まあ、どうしてそんなに考えこんでおしまいなさつたの？ 溜息なんかなさつて？

ドニヤ・イネス あゝ、お手紙を見ると、見れば見るほど、讀むのが怖くなってまいります。
と、讀む)

『わが魂なる君、ドニヤ・イネス』

まあ、なんとという書き出しなんでございましょう！

ブリヒダ 詩でございませうのね。韻を踏んで、詩で書いていらっしやるのですわ。でも、つぎを
讀んでごらんなさいませ。

ドニヤ・イネス (讀む)

『太陽の光輝をあざむく光なる君

麗わしき翼をとらえられたる小鳩、

この拙き文字、おんみの美しき瞳を

けがしたまうを 願わくは 赦したまいて

最後まで……』

ブリヒダ なんてご謙遜な、またお優しいおこゝろね！ これほどのしおらしさって、またとご
ぞいませんわ。

ドニヤ・イネス 先生、あたくし、自分で自分の氣持ちがわかりません。

ブリヒダ つぎを、つぎをお読みになつて。

ドニヤ・イネス (讀む)

『わがたらちねは 二人のために
華燭の式を取りきめたまう。

大が定めたえにしだからです。

そのとき以來 わたしの魂は

うれしい希望に 心たのしく

おゝ、ドニヤ・イネス！ おんみのほかは

思う未來も ありません。

希望と愛が わたしの胸に

はじめ、小さな灯をつけました。

その火は やがてわが身のうちで

烈しい愛戀の焰とかわり、

消す由もなく 日々に大きく

わが身を焦がして

燃えさかるのです』

ブリヒダ　そうでございませうとも！　あの方にあなたを戀い焦れさせるようになってから、ずいぶんお待ちでしたのですもの。その芽を摘み取ろうとしたときは、もう深く深く根をおろしてしまっていました。そのつぎを。

ドニヤ・イネス　（讀む）

『お目にかゝることを強いて避け

時を過して、焰を消そうとしたのも空しく

火焰の方は　さらに激しく　いまは早や

焰というより　火山の火なのです。

いま　わたくしは　劫火に煽られつゝ

わたしの墓所とおん身の間さまよい

たゞひとり　悶え跪いているのです』

ブリヒダ　それごらん下さい。イネスさま。このご祈禱書を見向きもなさらなかつたら、すぐに

もあの方に經帷子を縫ってあげなきゃならないと申しましたのは、それなのでございますよ。

ドニヤ・イネス　あたくし、氣も遠くなりそうでございませう。

ブリヒダ では、つぎを。

ドニヤ・イネス (讀む)

『わが魂の魂なる君、ドニヤ・イネス
わが生命を久遠に捉えたる君

水底の藻に 隠れて光る 殻なき眞珠
巢を飛び立って 澄み渡る蒼穹に

翼をのべることを思わなかつた白き鷺

思い悩みつゝ、その固い いましめの扉の彼方に
廣い世界を見たまうならば

自由の天地に焦れるならば

思いたまえ、君!

おん身をはぐむ 障壁のもとに

ドシ・ファンが 腕をひらいて

おん身を救い出そうと

お待ちしはべる、と』

あたくし、どうしたのでしょうか？ あゝ、あたくし、死んでいくような気がします。

ブリヒダ (傍目) 鉤はしっかりかゝつてしまったわ。——さあ、もうじき、終わりますでしょう？

ドニヤ・イネス (讀む)

『おん身の窓の下に おん身のゆえに

涙するものあるを 思ってください。

そこに日を送り 夜を過しているのです。

おゝ、わが生命なる君！ おん身のゆえに

甲斐なきいのちを 生きる身の

世にあることを思ってください。

お聲をかけてくださいまし。

飛んで 足下にまいますよ』

ブリヒダ そら、ごらんなさい。あの人、まいますよ。

ドニヤ・イネス 來るのですって？

ブリヒダ 足もとへ、ひざまずきに。

ドニヤ・イネス そんなこと！

ブリヒダ 來ますとも！

ドニヤ・イネス あゝ、聖母さま！

ブリヒダ でも、おしまいまで、お讀みなさいませ。

ドニヤ・イネス (讀む)

『さらば、わが腫の光なる君、

さよりなら、わが魂のドニヤ・イネス、

こゝに書きつらねた つたない言葉を

靜かに 胸に考えて ください。

修道院は かならず かならず

おん身の墓穴。

もしそれを 心においといなさるなら

言ってください。このドン・ファンは

おん身の美しさのゆえに

何事にも怖れず ひるまぬ覺悟です。』

(以下ドニヤ・イネスの盛詞)

こんな紙切れでもって、なんとという毒を浸みこませるのでしょう。胸の裂かれる思いがいたします。あたくしの魂のなかで、眼を覺ました、この思いは、なんとという感情でしょう？ これまで一度も感じたことのない、この激しい力は？ いままで見たことのない、この光は？ この新しい、深い深い焦れる思いが、あたくしの胸のうちで、頭を擡げて來ました。これは、いったい、なんでしょう？ 魂の靜かな安らぎを奪ってしまったのは、いったい、なにものなのでしょう？

ブリヒダ それが、フアンさまですよ。

ドニャ・イネス フアンさま？…… フアンさまは、どこまで、あたくしに附きまとって來るのでしょうか？ たった一度お名前を聞いただけ、たった一度お姿を見たりなのですのに？ ああ、天が二人の運命を結びあわせたとありましたのは、このことか知ら？ そして、あたくしの胸に、どりにもならないこの思いを植えつけなされたのですわ。

ブリヒダ ちよつとお待ちになつて！

(アニマの鐘が聞える)

ドニャ・イネス なんですございますの？

ブリヒダ ちよつと。

ドニヤ・イネス 體がふるえてしかたがありません。

ブリヒダ 鐘が聞えますでしょう、ドニヤ・イネス？

ドニヤ・イネス はい、いつものように、アニマの鐘が鳴っていますわ。

ブリヒダ では、あの方のお噂はおよしなさいませ。

ドニヤ・イネス まあ、どなたの？

ブリヒダ どなたもございませんわ。それほどに戀い焦れていらっしやるフアンさまですわ。噂をすれば影とやらと申しますもの。

ドニヤ・イネス おゝ、怖い！ こんなところへいらっしやるわけがございません。

ブリヒダ ないとは限りませんわ。あの方のお名前を呼ぶ聲の響きが、あの方のところまで届くかも知れませんもの。

ドニヤ・イネス まあ！ でも、そんなことが……

ブリヒダ ないとは限りません。

ドニヤ・イネス それだったら、幽霊ですわ。

ブリヒダ いゝえ、あの方、鍵をもっていらっしやいますもの……

ドニヤ・イネス まあ！

ブリヒダ ちよつとお待ちになつて、ドニヤ・イネス。足音が聞えませんか？

ドニヤ・イネス えゝ、もう、なんにも。

ブリヒダ 九時が鳴りました。上つて來ました…… こちらの方へ…… あら…… もうこゝに

お出です。

ドニヤ・イネス どなた？

ブリヒダ あの方。

ドニヤ・イネス フアンさまだ！

第四景

ドニヤ・イネス、ドン・ファン、ブリヒダ

ドニヤ・イネス あ、なんでしよう？ 夢…… 氣の迷い？

ドン・ファン おゝ、イネス！

ドニヤ・イネス 目に見えるのは、ほんとのこと…… それとも、あやかし？…… 體をさゝえ

て！ 息が苦しい…… 幽靈よ、あっちへ、あっちへ行つて！ あゝ！……

(ドニヤ・イネスは失神する。ドン・ファンがこれを支える。ドン・ファンの手紙は、ドニヤ・イネスの倒れた

はずみに、床に落ちる)

ブリヒダ 不意にお出ででしたので、びっくりなさったのですわ。あんまり驚いて、氣を失ったのですわ。

ドン・ファン 勿怪の幸いだ。これで、手数が半分省ける。こゝで、可愛い顔を眺めまわして、暇潰しなんかしていたら、こつちが身の破滅だ。さあ抱いて歸ろう。一ときも早く、誰もいないうちに、あの廊下を通り抜けなくちゃ。

ブリヒダ おや、そんなにして、連れ出しなさるの？

ドン・ファン 著碌しなさんな。こゝに置いてくぐらいなら、なにもわざわざ、修道院の門破りなぞしますかね。連中が、したで待っている。早く來なさい。

ブリヒダ おゝ、魂消ました！ おゝ、この人は猛獣です。とめることも押えることも出来ません…… えゝ／＼。あとから参ります。

第五景

尼長ひとり

この廊下のあたりに、えゝ、確かに足音がしました。今晚はドニャ・イネスに、いつもより

夜更かしさせてしまったので、気がよりです……でも、二人ともいない。二人とも部屋をあけるなんて、どうしたのでしょうか？ どこへ行ったのか知ら？ さあ、二人をとっちめて、新發意の人たちが謀叛氣を起さないように、その見せしめをしなきゃ……きつとしてやる。でも、そこに、人の足音が……どなた？

第六景

尼長と受付係の尼僧

受付係 わたくしでございます、尼長さま。

尼長 あなたでしたの？ こんな時刻に、こんなところへ、どうしたの？

受付係 尼長さまをお探ししていましたの。

尼長 どうして？

受付係 あの、ご老體の方がお目にかゝりたいとおいでになりました。

尼長 それ、いけません。

受付係 カラトラバ會の方で、そのお資格でいらっしゃいまして、火急なご用件で、いますぐお目にかゝりたいと申されるのでございます。

尼長 お名前を伺いました？

受付係 ドン・ゴンサーロ・ウリョアと申されました。

尼長 どんなご用件か知ら？…… お通ししなさい。その方なら、カラトラバ會の地頭さまですわ。お通し申しあげなさい。

第七景

尼長、のちにドン・ゴンサーロ

尼長 こんなに晩く、不意にお見えになるのは？…… 思いあたりませんが…… でも、わたしには好都合でした。お嬢さんのいらっしやらないのを見たら、きっとご立腹ですわ。そして、こんどのご決心が、いよく固くおなりになるわ。

第八景

尼長、ドン・ゴンサーロ、入口に受付係の尼僧

ドン・ゴンサーロ 尼長どの、このような時刻にお騒がせして、相済みません。がしかし、ことはわたしの名譽と生死に關わる問題でして。

尼長 それは、それは！

ドン・ゴンサロー それはですね。

尼長 どんなことでございましょう？

ドン・ゴンサロー わたしは今日まで、黄金に優る寶をもっておりまして。寶というは、申すまでもなく、イネスのことです。

尼長 それにつきましてでございますが……

ドン・ゴンサロー いや、お聞きください。いまひとの話に聞きますと、古今無雙に不逞無頼の男と悪名の高いドン・ファンの従者とイネスの傳育係の先生とが、いましがた町なかをひそひそ語りながら歩いておったというのです。まえには、娘をドン・ファンに興えようと考えておりましたが、それを斷つた。すると、「それなら、イネスをあなたの手から盗んで見せる」と、こう高言を切る始末です。あれこれ考え合わせて見れば、娘の先生が、あの不埒な若者に取りいられているのは、うたがひ餘地がありません。そこで用心にも用心が肝要で、一日、一時間の油斷で、あの悪魔の申し子のために、わたしの顔が踏んづけられないとも限りません。わたしの心配も、これでお分りのことと思えますが、結局、その先生のこと、いま參ったわけなんです。それに、尼長さんには、イネスの得度を急いで戴きたいのです。

尼 長 お父さまの身として、ご心配はごもつともでございます、地頭さま。けれど、わたくしどもの方の名譽ということも考えていたゞきませんと。

ドン・ゴンサロ ドン・ファンという男が、どんな人間だか、ご承知ありませんな。

尼 長 その方をずいぶん悪者とお考えのようでございますけれど、イネスさまがこゝにいらつしやるうちはどうぞご安心なすってくださいませ、と申しあげますわ、ドン・ゴンサロ。

ドン・ゴンサロ そうとは存じております。しかし、議論はよしまして、とにかく、その傳育係を呼んでいたゞきたい。まあ、わたしのつまらない心配はお赦し願うとしまして。尼長は尼長としての責任をお持ちくださるのは忝けなく思いますが、わたしはわたしとして、世間の向う見ずな若い者というものを知っておるつもりでおります。

尼 長 それでは、お望みどおりにいたしましたしよ。——じゃね、あなた、イネスさまと先生を探して来て頂戴。(受付係退場)

ドン・ゴンサロ なんです、尼長さん？ これはわたしの思い違いですか。この時刻には、もう二人とも寝ておることばかり考えておりましたか。

尼 長 それが、なんです、さつきお二人とも出懸けた様子でございましたの。

ドン・ゴンサロ あゝ、わけも分らず、體が慄える。おや、これは何だ？ 手紙だ…… どうも

氣が氣でなかったが、蟲の報らせでしたわい。(と、讀む)『わが魂なる君、ドニヤ・イネス……』署名はドン・ファン。これを、これを、見てごらん……これこそ證據文書だ……そこを讀んで見なさい。あなたが娘のために、むにゃ／＼お祈りしとる間に、悪魔が忍びこんで、さらつて逃げたのだ。

第九景

尼長、ドン・ゴンサロ、受付係

受付係 尼長さま！……

尼長 なに？

受付係 息が詰まりそうで。

ドン・ゴンサロ 早く、早く言いなさい。

受付係 なんと申してよろしいやら……ひとりの男が植込みの塀を飛び越えて出るのが見えま
した。

ドン・ゴンサロ えつ、なに？ 追っ駈けよう。おゝ、おゝ！

尼長 どこへいらっしやいます、地頭さま？

ドン・ゴンサロー とぼけなさるな！
あんたの手許にあずけてあったに、盗み出された、わし
の娘と名譽を取り返すの仲や。

第四幕 悪魔は天國の入口に

登場人物

ドシ・ファン
 ドニヤ・イネス
 ドン・ゴンサロ
 ドン・ルイス
 チウツテイ
 プリヒダ
 警吏 甲及び乙

セビーリヤの郊外、グアダルキビル河に臨むドン・ファン・テノーリオの別荘。——正面
 奥に出窓。左右兩側に、一つずつの入口。

第一景

ブリヒダとチウッテイ

ブリヒダ ほんとに、なんという夜でしょう！ こんなことと分っていたら、あんなひどい人のお役なんか、つとめるのじゃなかったわ。あゝ、チウッテイ、あたし、體がこなくぐになりました。身動きもできないわ。

チウッテイ だが、どこが痛むんですね？

ブリヒダ どころ言つて、體じゅう、體も心も……

チウッテイ そうでしょうな。馬にお慣れでねえから。あたりめえでさね。

ブリヒダ なんと落つこちるかと思つたか、知れやしない。ほんとに、なんて走りようだったでしょ？ ひどかったわ。街の並木が目のまえを、羽が生えて、どん／＼飛ぶようだったわ、大風に吹きまкруられたようだった。あんまり速いので、この世の終りかと思えましたよ。もう少し走りつゞけたら、目も耳も利かなくなりそうでしたよ。

チウッテイ ところが、こゝのお宅にいたら、こんなことなら、一週間に、少くとも六べんはありませぬ。

ブリヒダ まあ、驚いた！

チウツテイ あの娘さんは、まだ眠っておりますかね？

ブリヒダ 覚めるどころじゃありません。

チウツテイ そうだね。ファンさまに抱っこされて、目を覚ましたほうがよかろう。

ブリヒダ どうやら、あなたの主人は、悪魔に親戚がありそうね。

チウツテイ なに、ご本人が人間の皮を着た悪魔でさ。魔王でないかぎり、旦那にゃかないませんや。

ブリヒダ おゝお？ たいへんなことでしたよ！

チウツテイ でも、とう／＼思いを遂げなされましたよ。

ブリヒダ セビーリヤ見たいな大都會の、まったぐ中にある修道院から、あんな風に逃げ出すなんて！

チウツテイ 旦那見てえな人でなきや出来ない藝當でさ。だが、なんとというお人だ！ いつでも

幸運がついてまわって、幸運の神が傍から離れねえんでね、そして、悪運の神は鎖に繋がれて、旦那の足もとで、おとなしく眠っているのです。

ブリヒダ なるほど、あなたの言うとおりですわ、まったく！

チウツテイ あんな膽たまつ玉のふてえ人は見たことがねえです。まったく怖いこと知らずで、どんな難題に遭つても、やるとなると一時もぐずぐずしねえ。向う見ずな仕事には、何にでもぶつかって行く。それでいて、きれいにやつてのけるのですからね。場所も事わけも見も聞きもしねえで『あすこに出入りがある!』と聞いたが最後、即座に『ドン・ファンが引きうけた!』と来ますでね。それにしても、お歸りが、ばかに暇どりますわい! どうしたことだ!

ブリヒダ お寺の鐘が十二時を打ちましたのは、だいぶまえですわ。

チウツテイ 十二時には、お歸りになっていなきゃならないはずだが。

ブリヒダ でも、なぜわたしたちと一緒にお歸りなさらなかったのですの?

チウツテイ まだ町で、いろ／＼始末しなきゃならねえ用事がござえましたんで。

ブリヒダ 旅のお支度?

チウツテイ もちろん、旦那は今夜このまゝ地獄へ旅立ちなされねえとも限りませんでね。

ブリヒダ まあ、なんてこと、おっしゃるの?

チウツテイ いや、それは無事なお歸りを待つと仰うことでさ、それが佛心というものですよ。

そりゃ、たしかにお歸りになるのは、お歸りなせえますがね。

ブリヒダ きつと? チウツテイ?

チウツテイ この出窓へ出て、見てごらんませえ。見えますかね。

ブリヒダ 船が一艘、河にもやっていますのね？

チウツテイ 船長は、もう旦那の命令を待つばかりでさ。そうなれば、どっちにせよ、わしたちみんなを、無事イタリヤまで連れてつてくれますよ。

ブリヒダ ほんと？

チウツテイ 海のうえのことは、なんの心配もご無用ですわい。あれは脚の速い船でしてね、水のうえを飛ぶように走るんでさ。

ブリヒダ しっ！ もう、どうやら、イネスさまが……

チウツテイ そいじゃ、わたしゃあっちへ行きますか。ドニャ・イネスには、あんたさんのほかは口を利用してはならねえと、旦那から言われていますでね。

ブリヒダ え、そりですの。こちらのことはみんな、あたしが呑みこんでいますから。

チウツテイ じゃ、ごめんくださいませ。

ブリヒダ 失禮します。

第二景

ドニヤ・イネス あゝ、あたし、なんて夢を見たのでしょう？ あたし気が狂ってるんだわ！

もう幾時でしょう？ でも、これは、どうしたことでしょう？ あゝ、あたし！ あたし、このお部屋、ちつとも見覚えがないわ。こんなところへ、誰に連れて來られたのか知ら？

ブリヒダ ドン・フアン。

ドニヤ・イネス また、ドン・フアン…… 先生もこゝに來ていらっしゃいますのね、ブリヒ

ダ？

ブリヒダ えゝ、イネスさま。

ドニヤ・イネス 教えてください。こゝ、どこのの？ これは修道院のお部屋ですの？

ブリヒダ いえ、そんなところじゃございません。修道院はまるで豚小舎でした。みじめという

より外、なにも言いようがありませんでしたわ。

ドニヤ・イネス でも、こゝは、どこなんですの？

ブリヒダ ごらんなさい。この出窓から見てごらんなさいませ。尼さんばかりの修道院とドン・フアンのお別荘と、どのくらい違うものか。

ドニヤ・イネス こゝはフアンさまのお別荘ですの？

ブリヒダ いえ、もうあなたのものでございますわ。

ドニャ・イネス ブリヒダ、あたし、おっしゃることの意味が分りません。

ブリヒダ お聞きあそばせ。あなたは修道院のなかで、ファンさまのお便りを夢中でお読みでした。そのとき怖ろしい火事が起りました。

ドニャ・イネス まあ！

ブリヒダ もの凄、怖ろしい火事でございます。煙は大變濃くなって、手でつかめるほどでございますよ。

ドニャ・イネス あたしには思い出せませんけれど……

ブリヒダ あなたはお手紙をお読みでしたし、わたくしはそれに聞きほれて、二人ともそれに夢中で、身の危険も忘れていました。ほんとにお優しいお便りで、それを讀んで心の底の悩みを忘れていました。ところが、もうほとんど息も出来なくなり、焰はわたくしどもの寢臺まで焼き始めました。二人は窒息するばかりでございます。そのとき、あなたをお慕いして修道院のまわりを、あちこちなさっていたファンさまは、烈しい火焰が風にあふられて、いよ／＼烈しくなるのを見、あなたさまも焼死なされようとするのを見て、わたくしどもを助けに、どこからおはいりになったか存じませんが、勇氣をふるって、飛び込んで来てくださいました。

思いがけなく僧房に來られたのを見て、あなたは失神なさいました……それは致し方もございません。思いもうけないことではございません。でも、あなたがそんな風にお倒れになりましたので、ファンさまが兩腕にかゝえて、お逃げになる。わたくしもついて出ました。そうやって、二人を火の中から救い出してくださいました。こんな時刻に、どこへ行つたらいゝでしょう？ あなたはお氣を失つていらつしやる。『それでは、よろしい、夜が明けるまで、わたしの家にお連れしよう』と、おっしゃつて、そこで、イネスさま、二人は、こゝにこうやつているのでございます。

ドニヤ・イネス それでは、こゝはあの方のおうち？

ブリヒダ はい。

ドニヤ・イネス でも、ほんとうに、あたし、ちつとも覚えていませんわ。でも……あの方のおうち！……まあ、すぐさま、こゝを出しましょうよ……あたしには、お父さまのうちがございすもの。

ブリヒダ それはそれでございますけれども。なにしろ……

ドニヤ・イネス なあに？

ブリヒダ 行くことが出来ません。

ドニヤ・イネス 變なこと聞くものですわ。

ブリヒダ セビーリヤから二人を遠く隔てているのは……

ドニヤ・イネス えっ？

ブリヒダ ごらんなさい、あのグアダルキビールの川。

ドニヤ・イネス こゝはもう町のうちではないのですの。

ブリヒダ 町の外れから一レグワも来ています。

ドニヤ・イネス あゝ、あたしたちはもう破滅です。

ブリヒダ なぜそんなこと、おっしゃいますの。

ドニヤ・イネス ブリヒダ、先生はあたしをもみくしゃになさっています。こゝの壁と壁のあいだに張りめぐらせた網は、何という網か知りませんが、あたしは恐くてなりません。修道院から一步も出たこともなく、そとの世界の習慣も知らないあたしですけれど、でも、あたしには誇りというものがございますよ。ブリヒダ、あたしの血管には貴族の血が流れています。

ファンさまの家が、あたしにとって、いゝ場所でないことだけは分っています。なにだか知りませんが、この胸のなかに隠れているものが、あたしにそう教えてくれます。さあ、逃げ出しましょう。

ブリヒダ イネスさま、あなたの生命を救ってくださったのでございますよ。

ドニヤ・イネス え、でも、あたしの胸に毒を入れなさいました。

ブリヒダ でも、あの方をお慕いしていらつしやるのでしょう？

ドニヤ・イネス どうですか…… でも、後生ですから、あの人から遁れましようよ。あの方の

お名前を聞くだけで、気が遠くなります。あ、あの人のお書きになったお手紙をくれましたね、あのなかには、何か呪わしいまじないを、封じこんであつたのですね。あの方を見たのはたった一度だけ、それも、あたしのために來なさつてというのを目隠し格子の隙間から見たきりですのに、先生は、どこへ行つても、あの方のことばかり話して、その頼母しいお姿を想い出させますのね。お父さまがあの方をあたしの掣がねとお決めになつた、あの方はあたしを思つてくださると、あの人にかわつて先生はおっしゃいましたわね。あたしがあの人を愛し
 と思つているって…… え、それでもいゝわ。これを戀と言ふのなら、え、あたしは戀をしています。でも、その戀心の忌むしいことも知っていますわ。そして、弱い心はフアンさまのあとを慕っていますけれど、あたしの誇りと義務の心は、あたしをあの人から引き離そうとするのです。ですから、さあ、早くこゝから遁げましよう。あの方が歸らないうちに。あの方がそばにいらしたら、遁げ出す勇氣がなくなるかも知れません。さあ、早く、ブリヒダ！

ブリヒダ お待ちください。お耳に入りませんか。

ドニヤ・イネス なに？

ブリヒダ 艦の音が……

ドニヤ・イネス ええ、聞えます。舟で町へ帰りましょう。

ブリヒダ ごらんなさい、ごらんなさい、イネスさま。

ドニヤ・イネス とう／＼…… おへ、神さま！ 往きましょう。

ブリヒダ もう出られません。

ドニヤ・イネス なぜ？

ブリヒダ あの舟で川をこつちへお出での方は、あの方ですもの。

ドニヤ・イネス あへ、神さま、力をつけて下さいませ！

ブリヒダ もう着きました。舟からお上りになりましたわ。お付きの人々に家へ送っていただき
ましよう。でも、歸るまえに、ファンさまだけには、ご挨拶しなきゃなりませんわ。

ドニヤ・イネス そうでしょうけど、すぐ歸りましょうね。あの人の顔を見たくありませんわ。

ブリヒダ (傍目) でも、目のまえに来たら、目がひとりでに吸いよせられて行きますよ。――さ

あ、参りましょう。

ドニヤ・イネス 行きましよう。

チウツテイ (奥で) こゝのなかだ。

ドン・ファン (奥で) 灯をつける。

ブリヒダ わたくしたちを探しています。

ドニヤ・イネス あのひとだわ!

第三景

前景の人々とドン・ファン

ドン・ファン どこへお出かけ、ドニヤ・イネス?

ドニヤ・イネス 行かせてください、ファンさま。

ドン・ファン 行かせてください?

ブリヒダ それは、あなた、地頭さまがもう火事のことをお聞きなさって、お嬢さまのことを御

心配でしようと思ひましてね。

ドン・ファン 火事? あゝ、ドン・ゴンサーロの方なら、心配いりません。わたしが使いをや

りましたから、もう安心してお休みでしようよ。

ドニャ・イネス 傳えて下さいましたのです？……

ドン・ファン それはもう、安全にお預りしてあると言つとききました。そして、のどかに野原の清らかな空氣を吸っていますとね。

(フリヒタ退場)

まあ、落着いていらつしゃい。こゝでおくつろぎなさいよ、あなた。あの暗いじめ／＼した監獄みたいな修道院のことなんぞ、いつとき忘れちゃうんですな。どうです、あなた、この人里離れた川岸まで来ると、月の光までが冴えて見えませんか。呼吸いそさえ、のび／＼と出来る氣がしませんか。この快い川岸に咲き出した野草の花の、素朴な匂いを孕んで吹く微風と、歌いながら夜明けをまつ漁師がのどかに舟をやる、この清らかな静かな流れの水は、ねえ、わたしの可愛い小鳩さん、ほんとに戀の息吹きを交わしているのじゃないでしょうか。あの花咲く橄欖の林のなかを、やさしく息づかいながら、そよぐそよぎと、その葉蔭を棲居とする小夜啼鳥が、やがて明ける曙を呼ぶ、あの優しいさゝ啼きは、ねえ、わたしの羊さん、ほんとに愛の息吹きを交しているのじゃないでしょうか。そしてまた、このドン・ファンの唇から洩れて、あなたの胸におのずと浸みとおって行く、わたしの言葉と、まだ燃え出していない焰を、胸の底に掻き立てる、その思いとは、ねえ、わたしの星なる人よ、戀の息吹きを交わしているので

はないでしょうか。あなたの光る瞳から二すじに流れて、みずからの熱に空氣となつて消えな
 いものなら、わたしの唇に受けたい、その眞珠と見える涙の玉と、あなたの顔に一度も燃えた
 ことのないその赤い色は、ねえ、わたしの麗わしい人、ほんとに戀の息吹きを交わしているの
 じゃないでしょうか。ええ、そうですとも、美しいイネス！ わたしの月であり、光であるイ
 ネス、わたしの言葉を、そのようにじつと聞いてくれることこそ、戀なのです。だから、どう
 ぞ瞳をおとして、足もとを見てください。屈服することを知らない、この不敵な、誇り高いわ
 たしの心が、ねえ、わたしの生命なる人よ、愛の奴隷となつて、あなたのまえに拜跪してい
 るのです。

ドニャ・イネス お黙りなさつて、ファンさま！ このような、覺えもない胸の高鳴り！ もう
 堪え切れません。あゝ、後生ですから、お黙りなさつて！ お言葉を聞いていますと、頭が狂
 います、胸が燃えます。あゝ、きつと、あなたはあたしに地獄の薬を飲ませて、女の誇りをくず
 折れさせようとなさるのですわ。きつと、ファンさま、あなたは不思議の呪符をお持ちなんで
 す。それが強い強い磁石のように、わたしの心をあなたさまの方へ吸い寄せられるのですわ。きつ
 とあなたさまは魔王から、その迷わすような瞳の色と心も奪うお言葉と、神へも許さない愛の
 力を授かりなさつたのですわ。あゝ、このあたし！ どうでしょう？ あたしの心がずたず

たに引き裂かれて、この胸から奪いとられてしまった上は、あなたの腕のなかに、倒れこむばかりです。いけません、いけません、ファンさま。あなたに手向う力は、もう盡きました。あの流れの水が海に吸いこまれていくように、あたしはあなたさまの方へ…… お姿を見て、あたしの氣はそよる、お言葉に胸は迷い、お目にあたしの目はくらみ、お息吹き of 妖しい毒氣にあたってしまいました。ファンさま、ファンさま！ あなたさまのけ高いお心にお縋りいたします。あたしの心を引っこ抜いて下さいませ。それとも、このあたしを愛しいと思つて下さいませ。あなたさまに戀い焦れているあたしでござります。

ドン・ファン あゝ、イネス、その言葉を聞いて、わたしというものがすっかり生れ變りました。これで天の樂園の扉を開くことが出来ます。この愛の心を授けてくれたのは、ねえ、イネス、悪魔ではない。神が神さま自身のために、わたしにあなたをえさせたのです、きっと。そうです、きよりわたしという人間の心のなかに萌え出した愛は、いままで知つたような俗人の愛では、決して、決してないんです。一吹き of 風に吹き消されるような、はかない灯ではないんです。ありとあらゆるものをすべて舐めつくす、大きな、大きな火事の焰なのです。だから、くよくよした心配は拂い去ってください、美しいイネス。なぜなら、あなたの足もとでは、持ち前の自尊心さえ捨て去れる氣さえするのです。そうだ。わたしは行つて、あなたのお父さん、

地頭のまえに出て、わたしの誇りも自惚れもすっかり捨てて来ましよう。では、あなたはわたしを愛するか、でなきゃ、わたしを殺してください。

ドニヤ・イネス おしたわしいファンさま！

ドン・ファン 靜かに！ 聞いた？

ドニヤ・イネス なんですか？

ドン・ファン そり、舟が一艘、この出窓のしたに着きました。中から覆面の男が飛び上りまし

たよ…… ブリヒダ、ちよつと。

(ブリヒダ登場)

そちらの部屋へ一緒に行つておくれ。イネス、わたし、ひとりになりたいから、ちよつと失禮。

ドニヤ・イネス ひまどりなさいますの？

ドン・ファン いや、すぐです。

ドニヤ・イネス あたし、お父さまにお會いしなきゃなりませんわ。

ドン・ファン あゝ、夜が明け次第ね、では。

第四景

ドン・ファンとチウツテイ

チウツテイ 旦那。

ドン・ファン どうしたんだ、チウツテイ？

チウツテイ 覆面の男が来て、旦那に是非お目にかゝりたいと申しています。

ドン・ファン 誰だ？

チウツテイ お目にかゝらなきゃ、覆面はとれないと申して、二人の命にかゝる急なお話とのことをごぜえます。

ドン・ファン で、なにか見當のつく見覚えでもないか。

チウツテイ 一向にありません。だが、ぜひ旦那に會いたいと。

ドン・ファン 人数を連れているか。

チウツテイ いえ、船頭だけでごぜえます。

ドン・ファン お通ししなさい。

第五景

ドン・ファン、のちにチウツテイと覆面したドン・ルイス

ドン・ファン 命にかゝわる話とは……！……！ だが、この別荘まで跡をつけて来る曲者ならば、よし、萬一にそなえて腰にえいものを用意しておこうか。

(と、ドン・ファンは腰に劍と二挺のピストルを吊る。これらは第三景に登場したとき、机に置いたものである。たゞちにチウッテイの案内で、ドン・ルイスが登場する。ドン・ルイスは眼もとまで覆面し、人拂いするのを待つ。ドン・ファンはチウッテイに遠慮するよう合圖する。チウッテイ退場)

第六景

ドン・ファンとドン・ルイス

ドン・ファン (傍白) 天晴れな出立ちだ。——これは、よろこそ。

ドン・ルイス お目にかゝれて仕合せでございます。

ドン・ファン ご遠慮なくお話してください。

ドン・ルイス 元來、遠慮ということ知らない男でしてね。

ドン・ファン それでは、なんですか、こんな時刻に、そういうお急ぎのご用件とは？

ドン・ルイス 命を戴きに上ったのだ、ドン・ファン！

ドン・ファン それでは、君はドン・ルイス？

ドン・ルイス お察しのとりり。だが、無駄に時間は潰すまい、ドン・ファン。二人はもはや、俱に天は戴けない仲だ。

ドン・ファン つまり、それではメヒア君、おれが賭けに勝つたから、決闘で結末をつけようというんだね？

ドン・ルイス それに違いない。二人は生命を賭けた、當然、清算をしなきゃなるまい。

ドン・ファン おれもそう思う。だがね、君の方が負けたんだと、いゝかね、納得だけはしといてくれたまえ。

ドン・ルイス うん、それだからこそ、おれの生命を君のところへ持って来たんだ。しかしだ、腰に劔を吊した騎士が、むぎ／＼死ぬべきでもないと思うんだ。飼い主に曳かれて屠所へやられる牛とは違ふからな。

ドン・ファン ヒかしました、おれは、君に牛殺したと思われるような、けちな真似をした覚えはないがね。

ドン・ルイス それは斷じてない。だからさ、ごらんのように、おれの方から、わぎ／＼来たのは、大いに君を買ってるからさ。

ドン・ファン 君は君なりに買ってくれていゝさ。ところで、おれの寛大な騎士道精神を、この

上ともよく見せてあげたいが、メヒーア君、君の面目かかをどうやって立ててあげたらいいかね、言ってくれたまえ。賭けでは正々堂々とおれが勝った。しかし、それがそんなに口惜しいのなら、なにか講じる手でも知っていれば、それをやってあげるけれどね。

ドン・ルイス　いまおれの言ったことより、ほかに仕方もあるまいよ、ドン・ファン。君はおれをがんじがらめに手ごめにして、あの家を襲って、おれの場所を盗んだのだ。おれの地位を盗んで、ドニャ・アーナを手籠めにしたんだ。ドン・ファン、勝ったとは言えない。なぜなら、君は、ひとのかわりの博奕をしたのだ。

ドン・ファン　それが博奕の一手さ。

ドン・ルイス　それがおれには我慢がならない。そこでこんどは、さあ、胸を賭けよう。

ドン・ファン　それじゃ、ドニャ・アーナ・デ・パントーハの復讐に、命を捨てると言うんだね？

ドン・ルイス　そのとおり。これほどの恥をかゝされて、この恥をそゞぐのに、ぐゞ／＼してはいられるものか。ドン・ファン、おれはあの子が可愛かった、そうだ。しかし、君の無鐵砲のお蔭で、君のためにも、おれのためにも、あの子は臺なしになった。

ドン・ファン　それなら、どうしてあの子を賭けたんだ？

ドン・ルイス あの子を君がせしめるとは考えなかつた。では……さあ、勝負をしよう、もうおれは我慢がならない。

ドン・フアン 川縁へ出よう。

ドン・ルイス いや、こゝでだ。

ドン・フアン 馬鹿もの、あつちへ行け。部屋のなかだと、勝つた方もつかまるかも知れない。君は舟を持つてゐるね。

ドン・ルイス うん。

ドン・フアン それなら、勝ち残つた方はセビーリヤへ遁げられるではないか。

ドン・ルイス それがいゝ。では、出よう。

ドン・フアン 待て。

ドン・ルイス どうした。

ドン・フアン 物音がする。

ドン・ルイス 一刻もぐずぐずならんぞ。

第七景

ドン・ファン、ドン・ルイス、チウツティ

チウツティ 旦那、助けてくださいえ。

ドン・ファン どうした、どうした？

チウツティ 地頭さんが手勢を連れて参りました。

ドン・ファン お通ししなさい。だが、お一人だけだぞ。

チウツティ でも、旦那……

ドン・ファン 言うとりりにしなさい。

(チウツティ退場)

第八景

ドン・ファンとドン・ルイス

ドン・ファン ルイス君、君がわざ／＼家に来てくれたのは、僕に對する信頼からだ。そこで、もひとつ安んじてお願いがあるんだが、おれの膽の圖太さも知っていてくれることだし、しばらく待ってくれたまえ。

131
ドン・ルイス おれは君の勇氣をいさゝかも疑ったことはない。よく解っている。しかし、君と

いう男を、もう信用しない。

ドン・ファン 見ろ、テノリーリオの賭けは両手の賭けだ。そして、両方とも勝ったのだ。

ドン・ルイス それを一度に二つやったのか……

ドン・ファン そうだ。修道院の女の方も、いま、こゝに連れて来ているのだ。そしたら、その子を戻せと言って来たらしい。おれは君に殺されるかも知れないから、死んで後腐れのないように、始末をつけておこなきゃならない。

ドン・ルイス だが、二人の決闘の邪魔をしに来たのじゃあるまいね。まさか……

ドン・ファン どうした？

ドン・ルイス 決闘から遁げるつもりじゃ……

ドン・ファン はしたないぞ！…… このドン・ファンを疑うのは、君ぐらいなものだ。しかし、ともかく、こゝにはいつといてくれ。まあ、そんなに復讐を急ぎたまるな。あっちの始末をつけたら、早速君の相手をする。おれの名にかけて、ドン・ルイス、間違いない。

ドン・ルイス だが……

ドン・ファン しつこいよ。こゝにはいつてくれ。おれにはけちくした量見はない。君を十分満足させてやるよ。あのなかから、聞き耳を立てて、様子を見てくれ。その戸の開けたては

君の自由だ。おれの振舞いが怪しいと思つたら、好きなようにしたらいい。

ドン・ルイス あんまりぐず／＼しないなら、それでいい。

ドン・ファン ゆっくり思案をめぐらせていてくれ。だが、何ごとにも餘裕がなけりや。

(ドン・ルイスはドン・ファンの指した部屋にはいる)

もう上つて來ている。(と、ドン・ファンは耳をそばだてる)

ドン・ゴンサロー (奥で) どこにおるのだ？

ドン・ファン あの人だ！

第九景

ドン・ファンとドン・ゴンサロー

ドン・ゴンサロー あの裏切りものは、どこにおる？

ドン・ファン こゝにいます、地頭さん。

ドン・ゴンサロー 跪いて……？

ドン・ファン あなたの足もとに、こうして。

ドン・ゴンサーロ 君は罪さえ下劣だ。

ドン・ファン ご老體、しばらく口を閉じて、お聞きください。

ドン・ゴンサーロ この紙に、君が君の手をもって書いたことは、なんと辯疏しようと思せるものでない。純真無垢な娘の心は、この文言にふくまれた毒を防ぐすべさえ知らぬのだ。それを、この破廉恥漢、弄ぼうとした。禮節も信仰心も涸れ果てた君の性根に横溢しとるのは、毒汁ばかり。それを、汚れも知らぬ乙女の胸に、ままと騙して注ぎ込んだのだ！ わが家の誇り高い名譽に、商人でも捨てて顧みない襤褸切れ同然、泥を塗ろうとするか！ テノリーオ、君の自負する膽力というのは、そんなものなのか？ 俗人の怖れる君の豪膽というのは、そんなものなのか？ 老人や小娘にそれを威張って見せるが、せい／＼なんだらう？…… じゃ、なんのためだ？ 呆れたやつだ！ いや／＼となるとそんな風に、勇氣も面目も忘れはてて、わしの足に口づけをしに来るのか。

ドン・ファン 地頭さん！

ドン・ゴンサーロ 汚らわしいやつだ！ よくも娘のイネスを修道院から盗みだしたな。わしは君の命か、わしの娘か、どっちかをもらいに來たのだ。

ドン・ファン わたしはまだ、この高い頭を人のまえに下げたこともありません。親にだって、

國王にだって、哀願すると言うことはなかったのです。それなのにいま、ごらんのように、あなたの足もとに跪いているのです。ドン・ゴンサロー、これには、理由があるのでございます。

ドン・ゴンサロー わしの裁きが怖いからだろう。

ドン・ファン これは驚きました、ドン・ゴンサロー、聞いてください。でなければ、堪忍袋の緒が断れます。いまのわたしになりたくなければ、またもとのわたしになってしまいます。

ドン・ゴンサロー 呆れたやつだ！

ドン・ファン ドン・ゴンサロー、わたしはイネスをこよなく愛しております。神はわたしを善の道に導きたまうために、あのひとを興えてくれたのだと思います。わたしはあの人の眉目まぶたの美しさを愛するのでも、姿の愛らしさをいとしがめるのでもありません、ドン・ゴンサロー。警察やお坊さんが監獄をもつてもお説教をもつても、わたしをどうともすることのできないものを、それをしたのが、イネスの清らかさでした。あのひとの愛がわたしの人となりをつかり變えて、別人にしてくれました。悪魔だったものを、天使にするのは、あの人です。ですから、ドン・ゴンサロー、聞いてください。この向う見ずなドン・ファン・テノリーオがあなたの足もとに跪いて、お願いします。わたしはご令嬢の奴隷となつて、あなたの軒下に起居いたします。あれはあゝしろ、これはこうしろと自由に使ってください。お指示の間は禁足もい

たします。わたしの誇りと勇氣の證據を見せよとおっしゃれば、何でもご命令どりに従順に、お見せいたします。そして、ご令嬢を賜わる値打ちがあるとお考えになったときは、わたしはあの一のためには善良な良人となりましょう。あの方はわたしに天國を開いてくれることでしょう。

ドン・ゴンサロ もういい、ドン・ファン、君の厚顔無恥な屁理窟を、よくもまあ今まで辛抱して聞いていたものだ。ドン・ファン、君はいよ／＼のときになると、卑怯な真似をする。自分の得になるとすれば、どんな卑劣なことも辭さない男だ。

ドン・ファン ドン・ゴンサロ！

ドン・ゴンサロ 理不盡な賭けにしたしろものを、わしの足もとにひれ伏して、拜みたおそうという、そういう君を見るさえ恥かしい。

ドン・ファン いや、ドン・ゴンサロ、こうして、一切を一度に解決していただきたいのです。ドン・ゴンサロ 駄目だ！ 駄目だ！ 君を娘の聲にする？ それよりは、娘を殺してやる。

さあ、すぐさまあの子を渡せ。でなきゃ、やむを得ない、その卑しげに跪いているところを、一刺し胸を刺すだけだ。

ドン・ファン よく考えてください、ドン・ゴンサロ、それでは、イネスをも、わたしの更生

の希望をも、一緒に失わせるというものです。

ドン・ゴンサロ　ドン・ファン、わしが君の更生なんぞ、なんで考える必要があろう！

ドン・ファン　ドン・ゴンサロ、わたしを破滅に突きおとすのですか！

ドン・ゴンサロ　わしの娘は！

ドン・ファン　よく／＼お考えを願います。わたしは能うかぎりの言葉をつくして、お心に添いたいとしたのです。腰に劔を吊りながらも、あなたの足もとに跪いて、ご雑言をも聞き流し、おだやかなお取りはからいをお願いしました。

第十景

前景の人々と、聲を放って冷笑しつゝドン・ルイス

ドン・ルイス　大いによろしい、ドン・ファン。

ドン・ファン　おや！

ドン・ゴンサロ　こちらは、どなただ？

ドン・ルイス　こいつの慌てぶりを見ていた見物人です。地頭さん、あなたには味方なのです。

ドン・ファン　ドン・ルイス！

ドン・ルイス　ドン・ファン、君の自慢の勇氣とやらの、その使い方を、とっくり見物した。よく解ったぞ。裏でこそ、悪戯わるまをしては、いよ／＼となりゃべこ／＼お辭儀し、まったく卑劣、盗んで逃げる泥坊同然！

ドン・ファン　うん、それから？

ドン・ルイス　だから、分ったか、神の怒りによつて、ドニャ・イネスの父君と、ドニャ・アーナの復讐者との二人が一所に落合つたのだ。見る、こゝには復讐の血が燃えている、あの外には司直の手が待っている。この二つが同時に君にかゝつて來たからには、いよ／＼君の運命も盡きた。

ドン・ゴンサロ　おゝ、やつと解りました……では、あなたが……

ドン・ルイス　えゝ、ルイス・メヒアです。神のお導きによつて、あなたの復讐の機に來合わせました。

ドン・ファン　しち面倒な、そんなお題目は、もうたくさんだ！ 品位と面目をもつては、おれの寛大なる犠牲の價値が理解してもらえないとすれば、また、能うかぎりのものを、誠心誠意訴えても、それを怯懦と言ひ、またおれの崇高なる心事さえ嘲笑の的となつては、君の待つてくれた短い時間を有難く頂戴する。そうして、君の疑うこのテノリーオの腕を實見させ

てやるばかりだ。

ドン・ルイス　それがよかるう。この足もとに斃れるがいゝ。少くとも、威勢のいゝ男だと言われた、その名に似合っておるさ。

ドン・ファン　もうやけくそだ！　ウリョア、貴様がおれを、ふたゝび悪の淵に突き落したのだぞ。おれが神の審判に呼び出されたときは、貴様がおれの責任をとれ。

(と、ドン・ゴンサローにピストルを一發放す)

ドン・ゴンサロー　(倒れながら)　人殺し！

ドン・ファン　それから、貴様だ、恥知らず！　けがらわしくも、おれを盜賊呼ばわりしたな。明々白々に理由を言え、眞正面から、ばらしてくれる！

(二人は相争い、ドン・ファンは相手を劔で一突きする)

ドン・ルイス　(倒れながら)　やられた！

ドン・ファン　目の覚めようがおそかったよ、メヒーア。でも、おれの罪じゃないぞ。——だが、警察が來ている。二人の下手人は、おれだと分るに違いない。

ナウツテイ　(奥から)　旦那！

ドン・ファン　(用窓を覗いて)　誰だ？

チウツテイ (奥から) こつちから、お遁げなせえ。

ドン・ファン 遁げ路はあるか。

チウツテイ 大丈夫でさ。飛び下りなせえ。

ドン・ファン よし、行くぞ。——おれは天を呼んだ。しかし、天は答えなかつた。天の扉はお

れには閉されている。おれの足は地上を行くのだ。その責任は天が負え。おれは知らない。

(出窓から飛び降りる。川に落ちた水音がする。樫の音は走り去る舟の速さを表わし、それと同時に、部屋の戸口を叩く音。やがて、警吏や兵士、その他が登場)

第十一景

警吏や兵たち、のちドニャ・イネスとブリヒダ

警吏甲 このなかでピストルの音がした。

警吏乙 まだ煙硝の煙が残っている。

警吏甲 おい！ 人が死んでいる。

警吏乙 二人だ。

警吏甲 下手人は？

警吏乙 あそこから！

警吏甲 ご婦人が二人！

ドニヤ・イネス あら、こわい！ お父さまよ！

警吏甲 この人の娘さんだな！

ブリヒダ はい。

ドニヤ・イネス あゝ、フアンさま！ どこにいらっしゃいます？ こんな悲しいところへ、あたしを置き去りにして！

警吏甲 そいつが下手人だ。

ドニヤ・イネス あゝ、神さま！ まだこんな苦しみが、あたしには？

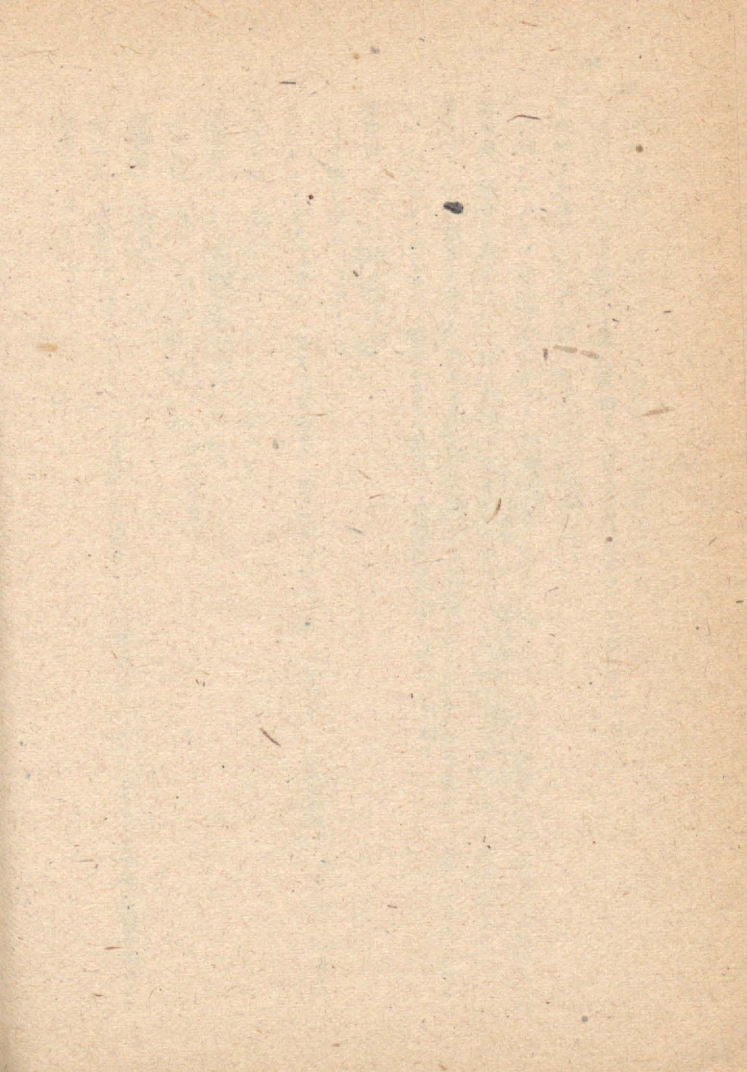
警吏乙 やはこゝから、きつと川へ飛び込んだんだな。

警吏甲 見る、見る……カラブリヤ(イタリヤの地
名―譯者註)の船に乗って遁げてる。

一同 ドニヤ・イネスのために、お裁きを。

ドニヤ・イネス でも、フアンさまにはお赦しを！

(この第十一景は上演の際省略し、前景の最後の句をもって打切つてもよい)



第
二
部

第一幕 ドニヤ・イネスの亡霊

登場人物

ドン・フアン

セントーリヤス大尉

ドン・ラファエール・デ・アベリヤネーダ

彫師

ドニヤ・イネスの亡霊

テノリーオ家の墓所。——舞臺は公園風な結構の、莊麗な墓地を表わす。前景に、ドン・ゴンサーロ・デ・ウリョア、ドニヤ・イネス、ドン・ルイス・メヒアの墓が別々に並び、墓石のうえにそれ／＼の石像がおいてある。ドン・ゴンサーロの墓は右手にあって、坐像であり、ドン・ルイスのは左手で、やはり坐像、ドニヤ・イネスの墓は中央で、像は立像である。中景に、任意の形の墓が二基、後景、小高い位置に、墓地の建設者であるドン・ディエゴ・テノ

リオの墓と石像、これが墓地の遠景を限るのである。籠や碑文を一面に彫り込んだ塀が遠景まで延びて背景となる。枝垂れ柳がドニャ・イネスの墓の両側に一本ずつ、とき／＼の舞臺の動きに役立つように配置されてある。絲杉や各種の花が舞臺を飾って、妻味を興えてはならない。皎々とした月に照らされた、靜謐な夏の一夜の趣き。

第一景

彫師、歸り支度をしている

彫師 やれ／＼濟んだ。これで、ドン・デイエゴの靈も大へんご安心なされて、安らかにお休みなさることが出來ようと言うものだ。これで仕事は、すっかりご遺言どおり立派に完成した。これからは、金満家はみんな死ぬときには、これを手本に、あとの人にこういふ遺言を残してもらいたいものだ。だが、もうおいとまする時だ。なにもかも濟ませて、あすの夜の引き明けには、セビーリヤともお別れだ。あゝ、丹誠こめて、この手で彫りあげた大理石！ あすからはセビーリヤ中の人々に、うっとりと思惚れてもらえることだらう！ この莊麗な靈廟を見た

ら、後世の人々はいまの世の人々に感嘆することであろう。しかし、しかし、年月が経つと、石像どもはいつまでも立ってはいいても、わたしの名前はだん／＼と忘られていくだろう。あゝ、わが丹誠の結實よ、わたしが風雨にもめげず、精根を傾けつくした石像たちよ、お前たちに形と生命とを與えたものはいま、おまえたちに別れを告げようとしているのだ。どうかわたしの藝術家としての名譽をいつまでも保っていてくれ。お前たちのほうが、わたしより永生きするのだもの。——だが……—人が來たようだ。

第二景

彫師と、覆面したドン・ファン

彫師 もし／＼……

ドン・ファン 今晚は。

彫師 ごめんなさい。時刻も晚いですから……

ドン・ファン お待ちください。お訊ねしたいことが……

彫師 遠方からお出での方でも？

ドン・ファン 何年もまえに、イスパニヤを出たものですがね、通りが／＼りにこの柵のところま

で來ますと、こゝいらが、わたしのいたところより、すっかり變つていたので、驚いてるところです。

彫師 さようでしょうとも！ こゝは昔は立派なお屋敷でしたが、いまはそのお屋敷のあつた場所がお靈場になつてしまつたのでございますもの。

ドン・ファン 屋敷が墓所になつたか！

彫師 これは舊主の御遺志でございましてね、世間の人を、あつと言わせました。

ドン・ファン まつたく、あつと言いますね。

彫師 それには、深い因縁がありますして、わたしもお蔭で、晴れをいたしましたよ。

ドン・ファン その話が聞かせていたゞきたいですね。

彫師 お話ししましょう。かいつまんで……人が待っていますのでしてね。

ドン・ファン えゝ、えゝ、よろしいとも。

彫師 ほんとの話ですよ。

ドン・ファン 話してください、じれつたくなりますよ。

彫師 わかしこの町の、このお屋敷に先祖代々から高貴な家柄の、大へん立派な方が住んでおられました。

ドン・ファン ドン・ディエゴ・テノリーオ。

彫師 さよう／＼。このドン・ディエゴに、箸にも棒にもかゝらないお子さんがありました。地獄から生れた鬼子とでも申しますか、極悪無道の若い衆で、天をも地をも畏れることを知らず、この世に怖いものなしという噂です。喧嘩太郎で、女たらしで、しかも運のいゝ冒険家です。ね、名譽も財産も、安穩な生活などということとは、眼中にない人間でした。まあ、噂では、そんなような人間でしたものですから、亡くなった父御は家の名譽を毀けまいと、たしかに分別深いことをなされました。

ドン・ファン と言うのは、どんなこと？

彫師 後世の人を驚かすようなご靈廟を建立するやうにと、その全財産を投げ出されました。しかし、條件がございまして、息子さんの手にかゝって非業の最期をなされた人々を祀るやうにと言うのでございます。ですから、ごらんなさい。周圍に、そりう人たちのお墓がたくざんあります。

ドン・ファン では、あなたは墓守さんですか。

彫師 いや、こゝの彫刻を頼まれた彫師です。

ドン・ファン あゝ、で、もうすっかり終つたのですか。

彫師 一月もまえに済んだのですが、こゝに柵の出来るのを待っていたのですよ。俗人どもに荒らされては堪まりませんからね。

ドン・ファン (眺め渡しながら) 故人は金を立派に使ったものですね。

彫師 そうですよ！ あれをご覧なさい。

ドン・ファン どうしたんですか。

彫師 ご存じですか。

ドン・ファン ええ。

彫師 どれもこれも、よく似ています。わたしには會心の作品です。

ドン・ファン まったくご立派です。

彫師 ご存じ寄りの方々ですか。

ドン・ファン ええ、みんな。

彫師 これでよろしゅうございますか。

ドン・ファン 大へん結構です。とう星影に照らして見ますと。

彫師 いや、こんなに月が明るいと、晝も同然でございませぬ。これはカラーラ産の大理石です。(と、ドン・ルイスの像を指さす)

ドン・ファン ヌヒーアの像ですか、素晴らしい！ おや、これが地頭の像か。いや實によく出て来ている。

彫師 わたしは下手人の像も造って、犠牲になった人々と並べて置きたかったのですが、あいく手許にその肖像がなかったものですから。ドン・ファン・テノリーオというのは、まるで悪魔の生れ變りだと言いますよ。

ドン・ファン 實にひどい奴ですよ！ しかし、ドン・ゴンサーロの像が口を利けたら、いくらかの信用は置ける男と言いますよ。

彫師 では、ドン・ファンをもご存じで？

ドン・ファン よく知っています。

彫師 お父さんのドン・デイエゴに、たちまち勘當されたのですね。

ドン・ファン ところが、ドン・ファンは生れ落ちるとから、幸運に追っかけられている見たいな男で、なんら痛痒を感じないのです。

彫師 死んだという噂ですね。

ドン・ファン それは嘘です。生きています。

彫師 それは、どこで？

ドン・ファン このセビーリヤにいます。

彫師 みんな怒っているのに、それも怖れないですか。

ドン・ファン 豪膽なやつで、ドン・ファンの胸に怖さなど根をおろす餘地もありませんよ。

彫師 しかし、自分のものになるはずの、このお屋敷が、こんなに變ってしまったのを見たら、セビーリヤなんかいられるものでないでしょうに。

ドン・ファン なに、それどころか、やつは誰をも憎んでいるのじゃありませんから、自分の家に舊知の人々が集っているのを見て、嬉しいと思ってくらいでしょうよ。

彫師 こゝへだつて参りましょうか。

ドン・ファン 來ないのですか！ 生れたところへ死にに歸るのは當然だと思いません。それに、この人たちを立派に葬るために、自分の遺産をとられたのですから、彼としても死んだら鄭重に葬られるのが當りませです。

彫師 しかし、その人だけは、この靈場に入れるのは止められています。

ドン・ファン ドン・ファンは腰に立派な劔をさげています。あいつに邪魔立てできる人はありませんよ。

彫師 まあ、そんな罰當りを！

ドン・ファン ドン・ファンは、しようと思えば、靈場のうえに、また邸宅を作りかねない男です上。

彫師 死んだ人をも冒瀆するほど、そんな無鐵砲な男なのですか。

ドン・ファン 自分の足もとに横たわっているものに、なんの遠慮が要りましょう。

彫師 だが、良心も魂もない男なんですね？

ドン・ファン 持ちあわせませんね、たぶん。一度は天に向って悔悟の聲を擧げたこともあるのですが、却つて天は彼をのっぴきならぬ破目に陥れたものですから、血路を開くため、罪もない人を二人殺してしまいました。

彫師 驚いた、呆れた男だ！

ドン・ファン 神に憎まれた男なんです上。

彫師 さようでしょうね。(傍白) こんなに熱心にドン・ファンの肩をもつ、この人はいったい、誰だろ？——あなた、失禮でございますが、人が待っていますものですから。

ドン・ファン それなら、どうぞ、お歸りください。

彫師 門を締めなきやなりません。

ドン・ファン 締めないでよろしい。お歸りなさい。

彫師　ですが、あなた……

ドン・ファン　夜は静かだし、場所は快適、納涼には絶好のようです。わたしがセビーリヤ中の人の禍いになるといふなら、こゝで氣まゝにしたい。

彫師　(傍白)　どうやら氣が狂っているらしいぞ！

ドン・ファン　(彫像に向つて)　みなさん、たゞいま歸つて來ました。

彫師　(傍白)　言つたとおりだ。氣ちがいだ。

ドン・ファン　しかし、おや、これはなんだ？　目の迷いかな。どうやら彫師さんは、ドニャ・イネスの像まで、作つてあるらしいが！

彫師　もちろん、そうです。

ドン・ファン　亡くなったのですか。

彫師　ドン・ファンに捨てられると、また修道院に戻つて、嘆き死にしたそうです。

ドン・ファン　で、こゝに葬つたのですね？

彫師　そうです。

ドン・ファン　あなたはその死に顔をごらんになつたのですか。

彫師　見ました。

ドン・ファン どんな風でした？

彫師 ほんとに、眠っているときか思えませんでした。あの楚々とした美しさに、死も大へん慈悲深く、まるで生きてるように清々しく、蔷薇色の頬のまゝでした。

ドン・ファン あゝ、そうでしたか！ 天も羨むような、世にも美しい顔は、死もその穢らわしい手でこわすことが出来なかつたのでしょね。この彫刻は實に美しい、實によく似ています。おゝ、ドニャ・イネス、ふたゝびあなたに生命を與えることは、誰にも出来ないのか。——これも、あなたのお作品なのですね？

彫師 えゝ、ほかのと同じに。

ドン・ファン こんな見事なお仕事に對しては、どんなにお禮をしようとし切れるものではありませんが、これをどうぞ。

彫師 なにを下さるのです？

ドン・ファン ごらんのとおりです。

彫師 しかし…… あなた…… どういうわけで？……

ドン・ファン わたしの記念です。

彫師 十二分に頂戴しているのですよ。

ドン・ファン 多いぶんには差しつかえありませんまい。

彫師 しかし、もう歸りましょ、あなた。まだ鍵を預っているものですから。明朝はわたしもこの土地を去らねばなりません。

ドン・ファン 鍵はわたしにお渡しなさい。そして、さっそくお歸りなさい。

彫師 あなたに？

ドン・ファン そりです、わたしに。なにをぐずぐずしているのです？

彫師 失禮ですが、わたしはまだ……

ドン・ファン さあ、さっさと。彫師さん。

彫師 お名前だけでもうかゞっておきませんか。

ドン・ファン なるほど。祖先の眠るこの墓所は、このドン・ファン・テノリーオに番をさせて置きなさい。

彫師 あなたは、ドン・ファン・テノリーオ！

ドン・ファン そうだ！ 聞かなきゃ、いまから、君も、君の作った石佛の仲間入りさせてあげただけだ。

彫師 (鍵を渡しながら) では、どうぞ。(傍白) この人の手にかゝって、こんなところで犬死した

くはないからね。さて、セビーリヤの町の人々よ、こんどはうまくやりなさいよ。(退場)

第三景

ドン・フアンのみ

親爺はおれの繼ぐべき財産を全部これに注ぎこんだ。見上げたものだ。おれだったら、たちまち博奕ではたいてしまったかも知れない。(聞) おれの手にかゝった諸君も、おれを恨むことは出来まい。諸君のたつとい生命は奪ったけれど、そのかわり立派な墓を作ってやったんだもの。こゝろい霊場を作るとは、いや全く素晴らしい思いつきだ！ それに…… この静謐はおれの心にはのくくと楽しい。美しい夜だなあ…… あゝ、おれは！ こゝろい清らかな夜を、いたずらに穢らわしい仕事のために、我を忘れて、幾夜を失ったことか！ このように澄みきつた月の照る夜、罪もない人のいのちを、または名譽を、どれだけ奪ったか！ そりだ！ 幾年かを経たいま、それらの記憶がこゝろのところにと、額に指をやりながら怪しく、生き返つて來る氣がする。あゝ、これはきつと、悪虐非道なおれゆえに亡き數にはいった、この人が、慈悲溢れるばかりのこの人が、いま住む天からさせる業だ。

(下ニヤ・イネスの石像に向つて、敬虔な面持ちで言葉をかける。)

魂魄は杳かに去って冷い大理石にその姿のみ残したドニャ・イネスの像よ、ひとりの淋しき男の魂を、君の足もとでいま暫くの間を泣かせてください。千百の亂行のうちにも、あなた清らかな面影だけは忘れることがなかったのです。ドン・フアンの非業のゆえに命を絶ったあなた、あなたの墓前にいま歸り來つて、千萬の思いに歎くわが姿を哀れと見てください。

あなたの側を離れてからは、あなたのほかは考えることもなく、この地を去つて以來、ふたたび歸ることよりほか、思うこともなかったのです。このドン・フアンは、ドニャ・イネスの幸をのみ祈っていました。そして今日、あなたの美しい面影を慕つて歸つて見れば、哀れにもドン・フアンは、はからずもあなたの墓碑と相まみえて、その悲愁は、どんなものでしょう、考えても見てください。

清純無垢なドニャ・イネス、あなたの美しかった青春は、いまあなたの墓前に涕淚する男が柩のなかに葬り去つたのです。この冷い石の向うから、あなたの美しさをさばかり讚えた哀れなる魂の、この悩みを見ることが出来るならば、あなたの墓所のすぐ傍らを、このドン・フアンのために用意してください。

神はわたしの幸福のために、あなたを育んだのです。あなたゆえに、わたしは善を思いました。その至高なるものに拜跪し、天國の聖なる樂園にあこがれたのです。そうです。いまもな

お、わたしの希望は固くあなたに繋がれて、ひとつの聲の眩きが、ドン・ファン我身边に聞えています。私の憂悶はあなたの墓側に侍んべりえて、はじめて和ぐのだと言っています。

お、わがいのちなるドニャ・イネス！ わたしが夢うつゝに聞くこの聲が、久遠に去り行く、あなたの最後の囁きであるならば、あなたの魂から出たこの聲が彼の蒼穹にとゞくものならば、そして星辰の行くあの大空の奥に、ひとつの神がいるものならば、神に告げてください。ドン・ファンがあなたの墓前に嗚咽するのを見てやってくださいと。

(墓に凭りかゝって、顔を蔽う。この姿勢でいる間に、墓のなかから、霧が立ち昇って、ドニャ・イネスの影像がかくれる。霧が消えると、影像が見えなくなっている。ドン・ファンはとわれに戻る)

この大理石の墓標に、おれは五感が痺れた。なにか魔訶不思議なものに、とりかこまれた気がする。しかし……これは、何としたことだ。臺石ばかりで、石像がない！ これは、どうしたのだ？ さっき見えたは、氣の迷いだっただか、まぼろしだっただか！

第四景

ドン・ファンとドニャ・イネスの亡霊。ドニャ・イネスの左側の草花と枝垂れ柳が繪巻に變り、そのなかに、光彩に照らし出されて、ドニャ・イネスの亡霊が現われる

亡 靈 いゝえ、そうではありません、ファンさま。あたくしの靈はお墓のなかで、あなたをお待ちしていました。

ドン・ファン (歸らて) ドニャ・イネス! 懐しい人の姿よ、わたしの魂の人、わたしを生かしておいて下さるつもりならば、わたしの理性を奪わないでください。いま見るあなたが、わたしの狂氣から生れた幻でしかないならば、わたしの狂おしい思いを嘲弄することを止め、この苦しみを深くさせないでください。

亡 靈 あたくしはドニャ・イネスです、ファンさま。お墓の中で、お言葉を聞いていました。ドン・ファン それでは、あなたは生きていますか。

亡 靈 あなたのために。でも、あたくしのために作ってくださったこの大理石の彫像のなかに、あたくしの煉獄がございます。あたくしはあなたの不淨な魂を贖うために、魂を神に捧げました。すると神さまは、あなたを慕うあたくしの心持ちをお察し下さいまして、こう申されるのでした。『墓のなかでドン・ファンを待つがいゝ。それほど悪魔の愛に誠を捧げたいなら、ドン・ファンと共に濟度されるか、共に破滅するか、どちらかである。あの男を見守ってやりなさい。しかし、彼がもし無情にもおまえの優しい愛を顧ることなく、依然穢らわしい亂行狼藉を續けるのであったら、おまえの魂もまた、ドン・ファンとともに、おまえの墓から去らねば』

ならぬ!』

ドン・ファン (恍惚として) おれはいま、天國の樂園を彷彿として夢見ているのであろうか。

亡 靈 いえ／＼、決して。そして、お考えを正しくして下さるなら、あたくしはいつまでもお傍にいられるのでございます。でも、お身持ちをお改めなさらないのでしたら、あたくしどもは永遠の悲運を招くことになります。どうぞよく／＼お考えくださいませ。この夜こそ、ファンさま、あたくしどもの墓所を定めるために與えられた最後の一夜なのでございます。

では、お別れいたします。あなたのお命が、激しい苦悶にはいろろとなさるいま、いまままで眠っていた良心の聲が高く叫ぶのに、お耳を傾けてくださいませ。なぜって、一番大切なのは、そのときの選擇を間違えないように慎重に考えることでございます。幸福への扉でしょうか、それとも不幸の扉でしょうか、墓石の蓋はやがて、二人のために開かれるのでございます。わたくしどもの力では、どうともしようがないのです。

(繪幕は降りる。ドニャ・イネスは消える。すべてはもとのおりになる。たゞドニャ・イネスだけは礎石からなくなっている。ドン・ファンは呆然としたまゝ)

第五景

あゝ、いま耳に聞えたのは、何だろ！ 亡者までが、あゝしておれのために墓から出て来た！ だが、幻だった。氣の迷いだったのだ。この頭のなかで、おれの作りあげたものだったのだ。空想が、いま見たような姿に見せたのだ。この頭が妄想した、ありもしないものを、ほんとのように思ってしまったんだ。だが、氣違ひじみた妄念に、おれの理性が、あんな風に、たぶらかされたことは、これまで一度もなかったぞ。だが、やっぱり、その梢をすかして見ると、あのように朦朧と見えたドニャ・イネスの姿には、なんだかこの世ならざる神々しいものがあった。しかし…… ばかな！ こゝの雰圍氣が、お化や幽靈の出るに似つかわしいんだ。夢に見る不思議の影ぐらい、清らかで靈妙なものはないものな。これくらい、心愉しく、とりとめもなく、そして優にやさしいものもないもの。激しく興奮したときなど、何かをひどく憧れ求めているときなど、その空しい幻影を、實際のもののように空想で見るとは、度々あることじゃないか。そうだ、そうだ、幻だったのだ！ しかし、こゝには慥かに彫像があったんだ。そう、目でも見たし、手でも觸れた。なんだったか、彫師に褒美さえやった。ところが、いま見えるのは、墓の臺石だけだ。これはどうしたことだ！ 頭が狂ったかな。それとも、急

に、何か怖ろしい目まいに襲われたのか。あの幻の姿は、なんと言ったっけ？ あゝ、明瞭に聲が聞えた。痛々しい悲しげな聲が胸に浸みこんだ。あゝ！ 二人の永遠の運命を決定する時間も、寸刻の間だとか！

いや／＼、熱した頭の、たわいもない幻だったのだ！ おれの情熱がイネスに乗り移り、墓の扉が開いたんだ。この狂おしい戀情の、破れた願いの忌わしい幻よ、影よ、消えてくれ。消えてくれ！ 戀い初めたその始めから、はや死んでいた戀の空しい幻よ、消えて行け。狂亂の風に乗せて、そんな空しい影を現わして、たかが女一匹を想い出させてくれるな。あゝ！ この夢にドン・ファンが臺なした。頭が亂れる…… どりやら、この大理石像が揺れるようだぞ。

(石像がみな靜かに揺らいで、顔をドン・ファンの方へ向ける)

おゝ、おゝ。像が動く。ほのかな影が、凄く見える！…… しかし、このドン・ファンが怯むか！ たわいもない亡靈ども、起きて来い。この腕をもつて、もう一度お前どもを、石の寢床に寝かせ直してやるわ！ おまえどもの怪しい姿に、決して、決して怖れるおれではない。死んだ者であろうと、生きた者であろうと、おまえどもに屈するおれでない。世間も知っているように、おまえどもを殺したおれだ。おまえたちが死の館で、おれに烈しい復讐に備えているのであれば、さあ、早くかゝって来い。ドン・ファンは、ふたゝびこゝで待っている。

第六景

ドン・ファン、センターリヤス大尉、アペリヤネーダ

センターリヤス (奥から) ドン・ファン・テノーリオか。

ドン・ファン (われに戻る) なんだろう? 誰だろう、名を呼んだのは?

アペリヤネーダ (登場しつゝ、センターリヤスへ) 誰かいるようだぞ。

センターリヤス (登場) うん。あそこに人がいる。

ドン・ファン 誰だ?

アペリヤネーダ あいつだ。

センターリヤス (ドン・ファンに近寄り) 嬉しくて、僕は何と聞いていゝか分らないほどだよ、ド

ン・ファン!

アペリヤネーダ テノーリオ君か!

ドン・ファン 退け、退け、幽霊!

センターリヤス 氣を落ちつけてくれ、ドン・ファン……いま君のまえにいるのは、幽霊じゃ

ない、生きた人間だ。君の友情を胸に疊みこんでる人間だ。星の光で、君と分つたものだから、
 歓迎の抱擁に來たところだ。

ドン・ファン ありがとう、センチーリヤス！

センチーリヤス だが…… どうしたんだ？ 手がわなく、顫えているじゃないか。顔色もまっ
 青だよ。

ドン・ファン 月の光で見るといだろう。(と、落着きを取りもどす)
 アベリヤネーダ しかし、ドン・ファン、こゝで、なにをしているのだ？ こゝを知っていたの
 か。

ドン・ファン 墓地だろう？

センチーリヤス 誰の墓地か分ってるのか。

ドン・ファン うちのさ。見てみる、みんなおれの幼な友達や、おれの亂行放蕩の昔馴染ばかり
 じゃないか。

センチーリヤス しかし、ものを言つてたようだが、誰と話をしていたのだ？

ドン・ファン こいつらとだ。

センチーリヤス まだ君は、この連中をからかひに來たのか。

ドン・ファン そうじゃない。墓詣りに来たのだ。だが、途方もない目まいに襲われて、ちよつと頭が混乱したんだ。まったく氣持ちはよくなかった。その大理石の幽霊どもに、あんまりおどかされたものだから、君たちの来たことも、すぐと氣がつかなかった……

セントーリヤス は、は、は！ さすがの君も、世間なみに亡者に驚かされたのか。

ドン・ファン いや、そうじゃない。彼らが東になって來ても、相手になる元氣も腕もある。墓穴からまた出て來たら、ドン・ファンのこの腕で、もう一度殺し直してやる。いゝかね、セントーリヤス、いまから、おれはやっぱりもとのドン・ファンになる。おれを怯ますものはないんだ。たゞ、ちよつとの間、暑氣にほつとなつただけだよ。でも、もう直つた、セントーリヤス。なんだつて、東の間ものだよ。

アベリヤネーダとセントーリヤス なるほど。

ドン・ファン さあ、歸ろう。

セントーリヤス あゝ。三度セビーリヤに舞い戻つて來たが、その話でも聞かしてもらおう。

ドン・ファン そうしよう。話は面白いよ。たしかに聞き甲斐があるよ。飯でも食べてから、ゆつくり話した方がいゝと思うが、どうだろう？……

アベリヤネーダとセントーリヤス それも好かるう。

ドン・ファン それじゃ、うちへ行って、一しよに飯を食べよう。

センチリヤス しかし、僕たちのために、ほかのお客さんを外すことになるのじゃないかね？
なにか、一ぱい喰わそうというのじゃあるまいね。

ドン・ファン ばかな！ いま着いたばかりだ。こん夜は、君らのほか誰も来やしない。

センチリヤス 誰か待つ女に立ちん坊を喰らわせることになるのじゃなからうな。

ドン・ファン 三人だけで飯を食べよう。もっとも、こゝいらの誰かが、と、石像を示して、こゝ
にいつもじっとしているのが、退屈だと言うなら……

センチリヤス ドン・ファン、神さまのもとで休んでいる者は、静かに休ませてあげとくん
だ
よ。

ドン・ファン おや！ こんどは、君の方が怖がっているらしいな。亡者が怖いのかね。しかし、
おれがさつき君たちから冷かされたんだが、それは、君の考え違いさ。納得させてやるよ。と
いうのは、おれのほうは、もうたくさんなんだ。出来れば、いゝかい？ こゝの亡者をお客に
して、君たちのために、一緒に晩餐に招いてやろう。

アベリヤネーダ 幽霊話はやめよう。

ドン・ファン おれはこゝいらの罫腰を酒の肴にしようという男だ。それを、おれの膽力を疑う

というのか。おれは怖いもの知らずなんだぜ。

(一番手近にあるので、ドン・ゴンサロの彫像に向って)

あなたが一番ひどい恥かしめを受けた人だ。だが、よかつたら、地頭さん、晩餐をしに來てください。出來ないと思うが、來てくれないのは、残念です。しかし、わたしの方では、食卓に、あなたのために食膳の用意だけはしておきますよ。ほんと言え、この世の彼方に、もうひとつの世界があるなどと思つたことは一度もないが、そんな世界があるならば、あなたからそれを教わることが出來たなら、眞實わたしは有難く思いますよ。

センチリヤス　ドン・ファン、そんなのは膽力でも勇氣でもない。氣ちがい、たわごとと言うものだ。

ドン・ファン　君たちが面白く樂しめるようにな。おれはおれの言つたとおりにする。ではい、ですか、地頭さん、言うことは言いましたよ。

第二幕 ドン・ゴンサーロの石像

登場人物

ドン・ファン

センテーリヤス

アベリヤネーダ

チウツテイ

ドニャ・イネスの亡霊

ドン・ゴンサーロの石像

場所はドン・ファン・テノーリオの家。——正面の左右に、舞臺の所作に合うように、一つずつの入口があり、左側の背景の盡きる書割にも出入口がもう一つある。右側の書割には窓がある。

幕があくと、ドン・ファン、センテーリヤス、アベリヤネーダが卓についている。食卓には

豪華な酒肴が盛られ、卓布は花房飾りなどで縁どっている。観客の正面に、ドン・ファン、その左手に、アベリャネーダ、食卓の左側に、センチーリヤス。センチーリヤスの正面に、空いた椅子と一揃いの食膳が置いてある。

第一景

ドン・ファン、センチーリヤス大尉、アベリャネーダ、チウッテイ、給仕

ドン・ファン おれの話は、まあ以上のとおりだよ、君たち。皇帝さますら、おれの勇氣に感銘して、恩賞を下さろうというのだ。そしてね、話をすっかり残らず聞かれたのだから、『それほど豪勇な男は、自分が召しかゝえようが、イスパニヤに歸りたければいつでも歸國するが、いゝ』と仰せられるのだ。そんなわけで、いまセビーリヤまで歸ったところだ。

センチーリヤス 榮耀豪華のきわみだね。

ドン・ファン 偉く生れついたものには、偉さがいつでもつきまわっているものだ。

センチーリヤス 君の歸國を祝して……

ドン・ファン 乾盃しよう。

センターリヤス ところが腑に落ちかねるのは、昨晚歸つたばかりというのに、もう家を構えているのは、どうしたわけだ？

ドン・ファン それは君、こういう風に飾りつけの出来た家を、借金の支拂いに、安く賣りに出していたものだから、それにおれはこゝに歸つたつて家屋敷もないので、これ幸いと、このまま買いとつたのだ。

センターリヤス 家財道具一式ついてか。

ドン・ファン うん。女に身を持ちくずした馬鹿ものが賣り物に出したんだ。

センターリヤス 家屋敷を賣つちまつたのか。

ドン・ファン 魂は悪魔に賣つたさ。

センターリヤス 死んだのか。

ドン・ファン 頓死だ。當局はどうにでもして手早く處分してしまおうとしていたし、おれが即座に金を出せと言つたものだから、おれなら充分懐をふくらますことの出来る相手と考えて、一切合財おれに渡したんだ。高利貸の方も瞞してね。

センターリヤス で、女は、女の方は、どうなった？

ドン・ファン ある公證人が追っかけたが、女ははしっこいよ、逃げちゃった。

センチーリヤス まだ若いのか。

ドン・ファン しかも別嬪さんだ。

センチーリヤス そんなのなら、家具のなかに敷えとけばよかつたのに。

ドン・ファン ドン・ファン・テノーリオは、失くした金の勘定はせぬ男だ。家と酒藏を買つたのだ。この二つがあれば、人間はいつでも話し相手に事缺かないで暮せるよ。いま君たち二人が幸い来てくれていることが、すでにその證據だ。二人で度々やって来て、樂しませてくれ。

センチーリヤス 大いに光榮とするよ。

ドン・ファン こちらも同様だ。……おい、チウツテイ！

チウツテイ へい。

ドン・ファン 地頭さんに、注いであげてくれ。(と、空甕の蓋を指す)

センチーリヤス ドン・ファン、まだそんな氣ちがい沙汰にこだわつてるのか。

ドン・ファン そうだとも！ 來られないにしても、いないところじゃ敬意を表しないなどとは言われたくないからな。

171
センチーリヤス は、は、は！ テノーリオ君、君の頭もいよ／＼怪しくなつて來たよ。

ドン・ファン いや、お客を招待しておきながら、来るかも知れない間、席を空けておかないとね。それがおれの氣象だ。禮儀に外れる。それが、いままでのおれの癖だったし、これからもそうだ。ところで、この席に彼がいないことは、はなはだ残念だ。なぜって、地頭さん、死んでからも生きてるときのように、執念深い親爺であるなら、その執念がおれたちを追っかけて来るはずだよ。

センターリヤス あの人のために乾盃しよう。そして二度と考えないことにしよう。

ドン・ファン それもいいよ。

センターリヤス 乾盃。

アベリヤネーダとドン・ファン 乾盃！

センターリヤス 神の榮光がありますように。

ドン・ファン しかし、現世の榮光よりもっと大きい榮光が死んだ者にあるとは思わないから、そんな乾盃は、あんまりしたくない。しかし、君たちがしたいと言うなら、仕方がない。——地頭さん、神の榮光がありますように。

(三人が乾盃したとき、かすかに訪ない鐘の音が聞える。道に面した戸口らしい)

だが、誰か来たようだな？

チウツテイ　へい、旦那。

ドン・ファン　誰だか、見なさい。

チウツテイ　(窓を覗いて) 誰も見えません。——どなたです？ 返辭がありません。

センターリヤス　誰か、いたずら者だ。

アベリヤネーダ　どつかの馬鹿ものが、通りがりに、どこの家も見さかいなしに、ノックし

たんだらう。

ドン・ファン　それなら、戸を締めて、酒を注いでくれ。

(また、前より強くノックする音)

だが、また呼んだぞ。

チウツテイ　さようです。

ドン・ファン　も一度、覗いて見ろ。

チウツテイ　なんのことだ！ 旦那、誰も見えません。

ドン・ファン　それではよし。ふざけてノックするという法はない。チウツテイ、こんど叩いた

ら、ピストルを一發見舞ってやれ。

(また聞える。こんどはもっと近い)

またか？

チウツテイ あれ！

アベリヤネーダとセンターリヤス どうしたことだ！

チウツテイ いまの音は階段のところでした。玄關じゃござえせんよ。

アベリヤネーダとセンターリヤス (驚いて立ちあがり) なに／＼？

チウツテイ たしかに。いやなに、たゞ家のなかまで来て呼んでると申しただけでござえます。

ドン・ファン 君たちは、どうしたんだ？ 亡者でもあると思っっているのか。おれのピストル

には弾丸がこめてある。チウツテイ、誰だか行つて見て来い。

(さらに近く訪う聲がする)

アベリヤネーダ 聞いたか。

チウツテイ あれまあ！ いまのは控えの間でしたぜ。

ドン・ファン あゝ、解せた。亡者の一件から、君たちがこの芝居をおれにしかけたな。

アベリヤネーダ とんでもない！ ドン・ファン。

センターリヤス なにをまた！

ドン・ファン ばかり。まぬけ役者を出すがいゝ。そうだ、きっと、そのへば役者から芝居の手

を授かつたんだな。

アベリヤネーダ ドン・ファン、この家には、なにか不思議が潜んでいるのだ。

(さらに近く、案内を乞う音)

センチーリヤス また呼んだ!

チウツテイ さよらです。もう廣間へ来ております。

ドン・ファン ようし! うちの鍵束を君たちが幽霊に渡したと見える。そんな風にして入って来ても、おれは驚かない。しかし、安々と君たちの手には乗らないよ。お氣の毒だが君たちの芝居で、折角の晩餐が邪魔されてはたまらないからな。

(立って行って、正面の入口に鍵をかけ、元の扉に戻る)

入口に鍵をかけた。お化がはいるなら、戸をぶちこわさにやなるまい。しかし、無理にもやるつもりなら、亡者の敷にはいる覺悟が必要だ。それから、天に哀訴するがい。

センチーリヤス 呆れたね。まあ、君の言うとおりだ!

ドン・ファン ところが、君は慄えていたじゃないか。

センチーリヤス いや、白状すれば、それと解るまでは、少々氣味が悪かった。

ドン・ファン いゝ加減で、泥を吐いたら、どうだ?

アベリヤネーダ 僕はなにも知らんよ。

センターリヤス おれも知らん。

ドン・ファン それなら、それでいよ。悪るふざけの張本人に怖い目を見せてやるばかりだ。だが、酒を続けよう。めい／＼席に歸れよ。これの糺明はあととする。

アベリヤネーダ 外れがいよ。

ドン・ファン (センターリヤスに酒を注いで) カリニエーナ(甘口、芳醇をもって聞えた赤葡萄酒の名前—譯者註)だ。君はこれが

口に合ったな。大尉さん。

センターリヤス 田舎が同じだからな。

ドン・ファン (アベリヤネーダへは、別の壺のを注いで) セビーリヤの男には、ヘレス(南部ヘレス産の白葡萄酒の名—譯者註)

にかぎるよ、ドン・ラファエール。

アベリヤネーダ 君は、ドン・ファン、僕らにはめい／＼口に合うのをくれたが、君は、なんで

やるんだ？

ドン・ファン おれは雙方の裁きをつけるんだ。

センターリヤス 君はいつも正義派だからな。

ドン・ファン そうだ、たしかに。さあ、乾盃。

アベリヤネーダとセンターリヤス 乾盃！

(正面右手の、この舞臺の戸口で案内を求める音)

ドン・ファン いたずらもしつこ過ぎる。だが、おれたちの食事を誰が覗こうというのだ。(チウッティへ。彼は驚きの様子) おまえ、そこで何しているんだ、間抜け！ 早く、つぎの料理をもつて来い。(チウッティ、退場) だが、いゝことが解った。そとのやつをからかつてやるら。戸の締まったまゝで、はいつて来いと、向うの頓智を試してやるか。

アベリヤネーダ なるほど。

センターリヤス 思いつきだ。

(正面右手、激しいノックの音)

ドン・ファン もしく、なんですか。死んだ人なら、壁から抜けてはいれましょうに。おはいんなさい。

(ドン・ゴンサローの亡霊、扉も開けず音も立てず、戸口からすつとはいって来る)

第二景

ドン・ファン、センターリヤス、アベリヤネーダ、ドン・ゴンサーロの像

センターリヤス あつ！

アベリヤネーダ おゝ！

ドン・ファン これは、なんだ！

アベリヤネーダ 頭が。(と失神して倒れる)

センターリヤス 息が…… (と、倒れる)

ドン・ファン 事實が、これは幻か。姿も顔も、たしかにあの人。

亡 靈 招待を受けたから来たものを、なぜそのように怖がるか。

ドン・ファン おゝ、たしかに、これは地頭の聲だ。

亡 靈 招くには招いても、わしの来るのを當てにはすまいと思つたが。

ドン・ファン いえ／＼。あなたのために席を用意してあるではありませんか。お出でさない。

わたしは怖がりませんから、見てください。はじめはちよつと驚いて、まさかとも思いもしましたが。たとえ、あなたがウリョアさまであつても……

亡 靈 まだ疑っているな？

ドン・ファン そんなこと、ありません。

亡 靈 疑い深いやつだ。それなら、この冷い大理石の姿に、手をやって見い。

ドン・ファン それには及びません。そう聞いたら、それで解りました。それでは、どうぞ召し上ってください。しかし、そのまえに……

亡 靈 なにか。

ドン・ファン まだ死んでないのであつたら、この部屋から生きては出られないと覺悟なされよ。

(センチリヤスとアベリヤネーダに) さあ、起きろ!

亡 靈 いや／＼、起そうとしたつて、無駄だ。ドン・ファン。わしのおる間は、眼は覺めない。

君の良心と本心にだけ聞いてもらえたいのだ。君は墓地に来て、神をも怖れぬ招待をしてくれたが、神は無量の御慈悲を君に垂れさせたまうて、行つて君の本心を呼びさませよと、この招待に出ることをお許しくださったのだ。神の思召しにより、まことの道を教えようと、わしはこゝに來た。そこで言うが、人間の生命の向うには、久遠の生命がある。君の生きるべき日の日數はもう數えてあり、あすには君も死なねばならぬ。ドン・ファン。しかし、君は目に映ずることみな、氣の迷い、恐怖から出る幻と考へているが、神は有難い御慈悲の御心から、君が本心の迷いを解くためにと、なおも明日の日まで待つてくださるのだ。神の廣大無邊のお思召しをよく理解するよりに、わしは君の勇猛心に期待をかける。わしはわざ／＼出て來た。

返禮したいが、受けてくれるか。ドン・ファン、墓まで来てくれるか。

ドン・ファン　え、参ります。しかし、お歸りなさるまえに、あなたの、その漂渺とした姿の正體が知りたいものです。

(と、ピストルを取りあげる)

亡　靈　君の愚かしい自惚れは、まだ覺め切らぬのか、ドン・ファン。どんなに厚い鐵の扉も、どんなに固い壁だとて、わしのまえには開かれるぞ。見よ。

(と、亡靈は壁に吸いこまれて消える)

第三景

ドン・ファン、アベリャネータ、センターリヤス

ドン・ファン　あつ！あの正體は、壁に吸いこまれるようなものだったか。まるで壁にかゝった水のしぶきが、夏の日に乾いて消えるように！『わしの大理石の彫像に手を觸れて見よ』と言ったが、石があんなに消えるものか！だめだ。いまのは幻だ。昔の家主が酒樽に毒を入れてあったのかも知れない。酒がこの頭のなかに、あゝいう虚しい幻影を描かしたので。影のように見えたあの姿が眞實の靈であつて、おれを神に仕えさせようとおれの魂を呼ぶのであつ

たら、ドン・ファンの數々の罪を苦業で帳消しにさせようと言うんだったら、こんな僅かな餘裕をくれたって、何になるものか…… 神さまはたった一日くれただけだ！……ほんとの神なら、おれが久遠の世界にはいるためには、もっと／＼長い餘裕をおいて豫告してくれるはずだ。『正しい考え方をしてください、そうすれば、あなたのお側にいることが出来るのです』と、イネスの靈は言ったが、よく考えて見ると、あの姿も確かには見えず、あれも夢だ。

(ドニヤ・イネスの亡靈、壁に浮ぶ)

第四景

ドン・ファン、ドニヤ・イネスの亡靈、失神したまゝのセンチリヤスとアベリヤネーダ

ドニヤ・イネスの亡靈　こゝにいます。

ドン・ファン　おや！

亡靈　父の申しましたことを、よく／＼お考えくださいませ。勇猛心を奮いおこして約束のときにお出てください。安らかに死ぬのはたった一瞬ですむのです。よく／＼お考えなさって、心をお決めくださいませ。ファンさま、あすになれば、二人の體は同じひとつのお墓に眠れるのでございます。

(亡霊消える)

第五景

ドン・ファン、センチリヤス、アベリヤネーダ

ドン・ファン 待て、イネス、待つてくれ。眞實愛してくれるのなら、夢とうつゝとをはつきり教えてください。このドン・ファンが安心して泉下に降りて行けるように、わたしの激しい氣持の想像するものが狂氣の沙汰でないということを證據立てゝくれ。もつとゆつくりと確實な印を見せてくれ。それなのに、つき／＼と幽靈のあとばかり、やみくもに追っかけさせられて、愚弄されているばかりだと、おれは無性に腹が立つ。いや、きつとこれはみんなこゝの二人が企らんだ芝居に違いない。そして、ことの運ばれている間、しらつぱくれているやがるのだな。しかし、畜生、そんなことするなら、相手がこのドン・ファンであることを思い知らせてやらねばならぬ。えい、ドン・ラファエルに、大尉どの。もうよかろう。起きろい。

(ドン・ファンはセンチリヤスとアベリヤネーダを揺り起す。二人は深い眠りから覺めたように、起きあがる)

センチリヤス 誰だ？

ドン・ファン 起きろ。

アベリヤネーダ どうしたんだ？ おや、君か。

センチーリヤス こゝはどこだ？

ドン・ファン 君たち、ことは綺麗にやろうぜ。おれは君たちを連れて来た。家に来たときから、何か二人で企らんで、おれを笑いものにしようとしているなどは用心したんだ。しかし、もう芝居はたくさんだ。ひと思いに泥を吐きたまえ。

センチーリヤス 何を言ってるのか、わけが分らないよ。

アベリヤネーダ どれも、僕にも分らない。

ドン・ファン つまり、君たちは、何にも見もせず、聞きもしなかつたというのか。

アベリヤネーダとセンチーリヤス なにを？

ドン・ファン もう猫を被るのはよせ。

センチーリヤス 猫を被った覚えはない、ドン・ファン。

ドン・ファン では、事實であつたのだろうか。このドン・ファンのために、石像が生き出し、こんな急な死期を限つたのであろうか。後生だから、言ってくれ。

センチーリヤス おゝ、解つた。君の言ひのは……

ドン・ファン おれが言うのは、こゝでいま見たことのわけを教えてくれというのだ。さもなければ、おれが人の笑いものにはならない男なことを、君たち二人に、思い知らせてやるまでだ。

センターリヤス 君がそりむきになるなら言うがね、ドン・ファン、こちらこそ君が僕らをからかっているんじゃないかと思ってるんだ。

ドン・ファン おれを侮辱する氣か！

センターリヤス 決して、そんなことはない。しかし、こゝに幽霊が現われた現われたと言うのなら、僕はそれを、どういふ風にとるか、聞いてくれ。おれはいま、全く失神してしまつた、すっかり五感を失つた。それを僕はこゝう解釋する。

ドン・ファン 言つて見る、どういふ風に？

センターリヤス 君が酒を調合して飲ませ、あとで、そんな出鱈目を二人に吹きかけて来る。

ドン・ファン センターリヤス！

センターリヤス 君は膽力が見せたくて、死んだ地頭を晚餐に招待した。そしてこの途方もない招待に地頭が来たと言いまぎらそりとして、麻薬を使つておれたち二人を眠らせたんだ。冗談なら、また我慢もできる。しかしだ、結局、なにをおれたちに見せたか。おれたちの方でも我慢の出来るはずがない。

アベリヤネーダ 僕も同感だ。

ドン・ファン ごまかした!

センターリヤス 君こそ。

ドン・ファン そっちこそだ、大尉。

センターリヤス 聞捨てならぬ、その言葉は、ドン・ファン……

ドン・ファン 口さきだけのことは言わない男だ、君のごまかした。おれの腕には、ごまかしは利かないぞ。おれの力が何より證據だ。

アベリヤネーダとセンターリヤス (劍に手をかけて) やるか。

ドン・ファン 君たちはその暴言の代價がどれだけか考えてみる。外へ出よう。家に連れ込んで欺し討ちにしたと、あとでひとに、思われたくないからな。

アベリヤネーダ 立派な言い草だ…… だが、こっちは二人。

センターリヤス 君に異存がなければ、一人々々で決闘しよう。

ドン・ファン なんなら、二人一度にかゝって來い。

センターリヤス なにを小癪な、ドン・ファン。一人を選べ。

ドン・ファン きさまから先きだ。

センターリヤス さあ！
ドン・ファン さあ、来た、大尉！

第三幕 神の愛と人の愛

登場人物

ドン・ファン

ドン・ゴンサロの石像

ドニャ・イネスの亡霊

その他、石像、亡霊、天使など。

テノリーオ家の墓所。——第二部第一幕と同様。ただし、ドニャ・イネスとドン・ゴンサロとの石像は、もとの所でない。

第一景

ドン・ファン、覆面し、呆然として、靜かに舞臺に現われる。

おれの罪じゃない。興奮した頭がおれを驅り立て、血迷わせたのだ。絶望の神にさゝげる生贄を、この手のやつが欲しがったのだ。そのとき、たま／＼行く手の道のまん中に二人を見つけたものだから、その場で二人を狂氣の餌食にしてしまったのだ。斷じて、おれではない！あれが二人の宿命なのだ！二人はおれの腕前も、おれの運のいゝ男なことも百も承知のはずだもの。おゝ、胸が、心が、地獄のような狂亂に、引きもぎられる感じがする…… おれの迷える魂は、風に吹きさらわれた枯葉のように、人の世の曠野のなかをさ迷い歩く。疑い……怖れ…… ためらいつゝ……。頭のなかに火山の燃え立つ氣がする。われともなく、おれは歩みを運んでいる。なにか知ら偉大なるものに怯え、おれの大きい誇るも屈服している。

(暫く、間)

不遜なるおれの誇りは、豪勇のほか何ものをも認めようとしなかった…… そうして、魂は肉體の死とともに消滅するものと考えていた。だが、今日は、胸がたゆたう。おれは決して幽霊の存在を信じなかった…… 氣の迷いなんだと！ しかし、豪膽を誇るこのおれが、無念ながら、いまは、おれの行くあとから、どこへ行こうと、あの怨靈の、石像の歩いて来る足音が聞える。おゝ、そしていま、不思議な力に吸い寄せられて、抵抗するすべも知らず、こゝま

で連れて來られた。

(顔を上げて、ドン・ゴンサロの石像がその墓石にないのを發見する)

だが、これは！　そこに、彫像がなくなっている！……　おそろしい夢よ、ひと思いに、おれを……　いや／＼、信じない！　往け。おぞましい幻よ、狂えるこの頭から去れ……　子供臭い驚かしで、絶倫のおれの氣力を奪おうとしたって、無駄だよ。まやかしの夢よ、一切が幻ならば、そんなまやかしで、おれが驚かされるはずがない。もし現實であるならば、神の怒りを宥めようというのは、愚かな努力と言うものだ。いやだ。夢にせよ、また現實にせよ、おれは天を徹底的に屈伏させたい。でなければ、おれを屈伏させてくれ。そしてもし、天がしおらしきわが心を求めるならば、素直に心廣く求めるがい。この墓の石像が、おれが頑固に疑いつづける眞實の、確かな證據を見に來いと言うものだから……　參りましたよ、地頭どの、目を覺ましなさい。

(地頭の墓に向つて、そう呼びかける。この墓石は食卓に變化する。これは氣味悪くも、第二幕目のとき、ドン・ファン、アペリヤ、ネーダ、センチリヤスの三人が食事をした食卓そのままである。たゞし、卓布を飾る花房や、花、豪華な食器類のかわりに、蛇や骨や妖火などである(これは畫家の好みにまかす)。この食卓の上に、灰を盛った皿、焰の燃える盃、砂時計が見える。この墓石が變化すると同時に、ほかの墓はみんな開いて、

そのなかに葬られていたと思われる骸骨が、屍衣をまと。たまゝ、出て来る。骸骨、幽霊、精霊などが舞臺の奥に群がり現われる。——ドニヤ・イネスの墓だけは變化なし)

第二景

ドン・ファン、ドン・ゴンサーロの石像、亡霊など

ドン・ゴンサーロの石像　こゝにいる、ぞドン・ファン。おまえに永遠の神罰をと祈っていたものたちも、わしと一緒に来た。

ドン・ファン　おゝ！

石　像　何ごとにも怖れることを知らぬはずの、しんらう 骸骨を酒の肴にするはずのおまえが、なぜその顔を變えるのだ？

ドン・ファン　おゝ、おゝ！

石　像　どうした？　気が遠くなるのじゃないか。

ドン・ファン　わけが分らぬ。おれはやっぱり思い違いをしていたらしい。夢ではない……あいつらだ！

(幽霊たちを見やる)

一度も味わったことのない恐怖に、無残にもわが魂は襲われた。おれの膽力が失せたわけではないけれど、氣が遠くなっていく。

石 像 ドン・ファン、それだ、それだ。おまえの命が盡きて行くのだ。宿命の宣告の期限がいよいよ迫って來たのだ。

ドン・ファン なんだと？

石 像 さつきドニャ・イネスがおまえに言ったではないか。わしもおまえに告げたではないか。狂亂して忘れたか。しかし、おまえの招待に返禮をしなきゃならぬ。そこで、ドン・ファン、近く寄れ。君のために、こゝに食卓の用意がしてある。

ドン・ファン なにを饗應してくれるというのだ？

石 像 火もある。灰もある。

ドン・ファン 頭の毛がすくむ。

石 像 おまえの行く末がこれだ。それを馳走してやるのだ。

ドン・ファン この身の行く末が火と灰か。

石 像 おまえの周囲を見よ。彼らと同様、勇猛も青春も權力も、一切の最後がこれだ。

ドン・ファン 灰とは解る。だが、火とは！……

石像 凄まじい怒りの焰だ。辨え知らぬ亂行により、おまえは永劫に燃えさかるのだ。

ドン・ファン それなら、この世の彼方に、ひとつの世界が、もひとつの人生があるというのか。

あゝ、それならば、おれが思っても見なかったものは、眞實であったのか。怖ろしい退つ引きならぬ眞實に、胸の血も凍る！ その眞實はたゞおれの破滅の啓示である！ そして、この時

計は？

石像 おまえの人生の時のはかりだ。

ドン・ファン もう刻限か。

石像 刻限だ。落ちていく砂の一粒々々におまえの生命が一刻々々と盡きていく。

ドン・ファン 残っているのは、それきしか。

石像 これだけだ。

ドン・ファン 無情な神だ！ 悔悟の餘裕も與えずに、いまさらその威力をおれに見せるとは！

石像 ドン・ファンよ。刹那の悔悟に魂は濟度されるのだ。その刹那はまだおまえに残されておる。

ドン・ファン 駄目だ。罪と悪との呪いの三十年を、一瞬に消し去ることが！

石像 この一瞬を無駄にしまいぞ。(吊鐘が鳴る) 刻限もいよ／＼盡きる。おまえのために鐘が

鳴っている。おまえの葬られる墓穴も掘つてある。

(はるかに、死者を用う鐘が聞える)

ドン・ファン それでは、おれのために、鐘が鳴るのか。

石像 そうだ。

ドン・ファン あの甲いの歌の聲は？

石像 おまえのために、瀆罪の御詠歌を唱えておるのだ。

(左手を松明りの過ぎるのが見え、奥で祈りの聲がする)

ドン・ファン そこを通る葬列は？

石像 おまえの葬列だ。

ドン・ファン おれは死んでいるのか。

石像 おまえは家の玄關さまで、大尉の手にかゝつたのだ。

ドン・ファン 信仰の光明の、この胸に射しこむのが遅過ぎた。いまわが本心を信仰の光に照ら

せば、たゞ見えるのは、犯した罪ばかりである。そればかりが見える…… 怖ろしい苦悶の心

をもつて。あまりにも多いわが罪を見ると、このドン・ファンに、全身に怒りをこめた神の姿

が見える。あゝ、おれは行くところで、處かまわず、道理は蹂躪し、操をけがし正義も司直も

嘲弄し、見るもの一切に毒を注ぎ、賤が女の荒屋へも降り立ち、宮殿へも昇り、修道院の扉をも撃じた。これがおれの生涯だった。そうだ。この俺に神の怒しのあるはずがない。しかし、亡霊たちへまだそこに、たゞ押し黙って、立っているのか！ たゞひとり、わが胸に苦悶を抱いて、靜かに死にたい。死なせてくれ。だが、怖ろしくもおし黙って、なにを告げんとするか、冷酷な亡霊たちよ！ なにを待つのか。

石像 お前の魂を攫って行こうと、死ぬのを待っているのだ。さらばだ、ドン・ファン。おまえの一生もこれで終った。だが、一切が無駄だった。別れのしるしだ。君の手をとらせてくれ。ドン・ファン いまさら、友情を見せてくれるのか。

石像 そうだ。わしは君に情なかつた。神は君を永劫の國へ連れて來いと、わしをお遣わしになつたのだ。

ドン・ファン さあ、手を！

石像 さて、ドン・ファン、君に與えられた最後の瞬間まで君は空費した。わしと一緒に地獄へいくのだ。

ドン・ファン 放せ、まやかしものの石佛！ 放せ、この手を放せ。おれの生涯の、最後の一粒の砂がまだ時計のなかに残っている。刹那の悔悟が魂の永劫の濟度となるというからは、聖な

る神よ、わたしはおん身を信じます。わたしの悪業はまことに前代未聞でありましようとも、おんみのご慈悲も廣大無邊…… 神よ、わたしに慈悲を垂れさせたまえ！

石像 もう晚い！

(ドン・ファンは眼く。ドン・ゴンサーロの亡霊に執られてない方の片手を、天に捧げる。幽霊や骸骨ら、ドン・ファンに響いかゝる。この瞬間、ドニャ・イネスの墓が口を開いて、イネスが現われ、ドン・ファンの天に擧げた方の手をとる)

第三景

ドン・ファン、ドン・ゴンサーロの石像、ドニャ・イネス、そのほか幽霊たち

ドニャ・イネス 遅くはございません、あたくしが参りました。ファンさま。悔悟のお苦しみを天にお示しなされたお手を、あたくしがしっかりと捉とつてさしあげます。あたくしのお墓のかたえで、神はファンさまをお恕しくださいます。

ドン・ファン 慈悲の神、ドニャ・イネス！

ドニャ・イネス 亡霊どもよ、消えろがい。ファンさまのご信仰で、二人は濟度されました…… あなたたちは墓にお歸りなさい。神のみ心です。あたくしの魂の苦しみをもって、ファ

ンさまの汚れた魂を淨めてさしあげました。神さまはこのお墓のかたえで、あたくしの願いを叶え、フアンさまをお救いくださいました。

ドン・フアン 愛しいイネス！

ドニャ・イネス あなたののおためと、あたくしはあたくしの魂を神に捧げました。神さまはあたくしのため、あなたさまの濟度をお許しくださいましたの。人の考えも及ばない有難さでございます。純の純なる生命をもち、心の正しい人にも、愛がフアンさまを、墓穴の入口ではじめて救いえたことが理解していただけます。——葬いの歌は止みなさい。

(葬送の曲と歌聲は止む)

葬いの鐘も、鳴りやみなさい。

(鐘鳴りやむ)

空しい影たち、あなたがたの柩にお歸りなさい。

(骸骨たちは墓に歸り、墓は口を閉じる)

彫像たちは動いて礎石のうえにお戻りなさい。

(石像はみな元の位置に戻る)

正しき者の住む天上至福の世界は、いまからフアンさまのために、この奥城に展けて下さい。

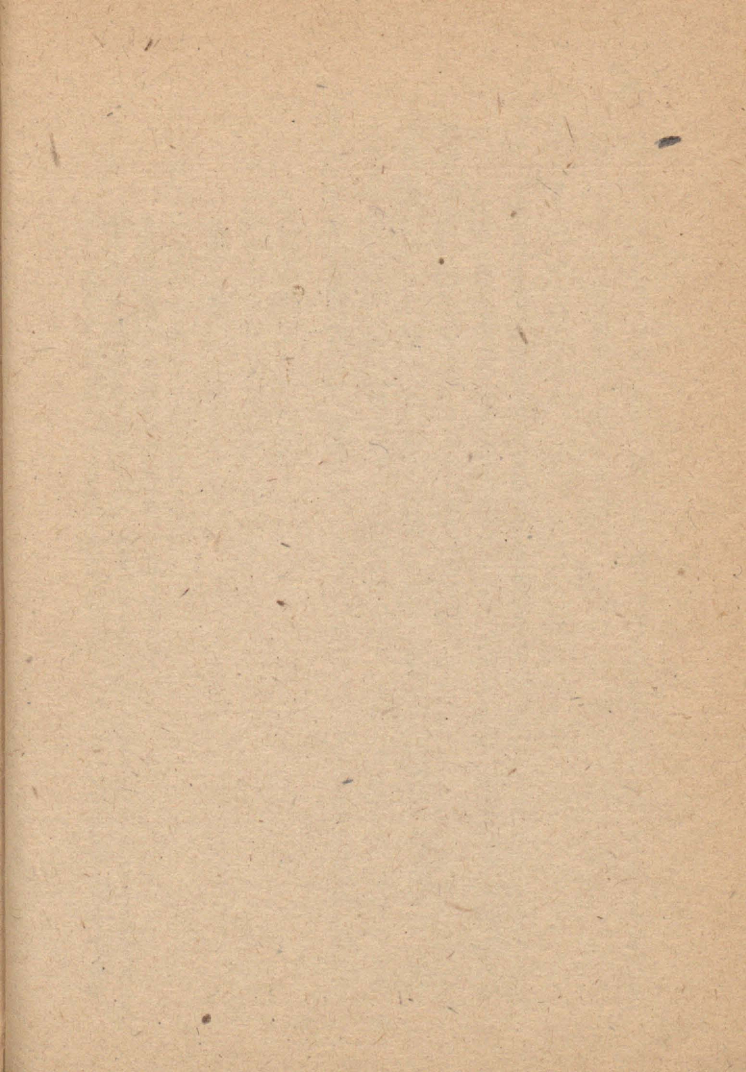
〔花々はみな開き、小さな天使たちを迎える。天使たちはドニャ・イネスとドン・ファンをとりまき、花と香氣を投げかける。適かに甘美な奏樂につれて、舞臺は七彩の光輝に照らし出される。ドニャ・イネスが倒れると、そこに墓石は消え、観客の目には、花の薔に横たわるように見える。〕

終 景

ドニャ・イネス、ドン・ファン、天使たち

ドン・ファン 慈悲無邊の神よ、榮光あれ！ あしたになったら、セビーリヤの町中が、仰天することだろう、おれがおれの餌食になった奴等の手にかゝって倒れたと思つて。しかし、それに違くない。こゝに、世間に明らかにして置いてやる。刹那の悔悟に煉獄の扉は開かれ、慈悲無邊の神は、ドン・ファン・テノリーオの神であることを！

〔ドン・ファンはドニャ・イネスの足さきに倒れる。ともに死ぬ。二人の口から魂が抜け出る。魂は光輝たる二つの火焰で表わし、樂の音につれて虚空に消える。幕が下りる。〕



『ドン・ファン・テノーリオ』について

もくじ

一、いとぐち	一九
二、第二の親ソリリヤ	二〇〇
三、第二の親の仕事	二〇六
四、最初の親と長兄	二〇九
五、兄弟たち	二一六
六、遠祖と一族	二一九
七、人となり	二二三
八、むすび	二三一

一、五とぐち

「前世紀——第十九世紀——に於けるイスパニヤの、華やかな詩壇を見渡して、高く強く光芒を放った巨星のみに目をつけても、キンターナ Manuel José Quintana, 1772—1837 ガリェーロ Juan Nicasio Gallego, 1777—1838 等の逞しい敘事詩、その雄々しく力強い雄叫びは、衰微疲弊した祖國に力と活氣とを興えたのであったが、その後につゞいたのが、絢爛なロマンティシズムの時代である。この時代に、エスプロンセーダ José de Espronceda, 1810—1842 の詩神は不羈奔放、不遜な活力と烈しい獨創力をもって萬人の心底をゆさぶり、これを壓倒し魅了し去った。そしてまた、ソリーリヤなる太陽、わがカステイリーリヤ語の詩の神は、雲雀と小夜啼鳥の子として自然の美をたゞえ、放浪の即興詩人として、わが國傳統の騎士道精神の物語と華麗な宮殿をうたい、空を光で、野を花で、また森を愉しく囀る小鳥たちで、理想の世界を温い色と輝く夢で充たしたのであります……」

劇作家キンテロ兄弟は、月の光にたぐらべき詩人ベッケル Gustavo Adolfo Bécquer, 1836—1870 に言い及ぼそうとして、この詩人の記念碑の除幕式に臨んで、以上のようなことを言つた。

この挨拶の言葉で、第十九世紀のイスパニヤ詩壇の大勢と、そのなかにおけるソリーリヤの位

置と傾向が、おまよそ推量しうると思う。じつさい、十八世紀以來、政治的にも文化的にもフランスに隸從したイस्पانياは、意氣沈滞して、弱々しいものであったが、一方において民族的なもの、祖國愛というか、祖國への再檢討が興る氣運にあつた。その機縁は政治的にはナポレオン勢力の驅逐であり、文學的には、ロマンティズムの開花であつた。この新しい文學が文明批評家詩人ラーラ Mariano José de Larra, 1809—1837 や、キンテロの言及した詩人エスブロンセーダらによつて導入されると、この國の文學界はにわかには生氣と活氣をとり戻した。ソリトリアはこれらの先驅者について現われ、詩人としてまた劇作家として、そのロマンティズム全盛時代に君臨し、ロマン主義最後の光輝であるホセ・エチエガライ José Echegaray, 1833—1916 にその位置を譲るまで、王座に一世を睥睨していた。

二、第二の親ソリトリア

ホセ・ソリトリア・イ・モラール José Zorrilla y Moral は、一司法官の子として一八一七年バリャドリッドに生れ、幼年時代こゝで育つたが、父の轉任について、セビーリヤ、マドリッドなどと轉々と居は移り、彼一生の放浪生活はこのころからの宿命と思える。首府に來て貴族學校に入學したが、父は政治的出來ごとのため、官と首都から追われたので、トルケマード、レルマに引退することになつた。ソリトリアは生地バリャドリッド、ついでトレッドの大學で法律を

學んだ。辯護士になろうと言うのであったが、これはイスパニヤの青年が踏む常道である。しかし、彼の天稟は法服をまとわせないで、詩人にしてしまった。

父母のもとに歸省していたある日、牧場に遊ぶ馬を見ると、それに乗ってそのまま、漂然とマドリードへ家出した。

彼が文壇に出た出方は芝居がかっていて、挿話的に有名である。この挿話を世に残した最初の人は、實見者であり、ソリーリヤの發見者の一人である詩人バストール・ディーアス *Nicomedes Pastor Díaz, 1811—1863* だった。すなわち一八三七年の十月にディーアスは書いてゐる。

「二月のある午後だった。一臺の靈柩馬車がマドリードの街を通って行つた。淋しい顔とおじけた目をした何百の青年が、これに従つた。馬車にはひとつの柩がのり、柩のなかには、ラーラの遺骸、柩のうえには、冠が置かれてあつた……。フェルタ・デ・フェンカラルの墓地に、われらの詩人を送っていたのである。……わたしたちの淋しい義務を了えてからも、口に盡せないある力によつて、その盛り土の周圍を立ち去り兼ねた……。永遠に閉じこめられた貴い遺骸から離れかねた。さらにもう一言、われらの友の空しい影に聲をかけたいと、われ／＼を支配していた感動の言葉を、天に求めていた。われ／＼の悲しみの代辯者を、悲痛を表現してくれる言葉を、われ／＼の嘆息を調べに表わしてくれる聲を、わたしたちは、天に、またわたしたちの周圍に求めていた。そのとき、參會者のなかから、まるで墓のなかから抜け出したように、一人の青

年が、誰も見知らぬ男、まるつきり子供見たいな青年が現われたのである。蒼白な顔をあげて、敬虔な目ざしを天と盛り土に注いだ。いま始めてわれ／＼の耳にいる聲、彼は顫える聲で途切れ途切れに、その詩集の巻頭にある詩を讀んだのである。ロゝカ氏はそれを奪いとらねばならなかつた。作者自身も自らの感動に力がつきて、讀み了えることが出来なかつたからだ。われ／＼の感激は驚きに等しいものだつた。天來の聲に似たものを聞かせてくれた人物の名前を聞くと、われ／＼は宗教的な感激をもつて、この新しい詩人を迎えたのであつた。一人の天才の墓場のうゑに、またひとりの天才を出現させてくれた天帝に祝福をさへげた。輝かしかつたラーラを死者の家へ送つたわれ／＼は、その靈域から、一人の詩人を生ける人々の世界へ連れ戻つたのである。ソリーリヤの名前を感動をもつて叫びながら。」

前言したように、ラーラはエスブロンセーダと共に、イスバニヤ・ロマンティシズムの確立者で、フィガロ Figaro の筆名で新しい文學批評の筆をとり、また國民性の弱點を諷刺し曝露して、詩、散文小説、批評、小品など、華々しくジャーナリズムに活躍した人物であつたが、人妻との戀愛事件のため、二十八歳でピストル自殺という劇的な最後をとげた人物、その葬儀にあつた。劇的な現われ方をしたのが、次代の大立物のホセ・ソリーリヤだつた。

このとき、ソリーリヤはまだ二十歳、白面の青年にすぎなかつた(一八三七)。この年、最初の詩集を發表してからは、矢つぎ早やに四〇年までに六冊の詩集を世に送つて、彼の地歩は確固

なものとなった。ラーラへの弔詩をはじめ、『ためらう Indecisión』『太陽なき日 El día sin sol』『だが La duda』『名譽とほこり Gloria y orgullo』など、ソリーリヤの名を遺やせた作品が、これらのなかに收められている。

また、彼の作品の一方面をなす「ものがたり」もの、多くは傳説に取材した「ものがたり」の佳品、『眞實は時をもって Para verdades el tiempo』『よき判官には、よりよき證人 A buen juez, mejor testigo』『ペリャドリードの思ひ出 Recuerdos de Valladolid』『王子と天子 Principe y Rey』『二輪の薔薇 Las dos rosas』『アントーヤ大尉 El Capitán Montoya』『ペドロの裁き Justicias del Rey D. Pedro』『彫師と殿様 El escultor y el duque』なども、初期の作であり、彼の全作品のうちでも、出色の長詩である。

ほとんど他國に隸屬的だった當時、さらに飛躍するために民族的に懷古的になつた時代の彼が、いにしえに取材したのは當然である。祖國、宗教、人の愛、これらが古い詩を形成する本質的な要素であつたし、民族の傳統的感情だつた。ことに、基督教と回教徒の接觸點たるばかりでなく、長くアラビヤ人に征服されていたことのあるイベリヤ半島民族の宗教的感情は、強烈なものでなければならぬ。こうして、かつて「自然の怪物」と呼ばれたローベ・デ・ペーガ Lope de Vega, 1562—1635 が劇にとり入れた資材に新しい衣を着せ、同じ傳統の精神をついで、カステイリーリヤ語の王者、新しい「自然の怪物」として、ホセ・ソリーリヤはその道を突進するので

ある。舊い敘事詩はロマンティズムの波頭に乗って、ふたゝび蘇った。

『吟遊詩人の歌』Cantos del trovador に集められている説話的詩やものがたりに、とくに見るべきものが多い。

早く『靴屋と天子』El zapatero y el Rey 『勇士の懐劍』El puñal del godo などの劇作を発表し、また劇作家としての不朽の名をなさしめた『ドン・ファン・テノーリオ』を世に問うたソリーリヤは、その翌年フランスへ行つた。彼の放浪はこのときから、外國に向つた。母と父の死によつてそのたびに歸國したが、ポルドー、パリに比較的長い生活を送つた。デューマ、ミュッセ、ゴーチエなど、フランスの作家と親交ができたのはこのころであつた。

彼は貧乏だつた。フランスで自分の作品の版權を賣つたりした。

雄大な史詩『グラナダー』Granada を発表したのは、一八五二年パリであつた。

彼の貧乏は放浪癖と大まかな放蕩的な生活からであり、後年のそれはさらに政治熱に浮かされたためだつた。とにかく絶えず貧乏に追いまわされていた。家庭生活にも不如意があつた。

そのため、一八五五年何度目かにパリへ行き、さらにキューバからメキシコへ渡つた。昔のイスパニヤ人がやつたように、富を求めて新大陸へ渡つたのである。開拓事業を志して詩人の夢を實行に移そうとしたのである。——これには後繼者がある。小説家のブラスコ・イバニェスも南米で農園を開いて、まんまと失敗している。ソリーリヤのメキシコ滞在は十一年、當時ナポレオ

ン三世によって任命された不運な皇帝マキシミリアーノがメキシコにあって、ソリーリャはこの皇帝の寵をえたが、皇帝の寵と事業とは別であつた。事業家としての夢は見事に破れて、「ボケツトに兩手を突込んで」、悄然と故國に歸つた（一八六六）。メキシコやキューバでは新大陸の國民をたゞえる歌や、その歴史的なものを書いているけれど、その十一年は、ソリーリャにとつて、ブランクと言つていゝし、大きな無駄足であつた。

歸國後はカタルーニャ、バリャドリッド、あるいはマドリッドなど轉々と居を移し、文筆を運ぶかたわら、政治に熱中した。生活は依然として苦しかった。何にでも手を出し、手を出しては失敗した。時の宰相カステラル Emilio Castelar, 1832—1899 の進言¹⁾、三萬レアルの年金を政府から受けることになつて、始めて生活の安定をえた（一八八四）。最後に、一八八九年グラナーダ、アランブラ宮において、當時攝政だつた女王マリア・クリステイーナと幼王アルフォンソ十三世の名において、詩人の冠を授けられた。その記念は、この町の繁華街の一に「詩人ソリーリャ通」Calle del Poeta Zorrilla とつう名稱を遺している。

そして、メネンデス・イ・ペラーヨの謂わゆる「イスパニヤ人の血の流れのつゞく限り、イスパニヤの民族精神、その最後の殘滓すら消失しないかぎり、愛され、讃仰される」この作家は、一八九三年、マドリッドで死んだ。墓碑銘には、たゞ「バリャドリッドの出生、詩人ホセ・ソリーリャ」とのみ刻むようにと、遺言して。

つまり彼の一生は絶えず變化を好み變化を求め、放浪の生活であり、ボヘミアンだった。すべてイスパニヤ人はボヘミアンである。餓死しないために、假定にしがみついて、生きて行こうとする「悪黨」なのである。

三、第二の親の仕事

英國のイスパニヤ文學研究家ウィッツモーリス・ケリーは、ソリーリヤを劇的才能をもつスコットであるとして、ウォルター・スコットに比較した。すなわち「ソリーリヤの『アラマール物語』『グラナーダ』、『シッド物語』は、*Marmion* と *Lady of the Lake* と同じ理由によって、一般に悦ばれた。すなわち、ともに單純で繪畫的な形式で、國民的なものがたりを再生したからである。ともに、構成とか形式、取扱いの美しさよりも、さらに主題の面白さ、挿話の華やかな彩色によって讀まれた。そしてなお、ウォルター卿は小説において長命し、ソリーリヤは『ドン・ファン・テノーリオ』、『靴屋と天子』、『逆臣教に殉じて語らず』のごとき劇において、長い生命を保持するであろう。彼が民族的な問題のとらえ方、イスパニヤにおいては殊に強烈な勇氣、愛國心、宗教といったよりな初源的な感情にうったえる逞しい力、それが彼の人氣を廣く、かつほとんど不朽に近いまでの永續的なものにする。」

ソリーリヤには三つの特質があった。民族的感情と劇的靈感と詩的な自發性であった。逞しい

空想力と、後から後から湧き出して盡きることのない詩的感興に、筆はそれを追い悩んだかに見える。その結果として、無頓着な無難な筆の運びに瑕の多いことを非難されもした。フランス語風な言葉遣い、未熟な語彙の使用に無關心であった。彼の筆は極めて早かった。傑作『ゴードの懐劍』は二十四時間で書きあげたと言うし、この『ドン・ファン』も三週間で出来あがっている。しかも、その作品の種類は詩、劇、物語、評論など、極めて多方面に及んだ。

彼の自在奔放な創作的幻想力はエスプロンセーダに及び、その繊細な感情はのちのベッケルに拮抗するのみである。とはいえ、スケールの大きさ、雄大さはベッケルをはるかに凌ぐと言わねばならない。

ソリーリヤは前の度々の引用によっても判断しうるように、多くを過去に取材し、民族的な感情をテーマとして、これにソリーリヤの思想と色彩と感覚とを加えた。これは古典の復活である。イスパニヤ文學の黄金時代——十六、七世紀——、あるいはそれより前のものの再現にほかならない。

そのような彼が、イスパニヤ民族の創造した「ドン・ファン」を取りあげたのは當然である。

いにしえに憧憬し、民族的な濃厚な血潮を體中に漲らせたソリーリヤが、その詩的感興を幻想の色美しい翼に乗せて、天翔けさせたのがこの『ドン・ファン・テノーリオ』Don Juan Tenorio, 1914である。

このとき、作者は二十七歳、詩人としてもまた劇作家としても、すでに文壇に確乎とした地歩をえていた。そこから来た氣負い、また藝術至上主義的口吻は、第二部第一幕第一景の最後における彫師の臺詞に見えている。すなわち、彫師は丹誠をこめ、精根を傾けつくして彫りあげた石像に向つて、別れを惜しむのである。

「……お前たちに形と生命とを與えたものはいま、お前たちに別れを告げようとしているのだ。どうか、わたしの藝術家としての名譽を保つていてくれ。お前たちのほうがわたしより永生きするのだもの。」

はたして、ソリーリヤのドン・ファンは、フランスの研究家ジャン・カッスーの言うように文學史上に現われた最も長命なるべき「ドン・ファン」となった。いまなお、毎年萬靈祭（十一月一日）のころ、繰返し上演されて、場面の華やかさ、抒情味の美しさ、宗教的な香りの高さによつて、觀客を夢の國へさそつているのが、この「宗教幻想劇」である。

ソリーリヤの「ドン・ファン」の特徴はその宗教性であり、これがとくにイスパニヤの觀客と讀者に訴え、共感させるものがあるのではなからうか。ドン・ファンの原型においても、その後無數に現われた作品にあつても、終始無神論者であつたけれど、ソリーリヤに至つて、神を信じ、このドン・ファンが生れた。ソリーリヤはカトリック教の大乗思想を織りこんだ。なるほど、このドン・ファンも死に直面するまでは、神をも魔をも怖れることを知らない悪黨であり、空威張り

やだったが、最後の瞬間に至って、神の大悲と人の仁愛によって、ついに濟度されるのである。一瞬の悔悟によって、煉獄への門が開かれる。これは天國への一歩手まえの過程にはかならない。

四、最初の親と長兄

ドン・フアンの性格が始めて文學に現われたのは、知られているように、十七世紀のイスパニヤの劇作家ティルソ・デ・モリーナ *Tirso de Molina*, 1571—1648 の性格劇『セビーリヤの色事師と石のまろろう』 *El Burlador de Sevilla y Convidado de piedra*, 1630』においてであった。

この性格の創造者ティルソ・デ・モリーナは本名をガブリエル・テリェス *Gabriel Téllez* と言って、「自然の怪物」ローペ・デ・ベーガ *Lope de Vega*, 1562—1635、カルデロン・デ・バルカ *Calderón de la Barca*, 1600—1681 とともに、イスパニヤ文學の黄金時代における三大劇作家の一人と稱せられる。

彼は一五七一年首都マドリードに生れて、アルカラ大学に學び、一六〇一年僧籍にはいった。僧侶として出世は早い方で、一六一六年（セルバンテス、シェックスピアの歿年）には巡察僧として、西印度サント・ドミンゴに渡っている。二年めにはもう本國に歸っていた。文筆をとり始めたのはそれよりまえ、一六一〇年ごろからであり、盛んに同時代の爲政者や知識階級を揶揄諷

刺した。テイルソ・デ・モリーナの匿名で書いたのであったが、そのため首都を去らねばならなくなり、トルヒーリョ、サラマンカ、トレードなど、諸方に轉々とした。晩年はソリアの修道院長に任ぜられ、この地に死んだ（一六四八）。

彼は自らローベ・デ・ペーガの弟子であると言って、この「自然の怪物」にひどく敬意を払ひ、ペーガのほうでもそのメルセード會の僧侶の作品を早くから高く買っていたらしい。みずからは四百篇以上書いたというが、現在傳わっているのは八十六篇ばかりである。僧侶として信者から聞く懺悔は、彼に豊富な材料を提供したのである。その作品には「僧にあるまじき」描寫や「上品でない」場面が多く、その不道徳性が攻撃的とはなつたけれど、人間の弱味、實生活の現實の把握方に非凡な鋭さを示し、美しい詩韻のなかに、ひらめく機智、巧妙な諷刺を織り出している。しかし何よりも彼の價値はドン・ファンを始め、偽善家マルタなど、多くの性格を創造したことにある。

彼の文名を決定的にした最初の作品は、デカメロンを模した作品集『トレードの別荘 *Los Cirrallales de Toledo, 1621*』である。このほか有名なものとしては、神學的思想を盛った『不信墮地獄 *El Condenado por desconfiado*』、史劇『女の慎しみ *La prudencia en la mujer*』、偽信家を描いた喜劇『信心家マルタ *Marta la Piadosa*』、『御殿の内氣者 *El Vergonzoso en palacio*』、『緑色子ばねのドン・コナ *Don Gil de las Calzas verdes*』を挙げた。また『バ

リェスカの村乙女 *La Villana de Valdeca*』は私淑する先輩ローベ・デ・ペーガに寄せた喜劇である。

さて、彼が『セビーリヤの色事師と石のまろうど』を書いたのは一六二五年ないし三〇年の間であると思われる。これは彼の最も多作な時期にあたり、その二五年には、職務上の用件か、あるいは單なる旅行であつたか、セビーリヤに行き、のちに焼失したけれど當時は現存したサン・フランシスコ修道院の寺内にある地頭ウリョアの墓なるものを訪れたと言われている。ともかく、この旅行の收穫が『セビーリヤの色事師』と思えるし、その最初の出版が一六三〇年、バルセロナにおいてであつた。

「色事師」で通つてゐる *burlador* を辭書的に説明すれば、單なる女たらし、愛の追求者ではなくて、「冷かす人、嘲弄者、相手に絶望なり當外れを感じさせて、それを悦ぶもの」の謂いである。この點、フランスで言う *seducteur* より、英語の *mocker* の方が、原義に近い氣がする。また「石のまろうど *convidado de piedra*」とは、作品を一讀すれば了解されることであるが、招待を受けた石像である。石像の主はカラトラバ會の地頭ドン・ゴンサーロ・デ・ウリョア。すなわち、地頭にあつた *comendador* とは、騎士の位階でもある。國土回復戰の當時、回教徒のアラビヤ人を放逐するため、キリスト教會は騎士に采地——莊園を與えて、武士を養わせた。そうした團隊が修道院を城砦として、各地に組織された。謂わば僧兵の軍團であつた。そして、

一定の地區で莊園をもち、その守備にあつた頭首が *comendador* なのである。従つてそれは、魂の世界における宗教的權力と、武による實力とを兼有して、社會的地位も高く、名譽ある職務であつた。

ドン・ファン劇のためにティルソ・デ・モリーナが用いた素材は古くからセビーリヤに傳へられていた史實的傳説であつた。すなわち、古い『セビーリヤ年代記』*Anales de Sevilla* には、つぎのような記事が載つて、いるという。

「セビーリヤの二十四貴族の一家の子孫たるドン・ファン・テノリーオという不逞なる若者はある時、尊敬すべき地頭ウリョアを一刀のもとに斬り殺した。ドン・ファンはその息女を盗み去つていた。地頭は一族の禮拜堂のあつたサン・フランシスコ修道院に葬られた。遺族はそこに一基の石像を建立した。その殺人犯人はその家柄によつて司直の逮捕を免れる特權があつたので、フランシスコ派修道士たちは法律の不能を補う才覺をめぐらした。すなわち、ある夜彼を修道院におびき寄せて、これを暗殺した。そして、ドン・ファンが墓所に眠る地頭をなおも辱かしたところ、石像は俄かに生命をえて、これを火焰に投じた、と言ひ噂を立てた云々。」

ちなみに、二十四貴族とは、セビーリヤの國政に與つた參議官とも言うべき、同市の最高貴族である。

この傳説に取材したモリーナのドン・ファン劇の原形を、その梗概で示せば――

「劇の發端はナボリの王宮である。こゝでドン・ファンはオクタビオ公の愛人イサベラの部屋に、オクタビオ公を装つて忍び込む。別人と判つて、擧げた姫の悲聲に、王やドン・ファンの叔父大使などが馳せつけるが、ドン・ファンは劍を手に闇にまぎれて、人を近づかせない。しかし、叔父に咎め立てられて、自ら名乗り出る。その結果、直ちにナボリを去ることを約し、窓を飛び出して逃亡する。

場面はイスパニヤ海岸タラゴーナに一變する。この海岸で、漁師の娘ティスベアは自分の生活の穩かさを、いままで戀などと言う危険なものを知らないわが魂の安らかさを、自ら讀んでいる。——のどかな景色とのどかな人の心がこゝで描出される。

突然の烈風に、近づく舟が難破する。見れば一人の若者（ドン・ファン）が水に溺れた一人（従者カタリノン）を勇敢に助けている。やがて二人とも失神状態で濱に打ちあげられ、ティスベアの家に運ばれて、親娘の深切な看護を受けるのであるが、ドン・ファンは娘の美しさに本性を現わして、これを口説く。頑として受付けなかつた娘もついに、結婚話などもちかけられて、靡く。しかし一度所望を遂げたドン・ファンは恩を仇に、ティスベアを絶望にたゞき込んで、従僕とともに逃げ出す。

國都セビーリヤでは、ポルトガルに使用して首尾よく使命を果たしたカラトラバ會の地頭ドン・ゴンサーロ・デ・ウリョアは國王に復命している。ドン・ゴンサーロには美の奇蹟と言われる一

人の息女ドニャ・アーナがあつた。國王アルフォンソ十一世は大使の勞に報いるため、そのドニャ・アーナに、古いセビーリヤ征服の功勞者の一人の後胤ドン・ファン・テノリーオをめあわせようとする。このとき、ドン・ファンのナポリにおける醜聞が傳わつて來る。——この舞臺は華やかに氣高い雰圍氣が充ちている。

ドン・ファンはセビーリヤに舞い戻り、曾つての悪友であり、ドニャ・アーナの從兄であるモータ侯爵に路で邂逅する。侯爵は世にも美しい從妹に戀していること、しかし國王はほかの男にドニャ・アーナを向けようとしているなど惱みを訴える。これを知つたドン・ファンは話に聞いただけの美姬に好奇心をそゝられて、征服の意慾が動く。たま／＼ドニャ・アーナがモータ侯に宛てた密會へさそいの手紙を手に入れる。ドン・ファンはわが幸運を悦んで、モータ侯に變装して、姫の部屋に忍び込む。ところが直ちに姫に見破られ、驚きの叫びに、ドン・ゴンサーロが馳せつける。ドン・ファンは敢えて殺すつもりはなかつたけれど、これを殺す。やむなく逐電する。國王は地頭の横死を悼み、その墓所に大理石の像を建てさせる。

逐電したドン・ファンはドス・パソスの田舎で結婚まえの娘を知り、男には嘘を言つてそれを諦めさせ、女の親へは自分の身分を見せびらかし、金の力で説きおとして、娘と首尾をつけ、また逃げ出してしまふ。

舞臺は再びセビーリヤに移る。ドン・ファン主従二人はある寺で地頭の墓を見つける。碑銘に

『神に至誠なる騎士、こゝに眠りて、復讐を期す』とあるのは、明らかにドン・ファンに對する意趣である。彼は像に向つて、復讐するとは面白い、今夜わが宿に来てくれ、晚餐をともにして、あとで決闘しよう。だが、大理石づくりの刀の切れ味は、どうだろうなどと、悪態をつく。

ドン・ファンの館、石像の來訪、恐怖を見せないドン・ファン。返禮として、ドン・ファンは招待されて、ふたゝび墓地に赴く。晚餐はドン・ゴンサローの墓石のうえで行われる。場面は大詰に近づく。

ドン・ファン——御馳走になった。テーブルを片づけていたゞきたい。

石像——手を握らせなさい。怖じけないでいゝ、さあ、君の手を。

ドン・ファン——何を言う？ おれが怖じける？ (と、握手の手を差しのべる)

地獄の炎は手につたわり、ドン・ファンが最後のあがきを見せる。

ドン・ファン——おれは燃える。その火を拂ってくれ。……もう一度、おれは焼ける。そう攻めたてないでくれ。よし、おまえを斬り殺してやる。だが、あゝ、駄目だ、空を斬るばかりだ。——おれはお令嬢を犯しはしなかった。お令嬢がそれよりさきに、こちらの企らみを見破ったんだもの。

ドン・ゴンサロー——それが、どうしたと言うのだ？ おまえはいたずらをするつもりはなかつたとも言いたいんだな。

ドン・ファン——坊さんと呼んで戴きたい。懺悔がしたい。赦免がいたゞきたいのだ。

ドン・ゴンサーロ——もう時がない。「おれの前には時がある」というのが、ドン・ファンの口癖である。そこに思い至るのが遅過ぎたわい。

ドン・ファン——火がこの身を焼きつくす。體がもえる！ おれは死んだ！（と倒れる）

ドン・ゴンサーロ——これが神のお裁きだ。犯した罪は償わねばならぬ。（幕は、ドン・ファン、石像とともに崩れたおれる）

五、兄弟たち

この芝居は風變りだった。石像が口を利いたりするところが風變りだったばかりでなく、出て来る人物が觀客の内心に深く潛むものをめぐり出して見せた。金持ちで勇氣があつて、イスパニヤ人らしい放膽な活躍が嗜好に投じたのである。彼らの空想を充分に満足させるものだった。

ティルソ・デ・モリーナのこの宗教劇はやがて、イタリヤに渡った。「石像の客」Convitato di Pietra』の外題で、ナポリ——當時はイスパニヤ領だった——の舞臺にかけられ、異常な當りを見た。そして、このイタリヤの劇團をパリに連れて、フランスに紹介したのは、イタリヤ出身の樞機官マザラン Mazarin であったという（一六五四年のこと）。

フランスにはいった『セビーリヤの女たち』劇は、ドリモン Dormond の『石像の饗宴

Festin de Pierre, 1659』*アラン・ヴィリエ*の『罪の子 *Fils Criminel*, 1660』を焼き直され、『罪の子』はブルゴーニュ宮座 *Hôtel de Bourgogne* で上演され、観衆は「石像」に拍手を惜まなかったと傳えられる（一六五九）。

やがてモリエールがこれを取りあげ、これがフランスにおけるドン・ジュアン劇の決定版となっていることは知れすぎている。ただし、彼のドン・ジュアンは譚案と見られるまでの先人の跡が見られながら、最後まで観客に笑いを澁滞させて、幕切れに至って、女たらしも石像も無視され、主人が死んで、お給金の出所を失った従僕スガナレルの臺詞によって、笑いを爆發させる、作者一流の喜劇となった。

その後はロジモン *Rosimond* の『新版石像の饗宴 *Nouveau Festin de Pierre*, 1670』トマ・コルネーユ *Thomas Corneille* の譚案がある。しかし、以上のすべてが、イスパニヤの原型に比すれば、「色褪せた反映」にすぎない、とはフィッツモリス・ケリーの断定である。降つてバルベール・ドーレヴィリ *Jule Barbey d'Aurevilly*, 1808—1839、フローベルらもこれに手をつけた。フローベルのものは原作にせまるものと、前記の英國人の判断である。もとくゝイスパニヤ好みのプロスペル・メリメがこれに觸手を動かしたのは當然である。彼の『煉獄のドン・ファン *Les Ames du Purgatoire*, 1834』(岡田弘氏譯)がそれである。これは物語の形をとって、テノリーオ家の蕩兒でなく、アラニーヤ家の放蕩息子子のドン・ファンである。石像と心中もせず、

東洋的な諦めの生活に入り、晩年を修道士として送る、おだやかなドン・ファンである。

英國では、シャドウエル Shadwell の『蕩兒 Thibertine, 1676』があり、バイロンは「反省的」なドン・ファンを長詩に歌った。未完ながら、逆にイスパニヤやフランスのロマン主義時代の人達に愛唱され、強い影響力をもった。ドン・ファンがタラゴーナの岸に漂着するまえの、漁師の娘を描いた場面のごときは、とくに印象ぶかい一コマとなっている。

ロシアではプーシキンが三部作の一部として取り上げた(米川正夫氏譯)。こゝでは、ドン・ファンが石像の主の美しい未亡人を相役として、ドン・ファンに傾いて行く未亡人の心理が巧みにとらえられた。たくみに珠玉のごとくまとめられたドン・ファンと言わねばならない。

キェルケゴールによれば『ドン・ジュアン論』(飯島宗享氏譯)、デンマークの詩人ハイベルグ Heiberg 1791—1860 同「ハウフ Hauch 1790—1872」の二詩人が喜劇をもっている。前者のそれはモリエールのものより非常に優れているとは、その憂愁の哲學者の採點である。

キェルケゴールの『ドン・ジュアン論』はモーツァルトの樂劇を當面の對象として、ドン・ファンの有する——すべての人間の有する——官能性の直接的表現を音樂と見、それをいみじくも音樂で表出したのがモーツァルト不朽の樂劇であるとして、これが讚美の書である。

イスパニヤに生れたドン・ファンが世界人となるためには、後の多くの作家の注意を惹き、その對象となるためには、はやくモーツァルトのオヤヤ『ドン・ファン Don Giovanni, 1787』

に負うところの大きいのは衆知のとおりである。この作曲家は多くの作家が言葉で表わしえなかつたところを、デリクな人間性の機微を樂譜に訴えて、なし遂げた。このため、ドン・ファンは大きく人類のドン・ファンに成長することが出来た。樂劇の原詞はダ・ボンテ Lorenzo de Ponte の作イタリヤ語。

ドン・ファンは出生以來三十の劇、十に近い小説、また詩に歌われ、多くの畫題となつて、偉大な世界人となつた。

イベリヤ半島に生れて、世界人に、偉大なる世界の人物にまで生長した二人、その一人をドン・キホーテと言ひ、一人をドン・ファンと呼ぶ。一人は孤高を誇り、一人はあまたの群山にとりかこまれて大きな山塊をもつて壓倒している。一人は高い理想をかゝけて世間を見おろし、一人は世間に没入して、人の世の理想を追つて生き抜こうとしている。だが、人はこの二人の偉人に、共通なものを、同じ血のつながりを見ないだらうか。イスパニヤ人という血のつながりを。

六、遠祖と一族

まえに書いたように、テイルソ・デ・モリーナは半ば史實的な傳説を資料として『セビーリヤの色事師』を書いて、ドン・ファンを世界的な性格に創りあげたのであるが、しかし、さらにモリーナ以前に、ファン・デ・ラ・クエーバ Juan de la Cueva, ? 1550—? 1606 が、その劇『中

傷家『El Infamador』に描き出しているという。筆者はその現物を知らないが、この劇に登場する蕩見レウシーノ Lencino なる人物は、ドン・フアンの胎兒であるとされている。

それはそれとして、ドン・フアンの遠祖をイスパニヤ文學にさぐるとなれば、小説の始祖と呼ばれる俗稱イータの僧正 Arcipreste de Hita 本名フアン・ルイス Juan Ruiz の『よき戀のふみ』 Libro del buen amor まで遡らねばならない。これは第十四世紀の初葉に出た韻文小説であるが、愛の原始的表現を描寫し、悪黨的享樂を解剖して見せた。ドン・フアンは官能的ではあるとしても、それを突き破って理想性が賦與された。こゝに時の流れと、その發展とを見取ることが出来るし、この二者を並べて見ることは、あながちに牽強の説をなすものではなからう。

それよりも、わたしが言いたいののは、ドン・フアンは悪者小説 *novelas picarescas* の文學的昇華であるということである。そして、そこに、わたしは眞個のイスパニヤ性を見る。と言えは、當然その悪者ないし悪黨小説に言い及ばなければならぬが、これは前記の『よき戀のふみ』の直系として、十六世紀に榮えた騎士物語や牧人小説と對立した、そしてイスパニヤの民族性を明らかに具現した寫實主義のひとつの文學ジャンルである。

師永田寛定先生はこの過程を巧みに比喻された。「わる者小説はイータの僧正の『よき戀のふみ』に芽を吹き、『ラ・セレスティーナ』で苗木となり、今この自叙傳小説で、立派な立木となつたわけだが、やがては、セルバンテスを待つて、雲に聳える大木となるもの。」(『西班牙文

『學』(社説)

『ラ、セレスティーナ』のことには觸れないこととして「この自叙傳小説」とは、わるもの小説の典型と言われる作者不詳十六世紀の半ばに出た『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯、その浮沈の様 La vida de Lazarillo de Tormes, y sus fortunas y adversidades, 1554』(會田由氏の翻譯がある——岩波文庫)を指す。

この文學に現われる悪者、悪黨は可憐な、愛すべきものであるであつて、決して奸佞さをも邪悪さをも持ちあわさないピカロ *Picaro* なのである。おかしみのある狡さはあろう。ラサロ、愛稱してラサリーリョなるピカロは戦争未亡人の兒、父なきのち盲人の手引きにやとわれて人生へ一步を踏み出すのであるが、その門出にあたって、路傍の牛の石像で盲人から人生の大教訓をさづけられる。

盲人「おい、ラサロ、その牛に耳をあてて見な、中でどえらい音がしているから。」

小僧が石像に耳を近づけたところを見計らつて主人の盲人はラサロの頭をこつんと牛に叩きつけて曰く。「馬鹿野郎、覺えておくがい。盲人の手引き小僧つてものは、悪魔よりかちよつとばかり利口でなくちゃならんのだぞ。」

ラサロの獨白——「こいつの云うのは本當のことだ。お蔭で目も開き、利口にもなり、何をいふにも俺は一人きりなんだから、これで自分でちゃんと抜け目なく立ち廻ることを思いつきもし

たというもんだ。」

こう人生の悟りを開いたラサリーリヨは、けちんぼな盲人から、さらにけちんぼな牧師、腹べこ武士、まやかし守札賣り、なま臭さ坊主などと主を變えて、一日に三度ずつ食の心配をし、才覺を働かし、工面と苦心をする。しかし、利口に抜け目なく立ち廻るお蔭で、さほどの失敗もせず、世の間隙を探しつつ、それを潛り抜けつつ、逞しくおのが生をつなげていく。生來の放浪の生活であつたが、ついに最後の生臭さ坊さんの、おふると蔭口をきくものはあるが、彼は斷じてそう信じない美しい女を頂戴して「幸運という幸運の、正に絶頂に立つ」のである。

ラサリーリヨの段階では、なお追求の對象は、生きる人間の第一義的な、生物的欲求の食であつた。このラサリーリヨが成人して、さらに目を開いて、この人の世に追い求めるものがあるとなれば、美と美の終局的な具現としての女性である。そうであるならば、それは必然的にドン・ファンに到達する。彼もまた、利口に抜け目なく、工夫と才覺をめぐらしつつ、人世の間隙を縫いつつ、ひたすらにその對象を追つた。そこでわたしは、ラサロの發展をドン・ファンに見たい。

そして座右の整理箱の、なかでも大きい引出しに、トルストイやサーディーヤ、『ハムレット』や『ファウスト』などは別の引出しに、『よき戀のふみ』もセルバンテスも、『ラサリーリヨ』も『ドン・ファン』も、近くはピオ・パローハをも入れて、『イスパニヤもの』とでも表に標記

しようか。もつとも、引出しの中では、もつと小分けにジャンルを分類するとしても。

七、人となり

ラサリリーヨという個有各詞が盲人の手引き小僧を意味するようになったごとく、ドン・ファンもまたその姓テノリーオも女たらしの異名になった。

ドン・ファンは事實、稀代の女たらし、漁色家である。とはいえ、ドン・キホーテが單なる滑稽な人物、おどけたカリカチュアに思ひあやまられていると同様に、彼もまた不當に、漁色家にされてしまつてはいないだろうか。(ちなみに、イスパニヤ語で名前に冠する敬稱ドン Don なる言葉の音色が、下われくには滑稽な連想を呼ばせて、ドン・キホーテがいよく滑稽味を増して来るのだろうか。)

單なる漁色家ならば、西鶴の世之助(世之介)となんら選ぶところがない。だが、こゝでこの二人を比較しようとは考えない。なぜなら、そうすることは、牛と鶏を比べて、牛には角がある、雞にはとさかがある。一方は脚が四本だが、一方は二本、そのかわり羽がある、尻尾がどうの、兩方とも肉が食えるぞと、詮議立てするに等しいからである。

だいいち、東西兩作家がその作品に對する態度と意氣込みに根本的な差異がある。一方は、こゝにソリーリヤの場合は氣負い立つた藝術至上主義者が眞向から文學したものであり、他は色に

倦み初めたころおいの俳諧師が筆のすびに書きつらねていった轉合書である。このことが、些かもその文學的價値の輕重評價をするよすがとはなりえないとしても、少くとも世之介の作者にとつてはおのが筆のすびが、後世に高く價値づけられたことは、クリストバル・コロンのアメリカ大陸發見と同様、「意外の見つけもの」に過ぎなかつたであらう。

さきに言い落したけれど、原型におけるドン・ファンは、たとえ劇であっても、この人物を中心にして生起する挿話の連鎖であつた。このことは七歳にして戀を知り、六十歳女護が島に渡るまでの一代男の生涯を描いたと同じ行き方である。後世のドン・ファン作者はどれかのケースを取り立てて前景に押しだして構成を整えている。たとえば、ブーシキンでは未亡人の場合をとり扱い、ソリーリヤにあつては、代表的なケースとして、尼僧と、結婚直前の、しかも友人のフィアンセなる條件の女性の場合をとり立てて、劇的効果をあげることに成功した。

まずドン・ファンは騎士である。無事泰平の世にあつて、社會的に實力をえ、わが世の春をたえつゝ、この世を浮き世と浮かれ歩いた新興階級たる町人ではなく、争亂のうちに生成しつゝあつた時代の武家の子である。しかもセビーリヤ征服に勳功あつた二十四公の家に生れた騎士である。騎士は面目を尙ぶ。だから、町人ならば、わが財産を蕩盡される怖れのゆえに、父は世之助を勘當し、武家の子のドン・ファンは家名を傷けたがゆえに廢嫡された。しかし、ドン・ファンには自己の面目があつた。この保持と伸張のためには、劍と勇氣を揮つて、三十四人の罪なき

ものを殺めたのである。騎士として、面目は何ものにも替えがたいものだった。とはいえ、このことのゆえに、最後はみずから破滅させ、命を縮めなければならなかった。

まえに言ったように、ドン・ファンは單なる漁色家ではなく、*burador* である。「冷かし嘲弄し、相手を絶望させ、その絶望を悦ぶもの」である。だから、世之助が首尾をつけたのち、舌なめずりして、後味を樂しむに反して、彼はうしろを向いて舌を出す。しかし、それよりもなお、ドン・ファンはそこに至る征服の過程をたのしむ理想主義者である。「こゝろと戀に責められ、五十四歳まで、たわぶれし女三千七百四十二人」とは、大坂の漁色家の成果であったが、ドン・ファンには「たわぶれる」觀念、遊び心、ないし浮いた氣持ちは、つゆ見られない。彼は一人一人に、瞬間々々に眞摯な征服の努力を傾倒した。その目的は、ソリーリヤの解釋では、いたずらに官能の追求ではなく、賭けのため、面目のためだった。そして、征服しえた女性は「上は宮廷の姫君から、下は漁師の娘まで、世にありとあらゆる階級」にわたって、一年と一日の間に、七十二人と、舞臺に上せた二人。あわせて七十四人が、騎士ドン・ファンの面目の犠牲者である。

ドン・ファンは何よりも、金と武力とを充分に利用しうる征服者であった。征服という言葉は、とくにあの時代において、イスパニヤ人に、どんなに魅力があつたことか！アラビヤ人の手からの國土恢復と言ひ、新大陸、大自然の征服と言ひ……ドン・ファンの征服は女性だった。その手段として金を使った。金で間に合わないときは、劍を用いた。「金のなる木を棒で叩き落

す」ほどの金があり、「學生さんみたいに、金っ拂いがよかった」。だから、その下僕は仲間から羨ましがられ、ドニャ・アーナの女中も、「天國の入口にいる悪魔」ブリヒダも黄金の光で、手もなく籠落されてしまった。ドス・ペーソスの田舎娘も、その両親もこれに目くらみしてしまった。世之助も金満家であった。ことに、父の死後、勘當の身を母に呼びもどされて、莫大な遺産をついでからは、黄白をもって埒をあげた。彼の對象はこれで埒のあく女であった。「學生さん見たいに、金っ拂いのいゝ」ドン・フアンの金は、征服に至る道の開拓費だった。「利害を作りあげる」ための費用であった。だから、これの補いには劍をも、遠慮なく使用した。この犠牲者が三十二人と舞臺のうえで二人、都合三十四人上った。だから「私兩夫に、ま見え候べきか」と、操高き未亡人のために「手頃の割木にて……肩間」を割られたことも、間夫を發見され「片小鬢剃られて、その夜沙汰なしに、行き方しらず」なるようなへまをすることもなかった。

なにしろ、幸運に追っかけられている幸運兒である。神の恵みの幸運か、悪魔の贈物かは知らないが、たとえ悪魔の贈物であっても、彼の目的に合致するものならば、躊躇なく悪魔に祈りをささげるであろう。一度は天に向って悔悟の聲を擧げた。にもかゝらず、却って「天はのっぴきならぬ破目に」彼を陥れた。わが血路を開くためには、罪もない二人の男を血祭りにあげることもやむをえない。天が悪いのである。天にこそ恨みがある。

彼は無神論者である。

彼は、夜陰神聖なる修道院の階段をふむことも出来たし、その手にかゝって非業の最期を遂げた人々のために、父の遺志によって建立された靈廟を取りこわし、彼が現世の生活のためにおれの家を建てかねない男である。死後の立派な安息所よりも、現實の世界のたのしさを享樂したい。死後のそなえに汲々としていた彼の犠牲者たちは、おのれが繼ぐべき遺産——自分なら一夜の賭博に打ち拂ってしまふ金で、彼らのおそらく望み以上の莊麗な靈廟が建ててもらえたではないか。「おれの手にかゝった諸君もおれを恨むことはできまい。諸君のたつと生命は奪ったけれども、そのかわり、立派な墓を作ってやったんだもの」と、うそぶくのである。

ドン・フアンの無神論者の一面を端的に描いて問題を起したのは、モリエールである。森の乞食に錢をとらせようとして、神を一度呪つて見な、この金をやるからという、よく引用される一こまが、それである。メリメの書いたドン・フアン・デ・アラニーヤは、これとは逆に信仰の厚い求道者として、餘生を送るのであるが、この種のドン・フアンも存在していゝ。しかるに、ソリーリヤでは、この罪の子も、この稀代の蕩兒すら、神の愛と人の愛とによつて、救われうる、カトリックの大乗思想で色あげされたことは、まゑに言つたとおりである。

彼は一世の蕩兒である。「良心も魂も持ち合わせ」ていないし、「おれの行くさき」で、道理は蹂躪、徳義は凌辱、正義は嘲弄、女を欺して、「自在無礙な放蕩亂行狼藉のかぎりをつぐす。目的のためには手段を擇ばなかつた。捨て臺詞として有名な名文句のひとつは

Traición es, más como mía.

(はかったさ、そこがドン・フアンのドン・フアンらしいところさ。)

彼の行動は奔放自在、端倪を許さなかつた。それを律するのは、たゞ激しい内心の衝動であり、capricho であつた。しかも、悔いることを知らない。

Que como vivió hasta aquí,

Vivirá siempre don Juan.

(このドン・フアンはいままで生きて來たように、これからもまた生きて參ります。)

彼の信奉する神は、おのれの幸運であり、彼に幸いする偶然 *casualidad* であつた。そして、頼むところは、かつて、エスプロンセーダが『サラマンカの學生』*El Estudiante de Salamanca* と歌つたように――

猛々しくも思いあがり

宗教けしきを知らず 膽太く

暴戾不遜の たましいは

いつとても 眼に 悔りを

唇くちべには 絶えず 嘲けりを。

さて おそれなく たゞ頼む

おのが劍と おのが勇。(永田寛定先生譯)

であった。これを頼みとして、幸運の神を信じ、衝動の赴くまゝに、

Mañana será el otro día.

(あしたはあしたの風が吹く。)

と叫んで、現在の利那に最も大きな意義を發見し、現在に向つて、ひたむきに突進する。明日は今日ではない、別の日だ。明日になったら、どうとも好きなようになさるがいゝ、誰と結婚なさろうと、自分の問うところではない。自分は今日のこの日に君を欲しいというのである。彼は偉大な利那主義者だった。

ドン・ファンは冒険家 *aventurero* である。冒険なる言葉がまた、なんと彼らには魅力的であつたことか。 *aventuras* とは「事件」、新奇なもの、常ならざる事件である。冒険家とは、新奇なものに怖れることを知らない敢爲の人の謂いである。最も偉大な冒険家は「イスパニヤ人」クリストバル・コロンだった。彼以後、いかに多くの冒険家たちが、新奇と富とを求めて、新大陸に渡つたことか。彼らは坦々たるものに飽きて、平地に波瀾をおこし、何かの變異、新しいものを探り、それによつて新しい刺激をもとめた。廻國の騎士ドン・キホーテも、彼の正義觀から、冒険を求めて、さまよい歩いたのであるし、ラサリーリヨも、舊きものを捨てては新しいものを追つて歩いた。これと同様に、勇敢なるドン・ファンも放浪する。その追い求めるところは、

人間の基本的本能の指向に従って、美なるものの極限なる女性であった。

冒険家は勇猛でなければならぬ。

勇氣は騎士のたつとぶ徳であり、これがドン・キホーテの正義とドン・ファンの面目の支柱であった。ドン・ファンは、彼の従僕テウツティの言によると、「海賊のよりに」勇敢であった。天地の間、なにもものをも怖れることを知らないのみか、生者にも死者にも頭を下げることを知らなかった。

「いや／＼、君たちのしかめっ面も、おれには怖くはない。生きた人間も死んだものも、おれの勇氣をへこませることはないんだ。」

しかしながら、この正義と面目をさへえる支柱は、ときにくず折れる。折れたときに、ドン・キホーテのカリカチュアとなり、ドン・ファンにも、さすがに幽霊の出現に、體はわな／＼慄えながら、口では怖くないと言わねばならない苦しさがあった。

ラサリーリョも一度、その日のパンにも事缺く一人の騎士に仕えたことがあった。それをひそかに、彼は

「只今では、あの歩きつきとか、氣取った様子とか、なにか彼の癖の一つにぶつかりますと、あゝして平氣そうに我慢するのは、さぞかし自分でもつらかるうと、つい私は同情」もし、「あれほどまで尊大に構えずとも」、「何と申したところが、あの物凄く貧しさでございませぬ

の、いまま少しあの驕慢さをやわらげたらよさそうに思」つたりするのである。

「猛々しくも思いあがった」ところ、平氣そりに我慢するところに、瘦せ我慢と空威張りとしてらいが生じる。valentín とい、fanfarrón と言い、あゝ、なんとイスパニヤ人的であるか！ これゆえに、この騎士もあれほど寢食の世話になって、恩ある従者を捨てて、夜遁げせねばならなかったし、ドン・ファンもついに、あれほど執着をもっていた現世を、若くして捨てなくてはならなかった。

臨終の懺悔に、「わしは三人の色女がありました」と言いかけて、坊さんから、「いままさら、臧張るのはよしなさい」とたしなめられた男の話は、イスパニヤの語り草である。

この男も、ドン・ファンも、ラサリーリョの仕えた騎士も、またドン・キホーテも、所詮は一部の哀愁と一部の滑稽とをもつイスパニヤ人なのである。

八、むすび

畢竟するに、ドン・ファンは誇り高い騎士、金のある遊蕩兒、勇氣と劍をもった眞摯なる愛の求道者であった。これらが彼の屬性である。

彼の行動は不逞とも見えた。裏切りもあった。しかし、その裏切りは報復の裏切りであり、つねは正面からの對決をした。兇勇に類することもあった。しかし、タラゴーナ海岸で見せた精神

は己を捨てた勇猛心であり、それゆえにこそ、さすがのティズベアの魂をとらえた。しば／＼彼はふてぶてしい啖呵をきったが、それは、彼らしい見榮でしかなかったのではなかつたか。手段を擇ばぬとするやり口のなかにも、彼としての正直さと論理があつた。

この一世の無法者が、ひとの共感をよび、同情を惹くゆえんは騎士的な高潔さ、心の豊かさ、*generosidad* である。

それとまた……

ある詩人は、皎々と照る月を眺めくらし、月に住む人があるとすれば、あの光の國の女は、どんな女であり、そんな女ほどのような戀をするのだらうか、そんな戀がして見たいと夢みた。

この世界とかの世とのあらゆるものを恐れることなく、世の常理なる羈絆を脱却して、自在におのれの意慾のままに、たゞ美しきものにあぐがれ、ひたむきにこれを追い求めることが出来たならばと、さきの詩人の見たと同じ夢こそ、人類永遠の夢である。實現しえない願ひである。われ／＼はこの夢と憧憬の、せめてもの満足を藝術に求める。そして、この人類の夢とあぐがれを、ドン・ファンは自己に代つて具現してくれた。われ／＼はその化身をドン・ファンに見ているのである。

第十七世紀の初め、ほど時を同じくして、イスパニヤに生れた二人の世界人、ドン・キホーテ

は純乎なるイスパニヤ人として孤高をほこり、ドン・ファンはイスパニヤ人でありながら、その人間性ゆえに、大勢の眷屬を従えて、廣く大きく威壓するものの上りである。

ティルソ・デ・モリーナのドン・ファンは永遠の生命を持続しつゝも、不死鳥のように、十九世紀にいたつて、ホセ・ソリーリヤにより、イスパニヤ直系のドン・ファンとして、さらに新しい生命をえたのである。

ホセ・ソリーリヤ 略年譜

- 一八一七 二月二十一日、イスパニヤ、バリャドリッド Valladolid に生る。父は司法官ホセ・ソリーリヤ José Zorrilla、母はニコメデス・デル・モラール Nicomedes del Moral
- 一八三二 (一五歳) 父の失脚により、トルケママーダ Torquemada ンルマ Irma に移り住む。
- 一八三七 (二〇歳) 二月、自殺した詩人ラーラの葬儀に弔詩を読み、一躍詩壇に乗り出す。『詩集』 Poesía を處女出版、その後四〇年までに、『詩集』七冊を矢つき早やに世に送る。
- 一八三八 (二二歳) 『時を外さぬは用心一年に勝る』 Más vale llegar a tiempo que ron dar un año (劇)。『フエンサルダーニヤの塔』 La Torre de Fuensaldaña (詩)。
- 『詩物語』 Leyendas poéticas
- 一八三九 (二三歳) 『狂氣の生涯 死しては更に』 Vivir loco y morir más (劇)。『損して得ずる』 Ganar perdiendo (劇)。『ナン・ダンドロ』 Juan Dándolo (劇)

- カルシニア・グティエレスと合作)。『各自に道理』 Cada cual con su razón
- 一八四〇 (二三歳) 『女の誠と一夜の出来ごと』 Lealad de una mujer y aventuras de una noche (劇)。『行列する天子』 El Rey en la procesión (物語)。『靴屋と天子』 El Zapatero y el Rey (劇) その第一部)。
- 一八四一 (二四歳) 『靴屋と天子』 第二部。『吟遊詩人の歌』 Cantos de Trovador (傳説と物語)。『青春の書』 Libro de juventud 『ペドロ・カルデロン・デ・ラ・バルカを讀める歌』 Apoteosis de don Pedro Calderón de la Barca
- 一八四二 (二五歳) 『夏の夜祭』 Vigilias del estío (劇)。『二人大守』 Los dos virreyes (劇)。『サンテヨ・ガルシニア』 Sancho García (悲劇)。『奔流のとらぬき』 El eco del torrente (劇)。『海賊カイン』 Cain, pirata (劇) 『一年より一日』 の序幕)。『一年より一日』 Un año y un día (劇)。
- 一八四三 (二六歳) 『ドン・サンテヨ王の乗馬』 El Caballo del Rey Don Sancho (劇)。『グアダラハラの粉挽き場』 El Molino de Guadalaajara (劇)。『ホートの懐劍』 El Puñal del Godo (劇)。『至上の道理』 La mejor razón, la espada (劇)。『橄欖と月桂樹』 La oliva y el laurel (寓話)。『ノンロニヤ』 Sofronia (悲劇)。

- 一八四四 (二七歳) 『追憶と夢』 Recuerdos y fantasías。『アン・フアン・テノーリオ』
Don Juan Tenorio (宗教幻想劇)。『象牙の壺』La Copa de máfil (悲劇)。
- 一八四五 (二八歳) 初めてフランスに行く。母死亡。歸國。『野百合』La Azucena Silvestre (物語)。「悪魔の挑戦」El Desafío del Diablo『青銅の證人』Un Testigo de bronce (物語)。「村長ロンキエリ」El Alcalde Ronquillo (劇)。
- 一八四七 (三〇歳) 『ナザレン人アラメール』Alhamar, el Nazarito『熱病』La Calentura (劇)。「狂える王」El Rey loco (劇)。ホセ・ソリーリヤ著作集二卷をパリで發行。
- 一八四八 (三一歳) 『女王と寵臣たち』La Reina y los favoritos (劇)。「藝文會へ獻げぬ歌」Ofrenda poética al Liceo Artístico y Literario『破門せられし者』El Excomulgado (劇)。「創世と大洪水」La Creación y el Diluvio (劇)。
- 一八四九 (三二歳) 『マリア』Maria (ガルシシア・デ・ケベードとの合作)。「逆臣教に殉じて語るナ」Traidor, inconfeso y mártir (劇)。
- 一八五〇 (三三歳) 『戀一話』Un cuento de amores (ガルシシア・デ・ケベードとの合作)。
- 一八五一 (三四歳) 『話の話』Cuento de cuentos
- 一八五二 (三五歳) 『グラナダ』Granada (史詩、パリで發表)。

- 一八五三 (三六歳) 『狂人譚』 *Cuentos de un loco*
- 一八五五 (三八歳) バリより玖馬へ、さらにメキシコへ渡る。『追憶の華』第一卷 *La Flor de recuerdos* (メキシコで發表、イスパニヤ系アメリカ諸國民への贈物)。
- 一八五七 (四〇歳) 『アレハンドリーアの薔薇』 *La Rosa de Alejandria* (物語詩)。
- 一八五九 (四二歳) 『追憶の華』第二卷 (玖馬島ハバナにて)。『二輪の薔薇と二本の薔薇の木』 *Dos rosas y dos rosales* (物語、ハバナで發表)。
- 一八六四 (四七歳) 『ソリーリヤ著作集』三卷 (バリで發行)。
- 一八六七 (五〇歳) 「ポケットに兩手を突込んだ」悄然と歸國。『狂人のアルバム』 *Album de un loco* 『魂の戯曲』 *El drama del alma*
- 一八六八 (五一歳) 『山彦』 *Eco de las montañas* 『戀と魂』 *Las almas enamoradas*。
- 一八七〇 (五三歳) 『僧侶と惡魔の間、別名、僧帽をかぶる人』 *Entre los clérigos y diablos, o el Encapuchado* (戯曲)。
- 一八七三 (五六歳) 二月、共和政體となる(七四年十二月まで)。
- 一八七七 (六〇歳) 『マドリード學藝協會における講演』
- 一八八〇 (六三歳) 『往時の回顧』 *Recuerdos de los tiempos viejos* (自敘傳)の執筆、八二年に至って完結。

- 一八八二 (六五歳) 『シッド物語』 Leyenda del Cid
 一八八三 (六六歳) 『巡禮の歌』 El Cantar del Romero
 一八八四 (六七歳) 三萬レアルの年金を國家から受けることになる。
 一八八五 (六八歳) 『ドン・ファン・テノーリオ物語』 Leyenda de don Juan Tenorio
 『わがグラナーダ!』 Granada mía!
 一八八六 (六九歳) 『地靈と女たち』 Gnomo y mujeres
 一八八八 (七一歳) 『飛ぶが如く』 A escape y al vuelo 『ムルシヤから天へ』 De Murcia al cielo 『最後の椰揄』 Mi última brega
 一八八九 (七二歳) グラナーダ、アランブラ宮で、詩人の黄金の冠を授けられる。
 一八九三 (七六歳) 一月二十三日、マドリッドで死亡。

(この略年譜は東京外事専門學校宮城昇君の好意によりてなる。記して謝す。)

昭和二十四年十二月十日 印刷
昭和二十四年十二月十五日 第一刷發行
ドン・ファン・テノリーオ
定價八拾圓



譯者 高橋正武

發行者 岩波雄二郎

印刷者 小坂孟

發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

會員證號A一〇九〇〇四號

路丁本・籠丁本はお取替いたしません

大日本印刷・田中製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かさりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議の際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此事に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待す。

岩波文庫重版書

源氏物語五	島津久基校訂	80
藤原定家歌集	佐佐木信綱校訂	90
金槐和歌集	齋藤茂吉校訂	70
二宮翁夜話	福住正兄筆記 佐々井信太郎校訂	65
正法眼藏(下)	道元禪師著 衛藤即應校計	190
法華義疏(上)	花山信勝校譯	65
茶の	本岡倉覺三著	40
文明論之概略	福澤諭吉著	70
高野聖眉かくしの靈泉	鏡花作	45
田舎教	田山花袋作	75
墨汁一滴	正岡子規著	55
藤村詩抄	島崎藤村自選	70
泣菫詩抄	薄田泣菫著	60
フランクリン自傳	松本慎一譯	80
寒山詩	太田惇顯譯註	85
李太白詩選(上)	漆山又四郎譯註	80
リア	シエイクスピア作 齋藤勇譯	85

過去と現在(上)	石田憲次譯	60
ミル自傳	西本正美譯	110
アランプラ物語	アIEWイング作 馬場久吉譯	90
戦争と平和	トルストイ作 米川正夫譯	110
カラマゾフの兄弟	ドストエーフスキ作 米川正夫譯	140
四人の少女	オールクコット作 鷹岳しづ譯	80
アイソーボス	新村出校編 山本光雄譯	80
寓話集	進藤誠一譯	50
セヴィラの理髪師	シエイクスピア作 野上監一郎譯	80
マクベス	野上監一郎譯	80
ブレイク抒情詩抄	野上監一郎譯	45
隱者の夕暮	ベスマロッター著 長田新譯	55
シユタンツだより		

富論(五)	大内兵衛譯	5
經濟學及課税の原理	リカアドオ著 小泉信三譯	120
經濟學原理(上)	マルサス著 吉田秀夫譯	110
社會學上より見たる「黨衛」	第二部 小方庸正譯	75
勞働者綱領	ラツサア著 小泉信三譯	40
心理學(下)	ウイリアム・ジエームズ著 今田憲譯	85
富に關する省察	チユルゴオ著 永田清譯註	50
政治問答	ラエンケ著 相原信作譯	35
文學史の方法	テエヌ著 瀨沼茂樹譯	40
聖アンセルムス	長澤信壽譯	90
グール・デウス・ホモ		
マリアの讃歌	マルティン・ルター著 石原謙譯	60
蠟燭の科學	吉村善夫譯	40
ニュートン光學	阿部良利譯	100
唯一者まの所有上	堀部良夫譯	40
中國通史下	和那珂通世譯	90



DE JOSÉ ZORRILLA

222

ノ
ン・テ
ノ
ー
リ
オ

高 橋 正 武 訳
ホセ・ソリーリヤ 作

821
ZOR
don

★
★